有本遺跡
男戸嶋古墳
上遠戸嶋遺跡

―津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告2―

1998

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

有本遺跡
男戸嶋古墳
上遠戸嶋遺跡

－津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告２－

1998

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

1．有本遺跡全景(上方のシートがある部分が男戸嶋古墳)

2．有本遺跡B地区全景

1．有本遺跡出土ガラス管玉(牛嶋茂氏撮影)

2．男戸嶋古墳遺物出土状況

序

津山市は、和銅6（713）年に美作国が誕生しますと、国の役所である国府が置かれ、中世には院庄館跡、江戸時代には津山城を中心に町並が整備されてきました。現在の町並みもこれを基盤に発展し、さらに郊外へと市街地が広がっております。今回の遺跡は、中国自動車道の院庄インター近くに計画された、津山総合流通センター建設に伴い調査されたものであります。全部で9遺跡が調査され、報告書は4分冊にわけて刊行する予定にしておりまして、本報告書はその2冊目にあたります。

今回報告するのは有本遺跡、男戸鳴古墳、上遠戸鳴遺跡の3遺跡であります。有本遺跡は、弥生時代の集落と集団墓地からなります。特に集団墓地は土壙墓140基からなり、区画をもつものともたないものの両者が存在します。副葬品は非常に少ないのですが、当時としてはめずらしいガラス製の管玉や鉄鏃があり、吉備地方の墳丘墓から出土する特殊器台が出土しています。

男戸鳴古墳は円墳で埋葬施設として木棺1基が検出されました。副葬品として刀や鉄鏃が多数出土し、これだけ大量の鉄鏃が出土した古墳は美作地方でも珍しく、古墳文化研究の一助となるものと確信しております。

なお、本事ではございますが、発掘調査から報告書作成に至るまで多大なるご協力をいただいた津山市土地開発公社、津山市シルバー人材センター並びに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成10年3月31日

津山市教育委員会
教育長　松尾　康義

例　言

1．本書は津山総合流通センター造成に伴う有本（ありもと）遺跡、男戸鳴（おんどしま）古墳、上道戸鳴（かみおんどしま）遺跡の発掘調査報告書である。
1．津山総合流通センター造成事業で9箇所の遺跡が調査された。報告書は4冊にまとめて刊行する予定であり、本書はその第2冊目である。
1．発掘調査経費はすべて、原因者である津山市上地開発公社の負担によるものである。
1．発掘調査は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター安川豊史、小郷利幸が担当した。
1．本書の執筆・編集は小郷がおこなった。
1．本書に用いたレベル高は海抜高である。また、方位は平面直角座標系第Ⅴ系の北である。
1．本書第3図に使用した「津山総合流通センター内遺跡と周辺の遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山西部）を複製したものである。
1．本書には挿図等に遺構の略称を用いている。略称は次のとおりである。
　ＳＨ：住居跡　ＳＢ：建物跡　ＳＴ：段状遺構　ＳＧ：土壙墓　ＳＫ：土壙　ＳＤ：溝
　ＳＡ：柵列　ＳＪ：土器棺　Ｐ：柱穴
1．整理作業から報告書作成に至るまで、小澤かおり、大谷みゆき、丸玉佳苗、橋本玲恵、浅岡美恵、広政美智子、八幡佳奈絵、野上恭子、岩本えり子、家元弘子各諸氏の協力を得た。また、牛嶋茂、綾野早苗各氏からは、ガラス管玉の写真提供を得た。
1．自然科学的分析として、岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に「有本遺跡Ｂ地区出土土器の胎土分析」の玉稿をいただいた。記して謝意を表します。
1．出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（岡山県津山市沼600-1）に保管している。

本文目次

Ⅰ　津山総合流通センター造成と発掘調査に至る経過……1
1．津山総合流通センター造成に至る経過……1
2．発掘調査に至る経過……1
Ⅱ　津山総合流通センター内の遺跡と周辺の遺跡……2
1．津山総合流通センター内の遺跡……2
2．周辺の遺跡……6
Ⅲ　遺跡の立地と調査の経過……8
1．遺跡の位置と立地……8
2．調査経過……8
（1）調査に至る経過……8
（2）調査の経過……8
（3）調査体制……9
Ⅳ　調査の記録……13
1．有本遺跡……13
（1）位置と立地……13
（2）A地区の調査……13
a．弥生時代……13
b．その他の時代……29
（3）B地区の調査……30
a．弥生時代……30
b．近世……108
c．その他の時代……109
2．男戸嶋古墳……110
（1）位置と立地……115
（2）墳形と規模……115
（3）埋葬施設……115
（4）副葬品……119
3．上遠戸嶋遺跡……121
（1）位置と立地……121
（2）調査の記録……121
Ⅴ　自然科学的分析……123
1．有本遺跡B地区出土土器の胎土分析……123
Ⅵ　まとめ……127
1．有本遺跡の時期と特質について……127
2．上遠戸嶋遺跡の時期について……133
3．男戸嶋古墳について……133

挿 図 目 次

第１図　津山市位置図……1
第２図　津山総合流通センター内周知の遺跡(左)と実際に調査した遺跡(右)……3
第３図　津山総合流通センター内遺跡と周辺の遺跡分布図……5
第４図　有本遺跡周辺地形図及びグリッド配置図……10
第５図　有本遺跡Ａ地区遺構全体図……11～12
第６図　住居跡１平・断面図及び出土遺物……14
第７図　住居跡２平・断面図及び出土遺物……15
第８図　住居跡３平・断面図……15
第９図　住居跡４平・断面図及び出土遺物……16
第10図　建物跡１平・断面図……18
第11図　建物跡２・３平・断面図……19
第12図　建物跡４・５平・断面図……20
第13図　建物跡６・７平・断面図……21
第14図　構列１平・断面図……22
第15図　土壙１平・断面図及び出土遺物……23
第16図　土壙２平・断面図及び出土遺物……23
第17図　土壙３平・断面図……24
第18図　土壙４平・断面図……24
第19図　土壙５平・断面図……24
第20図　土壙６平・断面図……24
第21図　溝１・２平・断面図……25
第22図　溝３平・断面図及び溝１・３出土遺物……26
第23図　段状遺構１～３平・断面図……27
第24図　柱穴１・２平・断面図及び出土遺物……28
第25図　Ａ地区その他の出土遺物……29
第26図　有本遺跡Ｂ地区遺構全体図……31～32
第27図　土壙墓群のグループ分け図……33
第28図　土層ポイント位置図……34
第29図　Ｂ地区土層図……35～36
第30図　区画墓１・２平面図……37～38
第31図　区画墓１列右平・断面図……39
第32図　溝２・３平・断面図……40
第33図　溝３遺物出土状況、土器棺６平・断面図……41
第34図　土器棺５平・断面図及び出土遺物……42
第35図　土壙墓46・47・49平・断面図……44
第36図　土壙墓49遺物出土状況及び出土遺物……45
第37図　土壙墓58、62～68平面図……46
第38図　土壙墓58、62～68断面図……47
第39図　土壙墓59～61平・断面図……48
第40図　土壙墓51、52、54～56平・断面図……49
第41図　土壙墓48、50、53、57平・断面図……50
第42図　区画墓１出土遺物……51
第43図　区画墓２平面図……52
第44図　区画墓２断面図……53
第45図　区画墓２出土遺物……54
第46図　土器棺７・８平・断面図及び出土遺物……55
第47図　区画墓３・Ｆ群平面図……57～58
第48図　土壙墓87～89平面図、溝６・７平・断面図……59
第49図　土壙墓87～89断面図、86平・断面図……60
第50図　土壙墓91・92、溝８平・断面図……61
第51図　土壙墓80～85平・断面図……62
第52図　Ａ・Ｂ群平面図……63～64
第53図　土壙墓１～４平・断面図……65
第54図　土壙墓５～７平・断面図……66
第55図　土器棺１他出土遺物……66
第56図　土壙墓８～12・20・25平・断面図……67
第57図　土壙墓13～19平・断面図……68
第58図　土壙墓21～24平・断面図……69
第59図　Ｂ群出土遺物……70
第60図　Ｃ群平面図……71
第61図　Ｃ群北側石出土状況……72
第62図　土壙墓26～30平・断面図……73
第63図　土壙墓31～36平・断面図……74
第64図　土器棺２・３平・断面図及び出土遺物……75
第65図　土器棺４平・断面図、出土遺物

及びC群出土遺物……76
第66図 土壙墓37～44、溝1平・断面図……77
第67図 土壙墓45平・断面図……78
第68図 D群出土遺物……78
第69図 土壙墓69～72平・断面図……79
第70図 土壙墓73～77平・断面図……80
第71図 E群出土遺物……81
第72図 土壙墓94～97平・断面図……82
第73図 土壙墓93・98～101平・断面図……83
第74図 土壙墓102～106平・断面図……84
第75図 土壙墓107～113平・断面図……85
第76図 土壙墓114～118平・断面図……86
第77図 G～I群平面図……87～88
第78図 土器棺9平・断面図、出土遺物
及びF群出土遺物……89
第79図 土壙墓119～125平・断面図……91
第80図 土壙墓126～128平・断面図……92
第81図 土壙墓129～132平・断面図……93
第82図 土壙墓133～136平・断面図……94
第83図 特殊器台……95
第84図 土器棺10平・断面図及び出土遺物……96
第85図 土壙墓137～140平・断面図……97
第86図 遺構に伴わない出土遺物……98
第87図 段状遺構1・2平・断面図……102
第88図 土器棺11平・断面図……102
第89図 段状遺構1・2、土器棺11出土遺物……103
第90図 近世墓平面図……104
第91図 近世墓1～4・6平・断面図……105
第92図 近世墓5・7・8・10平・断面図……106
第93図 近世墓9・11～16平・断面図……107
第94図 近世墓出土遺物（1）……108
第95図 近世墓出土遺物（2）……109
第96図 土壙1平・断面図……110
第97図 溝9平・断面図……110
第98図 男戸崎古墳他周辺地形図
及びグリッド配置図……111
第99図 男戸崎古墳調査前墳丘測量図……112
第100図 男戸崎古墳墳丘測量図……113
第101図 男戸崎古墳土層図……115～116
第102図 想葬施設平・断面図……117
第103図 出土遺物（1）……118
第104図 出土遺物（2）……119
第105図 土壙1平・断面図及び出土遺物……120
第106図 上遠戸鳴遺跡遺構全体図……121
第107図 住居跡1平・断面図及び出土遺物……122
第1図 有本遺跡B地区および
津山市内各遺跡との比較……125
第2図 有本遺跡B地区および
津山市内各遺跡との比較……125
第3図 津山市内各遺跡の時期、
地域による比較……126
第4図 津山市内各遺跡の時期、
地域による比較……126
第108図 有本遺跡B地区出土土器……128

表　目　次

第1表 津山総合流通センター地内遺跡調査
一覧表……4
第2表 管玉一覧表……45
第3表 土壙墓一覧表（1）……99
第4表 土壙墓一覧表（2）……100
第5表 土壙墓一覧表（3）……101
第6表 近世墓一覧表……109
第1表 有本遺跡B地区出土土器の分析値……125
第7表 土壙墓分類表……128

図 版 目 次

扉図版１－１　有本遺跡全景
2　有本遺跡Ｂ地区全景
２－１　有本遺跡出土ガラス管玉
2　男戸嶋古墳遺物出土状況
図版１－１　有本遺跡遠景
2　有本遺跡遠景
3　有本遺跡全景
図版２－１　有本遺跡Ａ地区全景
2　住居跡１作業風景
3　住居跡１
図版３－１　住居跡１遺物出土状況
2　住居跡２
3　住居跡２（調査後）
図版４－１　住居跡３検出状況
2　住居跡３
3　住居跡４調査風景
図版５－１　住居跡４
2　住居跡４遺物出土状況
3　建物跡１
図版６－１　建物跡２
2　建物跡３
3　建物跡４
図版７－１　建物跡５
2　土壙１土層
3　土壙１遺物出土状況
図版８－１　土壙２土層
2　土壙２
図版９－１　土壙４土層
2　土壙５遺物出土状況
3　土壙６
図版10－１　溝１
2　溝１土層
3　溝２
図版11－１　段状遺構２
2　柱穴１
3　柱穴２
図版12－１　有本遺跡Ｂ地区遠景
2　有本遺跡Ｂ地区遠景
3　有本遺跡Ｂ地区全景
図版13－１　区画墓１全景
2　区画墓１列石（北から）
3　区画墓１列石（南西から）
図版14－１　溝３全景
2　溝３遺物出土状況（１）
3　溝３遺物出土状況（２）
図版15－１　土器棺６検出状況
2　土器棺６
3　土器棺５
図版16－１　区画墓１土壙墓群
2　土壙墓49遺物出土状況
3　区画墓２全景
図版17－１　区画墓２
2　土器棺７・８
3　区画墓３全景
図版18－１　区画墓３列石及び溝６
2　土壙墓86土層
3　土壙墓84・85
図版19－１　Ａ群土壙墓１
2　土壙墓２
3　土壙墓２枕石
図版20－１　Ｂ群全景
2　土壙墓21
3　土壙墓17
図版21－１　土壙墓17枕石
2　Ｃ群作業風景
3　土器棺２
図版22－１　土器棺３
2　土器棺４
3　Ｅ群全景
図版23－１　土壙墓71
2　土壙墓71壁側の掘りこみ
3　Ｆ群全景

図版24－1　土器棺9
2　G・H群全景
3　H群土壙墓134
図版25－1　土器棺10検出状況
2　土器棺10（部分）
3　土器棺10内部状況
図版26－1　土壙墓133
2　土壙墓129～132
図版27－1　I群全景
2　段状遺構1・2土層
3　土器棺11検出状況
図版28－1　土器棺11内部状況
2　土器棺11調査後
3　土器棺11調査風景
図版29－1　近世墓全景
2　土壙1
3　溝9
図版30　出土遺物（1）
図版31　出土遺物（2）
図版32　出土遺物（3）
図版33　出土遺物（4）
図版34　出土遺物（5）
図版35　出土遺物（6）
図版36　出土遺物（7）
図版37　出土遺物（8）
図版38－1　男戸崎古墳遠景
2　男戸崎古墳調査前
3　調査風景
図版39－1　男戸崎古墳（表土除去）
2　男戸崎古墳全景
3　男戸崎古墳全景
図版40－1　盛土状況
2　埋葬施設
3　遺物出土状況（1）
図版41－1　遺物出土状況（2）
2　遺物出土状況（3）
3　粘土出土状況（東小口）
図版42－1　粘土断面状況（西小口）
2　遺物取り上げ状況
3　土壙1検出状況
4　土壙1蓋除去後
図版43　男戸崎古墳出土遺物（1）
図版44　出土遺物（2）
図版45－1　上遠戸崎遺跡・住居跡1土層
2　住居跡1
3　溝1土層
図版46　上遠戸崎遺跡・有本遺跡出土遺物
図版47－1　ラジコンヘリコプター航空写真風景(1)
2　ラジコンヘリコプター航空写真風景(2)
3　ラジコンヘリコプター航空写真風景(3)

Ⅰ　津山総合流通センター造成と発掘調査に至る経過

1．津山総合流通センター造成に至る経過

津山市は、岡山県の北部、中国山地と吉備高原の中間に位置し人口約９万人、南北19㎞、東西15㎞、面積約185㎢、面積の約54％を山林・原野が占め、宅地となっているのは約11％ほどである。市内の東から南へと県内三大河川の吉井川が、加茂川や広戸川など多くの支流をしたがえて流れている。本市の地質は、主に古生層と第三紀層、第四紀層で構成されている。また、市内最高峰は加茂町との境にある天狗寺山（831.8m）である。

この盆地をぬうように昭和50年中国自動車道が開通し、市内に２つのインターチェンジ（津山・院庄）が設けられる。これが産業・教育・文化等あらゆる面に多大なる影響を与え、これを契機に工業団地（院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地、津山中核工業団地）の造成が各地で行われた。この事により阪神地域や九州地域などとの物流の拠点として、中国地方内陸部の中核都市としてますますの発展が期待された。その後、中国横断道が米子さらには総社まで開通し、瀬戸大橋を経由する事により山陰・四国地方を含めた高速交通網が整い、さらに広範囲の物流も可能となる。また、岡山空港の整備からさらに流通網が徐々にではあるが整いつつある。その中で、21世紀へ飛躍する物流・情報の発信基地、情報により高度化した流通団地の形成と情報ネットワークによる配送システムの確立をめざし、中国自動車道院庄インターチェンジ近くに計画されたのが、津山総合流通センターである。

2．発掘調査に至る経過

津山総合流通センター建設予定地は、津山市と鏡野町との境に位置する約93haである。そのほとんどが津山市域であるものの鏡野町域もあるため、開発主体の津山市土地開発公社、鏡野町教育委員会、津山市教育委員会の三者が、埋蔵文化財の取り扱いについて事前に協議を行った。その結果敷地内の鏡野町域については同町教育委員会が、その他の津山市域については同市教育委員会が、埋蔵文化財の有

第１図　津山市位置図

無を確認し、あわせて発掘調査を担当する事とした。その後平成７年３月に造成計画の工程が確定したため、その工程計画に合わせ、埋蔵文化財の調査を実施する事とした。

平成７年６月26日付津土公第17号で文化財保護法第57の３第１項に基づき、津山市土地開発公社理事長中尾嘉伸から「埋蔵文化財発掘の通知」が文化庁長官に提出された。この段階では周知の遺跡として認識されていたのは、田邑丸山古墳群と戸島・戸島B遺跡だけであった。しかし、開発面積が広いため、これら以外についても地形的に遺跡の立地が予想される部分については、立木伐採後に分布調査を実施する事とした。この分布調査の結果、遺跡の立地が広範囲に及ぶと予測されたので、必要箇所については確認調査を実施する事とした。確認調査はバックホーを借り上げ、幅２ｍ程のトレンチを尾根の稜線に直行するように設定した。その結果、遺跡は敷地の東側丘陵に存在する事が判明したため、全面発掘調査は避けられない結果となった。発掘調査の対象となったのは、有木古墳群、有木遺跡（Ａ・Ｂ地区）、上遠戸嶋遺跡、男戸嶋遺跡、男戸嶋古墳、荒神峪遺跡、有元遺跡の７遺跡である。発掘調査に先立ち平成７年７月１日付、津教委文第48号により津山市教育委員会教育長藤原修己から文化財保護法第98条の２第１項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」が文化庁長官宛に提出された。なお、田邑丸山古墳群については現状のまま保存される事となった。

Ⅱ　津山総合流通センター内の遺跡と周辺の遺跡

１．津山総合流通センター内の遺跡

津山総合流通センターは、津山市上田邑、下田邑、戸島、鏡野町布原、沖にまたがる約93haが建設予定の敷地である。その大半を占める津山市域の中に、周知の遺跡として認識されていたのは、第２図左のとおり戸島・戸島B遺跡（男戸嶋遺跡の一部）と田邑丸山古墳群だけであった。今回の調査に先立ち立木伐採前に事前に分布調査を行い、その最新たに有木古墳群の一部を確認した。さらに立木伐採前の段階では樹木の繁茂がはげしく古墳の確認も困難であり、集落遺跡の存在する可能性の大きい丘陵も存在する事から、立木伐採後に再度分布調査を行い、あわせてトレンチ調査による確認調査を実施する事とした。その際の調査面積は約153,000㎡である。その結果第２図右のとおり６遺跡（有木遺跡、上遠戸島遺跡、男戸島古墳、男戸島遺跡、有元遺跡、荒神峪遺跡）を新たに確認し、結局流通センター建設予定地内の遺跡（津山市域）は合計８遺跡となり、田邑丸山古墳群が保存される以外はすべて発掘調査が行われる結果となり、発掘調査面積は約37,000㎡である。なお、鏡野町域については箱荷田頭遺跡と槙之木峪古墳の２遺跡が発掘調査の対象となった。

以下、各遺跡の概要を記す事にする。

（１）**有木古墳群**（ありもと、第２図１）

方墳７基からなる古墳群である。埋葬施設はいずれも東西方向を向いており、竪穴式石槨が１基ある以外はほとんど木棺を使用している。内部に枕石を置くものの他に鉄形器台を転用しているものもある。副葬品としては、鉄剣、鉄鏃などの鉄製品の他、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製勾玉などの装身具が出土している。これら出土遺物から時期は古墳時代前期と考えられる。

「有木古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集』津山市土地開発公社・津山市教育委員会　1997

（２）**有木遺跡**（ありもと、同２・３）

弥生時代後期の集落遺跡が中心であり、便宜的にＡ・Ｂ両地区にわけている。Ａ地区は住居跡４軒、

a．田邑丸山古墳群
b．戸島遺跡
c．戸島B遺跡

1．有本古墳群
2．有本遺跡（A地区）
3．〃　（B地区）
4．上遠戸峠遺跡
5．男戸嶋古墳
6．男戸嶋遺跡
7．荒神峪遺跡
8．有元遺跡
9．田邑丸山古墳群
10．葡萄田頭遺跡
11．槙之木峪古墳

第2図　津山総合流通センター内周知の遺跡（左）と実際に調査した遺跡（右）（S＝1：10,000）

建物跡７軒、貯蔵穴４基などがある。Ｂ地区は集団墓地である。溝や石列による区画が３基ありこの区画内外で約140基の上壙墓を検出した。鉄鏃、ガラス製管玉の他特殊器台の破片が出土している。これ以外に江戸時代の近世墓16基と弥生時代中期の段状遺構も検出している。(本報告書参照)

（３）**上遠戸島遺跡**（かみおんどしま、同４）

弥生時代中期の集落遺跡であり、住居跡１軒を確認した。この住居から石斧、石鏃、砥石などが出土している。(本報告書参照)

（４）**男戸嶋古墳**（おんどしま、同５）

直径15.5m、高さ1.5m程の円墳で、周溝が部分的にめぐっている。埋葬施設は木棺１基で主軸は北東方向を向いている。副葬品として鉄刀２、鉄鏃がある。特に鉄鏃は複数が束となってまとまって出土している。また、周溝外に土師器の甕に赤色顔料を詰め高杯で蓋をしたものがあり、その周辺から滑石製の小玉も１点出土している。(本報告書参照)

（５）**男戸嶋遺跡**（おんどしま、同６）

弥生時代中期の集落遺跡と近世墓からなる。弥生時代の集落は、住居跡18軒、建物跡７軒、貯蔵穴などからなる。住居跡から碧玉製の管玉が出土している。近世墓は９基あり、寛永通宝、くしなどが出土している。

（６）**荒神峪遺跡**（こうじんざこ、同７）

弥生時代後期の集落遺跡。住居跡20軒、建物跡３軒、貯蔵穴などからなる。住居跡には直径が11mを

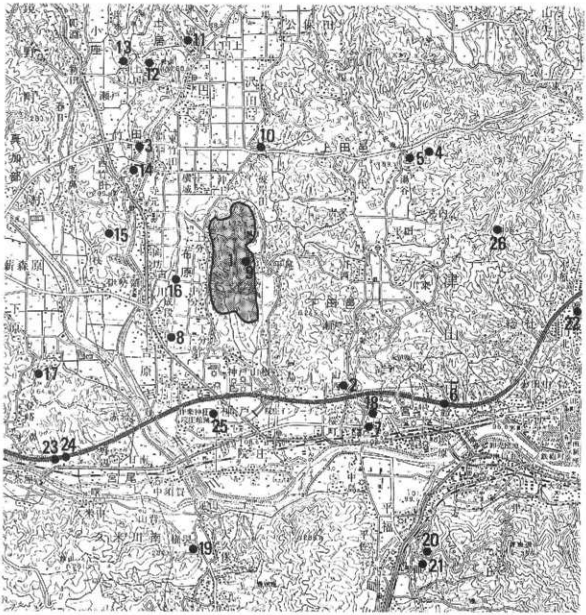
番号	遺跡名	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定
1	有本古墳群	4,000	H7.8.1～12.4	安川・小郷	平成８年度
2	有本遺跡(A地区)	4,500	H7.9.1～10.13	〃	平成９年度
3	〃 (B地区)	2,800	H7.10.13～H8.4.10	小郷	〃
4	上遠戸嶋遺跡	400	H7.12.12～12.15	安川・小郷	〃
5	男戸嶋古墳	650	H8.2.16～2.28 5.7～6.14	小郷	〃
6	男戸嶋遺跡	14,000	H8.2.29～10.8	安川・小郷	平成10年度
7	荒神峪遺跡	6,800	H8.5.15～12.24	小郷	〃
8	有元遺跡	3,200	H8.10.4～H9.1.20	安川	〃
9	口邑丸山古墳群 〃 遺跡	350	H9.1.21～4.9	小郷	平成11年度

第１表　津山総合流通センター地内遺跡調査一覧表(番号は第２図に対応)

測る大形住居もある。石包丁や青銅製の鋳鋼、ガラス製の勾玉、小玉などが出土している。その他、縄文時代と考えられる落とし穴や近世墓などがある。

（7）**有元遺跡**（ありもと、同8）

弥生時代後期と古墳時代後期の集落遺跡である。弥生時代は住居跡2軒、貯蔵穴などを検出した。古墳時代としては、住居跡4軒、建物跡2軒、段状遺構などを検出し、須恵器、土師器、鉄滓が出土している。



1．津山総合流通センター内遺跡
2．大開遺跡
3．竹田遺跡
4．アモウラ東遺跡
5．アモウラ遺跡
6．二宮大成遺跡
7．二宮遺跡
8．九善丁場遺跡
9．田邑丸山古墳群
10．東花穴古墳群
11．赤峪古墳
12．土居天王山古墳
13．土居妙見山古墳
14．竹田妙見山古墳
15．古川3号墳
16．大開遺跡
17．郷観音山古墳
18．美和山古墳群
19．狐塚古墳
20．門の山古墳群
21．寺山古墳群
22．美作国府跡
23．久米廃寺
24．宮尾遺跡
25．院庄館跡
26．神楽尾城跡

第3図　津山総合流通センター内遺跡（トーン部分）と周辺の遺跡分布図（S＝1：50,000）

（8）**田邑丸山古墳群・遺跡**（たのむらまるやま、同9）

円墳9基で構成されていたが現存するのは5基である。その内1号墳は直径37mの円墳で竪穴式石槨から乳文鏡1面、鉄斧、剣、車輪石形銅器2点が出土している。2号墳は、円墳と考えられていたが、確認調査の結果全長40m程の前方後方墳で竪穴式石槨から鏡が4面出土したと伝えられているが、所在は不明である。3～5号墳については出土遺物は知られていない。また、9号墳（古墳がどうかは不明）から鉄形器台の破片が発見されている。本古墳群（1～5号墳）は緑地公園として整備される予定である（註1）。また、古墳の東側の丘陵斜面から弥生時代の住居跡2軒が検出された。

（9）**葡萄田頭遺跡**（ぶどうだがしら、鏡野町、同10、註2）

弥生時代中期から後期の集落遺跡。住居跡、建物跡、貯蔵穴、木棺墓などを検出。

（10）**槇之木峪古墳**（まきのきざこ、鏡野町、同11、註2）

円墳で埋葬施設は木棺と推定される。須恵器が出土しており、6世紀後半ごろの古墳である。

2．周辺の遺跡

津山総合流通センターは、吉井川の支流戸島川右岸の南北に長い低丘陵一帯が敷地であり、樹枝状に小さな丘陵が派生している。周辺では西側の鏡野町布原地区にかなり広い平野部が存在するが、反対の東側は西側ほど広くはなく、どちらかと言えば奥まった地形である。そのため集落としての生活基盤を周辺に求めると西側の布原地域の方が重要視されていたと考えられる。この事が周辺の遺跡の分布状況（西側の鏡野町側に多い）からも伺える。

以下周辺の遺跡を時代別に概観してみる（第3図参照）。

（旧石器・縄文時代）

旧石器時代の遺跡としては、大開遺跡（津山市、註3）が知られており、ナイフ形石器が1点出土している。この遺跡では縄文時代早期の押型文土器や石鏃などが出土しているが明確な遺構は確認されていない。同じく早期の遺跡として、竹田遺跡（註4）がある。この遺跡では住居跡6軒などの遺構が検出され、数多くの土器片と石鏃などが出土している。流通センター内の遺跡では遺物の出土はほとんどないが、狩猟用の落とし穴と考えられる遺構が多数検出されている。

（弥生時代）

この時代は丘陵上に集落が営まれている事が多い。中国自動車道建設などに伴い調査された二宮大成遺跡（註5）、二宮遺跡（註6）、アモウラ遺跡（註7）などがあり、大開遺跡（津山市）では、住居跡4軒が検出され板状鉄斧が出土している。また竹田遺跡（註8）では、列石による区画をもつ墳墓が調査されている。この墳墓は埋葬施設として土壙墓14基、土器棺4基があり、後期前半頃の所産である。また、九番丁場遺跡（註9）では、直径11.9mの大形住居からガラス製の管玉が出土している。

（古墳時代）

集落遺跡としては西側布原地域の平野部に大開遺跡（鏡野町、註10）があり古墳時代初頭の住居跡が検出されている。また、アモウラ東遺跡（註11）では、住居跡や段状遺構が検出され鉄滓や須恵器、土師器が多量に出土し、6世紀末から7世紀初頭頃と考えられている。古墳では吉井川の流域と内陸部では、古墳群の構成が大きく異なっている。内陸部では円・方を主体とした古墳群であるのに対し、流域では前方後円墳が一定間隔に築かれている。内陸部では流通センター予定地内の有木古墳群（方墳）、東花穴古墳群（方墳7基、註12）などがあり、前方後円墳は見られない。逆に吉井川流域では、美作最

大の美和山１号墳（全長80m、註13）、狐塚古墳（全長60m、註14）、郷観音山古墳（全長43m、註15）、古川３号墳（全長30m、註16）、赤峪古墳（全長45m、註17）、竹田妙見山古墳（全長36m、註18）、上居天王山古墳（全長27m、註19）などがあり、首長の系譜がある程度たどれる地域である。

（古代以降）

古代になり東４kmに美作国府（註20）が沖積地を臨む段丘上につくられると、南西３kmには出雲街道沿いに久米郡衙に比定されている宮尾遺跡（註21）、久米廃寺（註22）が隣接して存在する。また、中世になると院庄館跡（註23）が南1.5kmに築かれる。この事から、おそらくこの辺りが古代～中世にかけて交通の要所であった事が伺える。ただ近世になるとこの院庄もお城の候補地としてあげられるが、東５kmの鶴山に津山城が築かれ、同時に城下町や街道が整備されていく。

（註１）土居徹他「田邑丸山古墳群」『津山市文化財年報１』津山市教育委員会1975
整備に伴い、1997年に確認調査を実施。
（註２）鏡野町教育委員会立石盛則氏に御教示を得た。
（註３）平岡正宏「大開古墳群・大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集』津山市教育委員会1994
（註４）土居徹「竹田遺跡」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
（註５）栗野克巳他「一宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６』岡山県教育委員会1973
（註６）高畑知功他「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会1979
（註７）1981～1982年広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が調査を実施。報告書未刊。
（註８）今井堯他『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会1984
（註９）氏平町開「九善」場遺跡」『最近の岡山県下における埋蔵文化財発掘調査概要の報告会』1996
（註10）鏡野町教育委員会が1994年～1995年、岡山県教育委員会が1995年に調査。
井上弘「国道179号改良工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告26』岡山県教育委員会1996
（註11）行田裕美「アモウラ東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第36集』津山市教育委員会1990
（註12）立石盛則「鏡野町東化穴古墳群の調査」『調査団ニュース第３号』岡山県遺跡保護調査団1992
（註13）中山俊紀「史跡美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』津山市教育委員会1992
（註14）小郷利幸「狐塚古墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社1991
（註15）上垣徹「郷観音山古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
（註16）安川豊史「古川３号墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社1991
（註17）近藤義郎「赤峪古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
（註18）十居徹「美作鏡野町十居妙見山古墳」『古代吉備第６集』古代吉備研究会1969
（註19）安川豊史「上居天王山古墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社1991
（註20）岡田博他「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６』岡山県教育委員会1973
岡田博「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』岡山県教育委員会1978
安川豊史「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集』津山市教育委員会1994
平岡正宏「美作国府跡（総社小林アパート）発掘調査概要」『年報津山弥生の里第２号』津山弥生の里文化財センター1995
安川豊史他「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集』津山市教育委員会1995
平岡正宏「美作国府跡（藤森地点）の調査」『年報津山弥生の里第３号』津山弥生の里文化財センター1996
（註21）梅本惣司他「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会1973
（註22）栗野克巳「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会1973
栗野克巳「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』岡山県教育委員会1978
（註23）河本清「史跡院庄館跡発掘調査報告」津山市教育委員会1974
行田裕美「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第７集』津山市教育委員会1981

Ⅲ　遺跡の立地と調査の経過

1．遺跡の位置と立地

有木遺跡は岡山県津山市下田邑2237番地他、男戸嶋古墳は同戸島638番地、上遠戸嶋遺跡は同下田邑2352番地に所在する。有木遺跡は有木古墳群の南北２地区に分けられ、北側（A地区）は有木古墳群の存在する丘陵頂部から西に舌状に伸びる丘陵頂部及び斜面が範囲である。南側（B地区）は有木古墳群から続く痩せた丘陵である。男戸嶋古墳は有木遺跡の南側、南北に連なる比較的なだらかな丘陵の最高所に存在する。また、上遠戸嶋遺跡は、流通センター内の遺跡が集中する東側の丘陵より離れ単独で存在し、田邑丸山古墳群から北西に伸びた丘陵の北側斜面である。本遺跡の西側の丘陵後縁には鏡野町との境界が存在し、その丘陵上には葡萄田遺跡が存在する。

2．調査経過

（1）調査に至る経過

男戸嶋遺跡（戸島遺跡）以外は周知の遺跡ではなく、樹木伐採後の分布調査及び確認調査によって発見された遺跡である。前回報告した有木古墳群の調査と並行して周辺丘陵部にバックホーにより等高線に直交する形で幅２m程のトレンチを随時入れ、有木遺跡（A・B地区）、男戸嶋遺跡、上遠戸嶋遺跡、荒神峪遺跡、有元遺跡が新たに発見された。また、男戸嶋古墳は樹木伐採後の分布調査時に確認していた。一部分周知の遺跡であった男戸嶋遺跡についても遺跡が広範囲に及ぶ事が確認された。そのため遺跡の数及び調査面積等を考慮し、造成工事の計画にも合わせて年間の調査計画を立て、有木古墳群の発掘調査に継続して各遺跡の調査をそれぞれ実施した。その調査経過は以下の通りである。

（2）調査の経過

平成７年８月１日から有木古墳群の調査を開始し、９月１日からは並行して有木遺跡A地区（古墳群の北西側）の調査をおこなった。A地区では弥生時代の住居跡、建物跡、貯蔵穴や溝、多数の柱穴などを検出したが、同一丘陵の尾根線に存在する有木古墳群下層にも住居跡が存在する事が古墳調査時のトレンチで判明したため、古墳群調査終了後１～５号墳に関しては盛土などを除去し下層の精査を行った。その結果２号墳の下層に住居跡１軒、５号墳の下層に貯蔵穴などを検出した。10月13日に古墳群とA地区の一部についてラジコンのヘリコプターで航空写真を撮影した。B地区は10月13日から調査を開始し、弥生時代の集団墓地が丘陵全面に存在する事が判明した。調査の結果、区画をもつ墳墓が現状で３基ありその内外に約140基の土壙墓（木棺墓など）、11基の土器棺などを確認した。B地区の遺構検出後、平成８年２月23日にラジコンのヘリコプターでB地区の航空写真を撮影した。B地区に関しては遺構測量のため５m間隔のグリッドを設定し、学生アルバイトの応援を得て遺構の写真撮影、測量等を実施した。遺構の測量と並行し２月29日からは男戸嶋遺跡の調査を開始した。B地区の調査終了後平成８年３月30日に有木遺跡を中心とした一般を対象の現地説明会を開催した。当日はあいにくの天気にもかかわらず多くの参加者（約70名）があった。男戸嶋遺跡は調査面積の割りには遺構の密度は少ないが、斜面に多くが存在するため土砂の運搬にかなり苦労した。主な遺構としては縄文時代と考えられる落とし穴、弥生時代の住居跡・建物跡、近世の墓などがある。この男戸嶋遺跡の北端最高所にあるのが男戸嶋古墳である。本古墳の調査は平成８年２月16－28日に表土剥ぎなどをおこない、直径15.5m程の円墳であることを確認した。その後５月７日から埋葬施設の検出をおこない木棺１基を確認した。内部からは鉄刀や

多くの鉄滓が出土した。また、墳丘外から赤色顔料の入った土師器の埋納遺構も検出され、埋葬施設の木棺内部にも赤色顔料が使用されている事から、この両者の成分分析もおこなった。本古墳の遺構の実測、写真撮影は6月14日に終了した。その後、男戸鳴遺跡、荒神峠遺跡、有元遺跡、田邑丸山古墳群、田邑丸山遺跡の調査を継続して行い、本報告書を作成した。

（3）調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下の通りである。

津山市教育委員会　教育長　藤原修己（～H8．9．30）
松尾康義（H8．10．1～）
教育次長　内田康雄（～H8．3．31）
中尾義明（H8．4．1～H9．3．31）
山本直樹（H9．4．1～）
文化課長　綛山三千穂（～H9．3．31）
永礼宣子（H9．4．1～）
文化財センター所長　神田久遠
次長　中山俊紀
主査　安川豊史（調査担当）
主事　小郷利幸（　〃　）
主任　青木睦子（事務担当、～H8．9．30）
主事　坂本裕子（　〃　、H9．4．1～）

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元弘子、小澤かおり、大谷ゆかり、丸王伴苗、橋本玲恵、浅岡美恵、広政美智子、八幡佳奈絵が担当した。

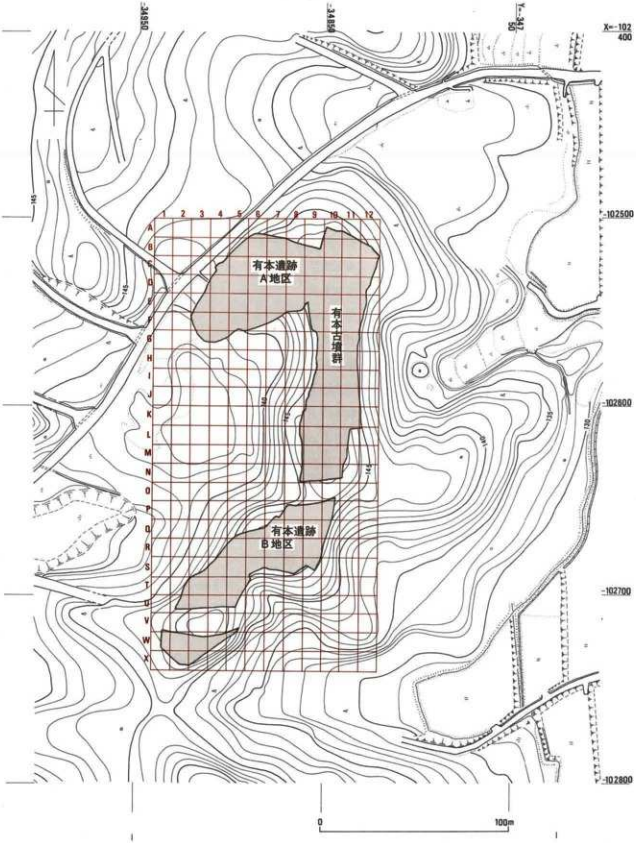
発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。（敬称略）

（調査作業員）青木　保、内田克巳、内田久仁男、沢　保、柴田揚一、杉山由和、高山　実、田口晴道、田中琢志、中尾一雄、中村　信、西本　徳、橋本　満、平林一好、広野　守、細田憲一、三好昭二、水鳥友一、水杉暁四、横部　明、米井英祐、脇山　康、脇山静馬、青木敬子、青木照美、青木敏子、稲村奈美子、右近冬子、内田秀子、内山芙喜子、坂手美恵子、高橋不三子、高山祥子、田淵高子、橋本琴枝、

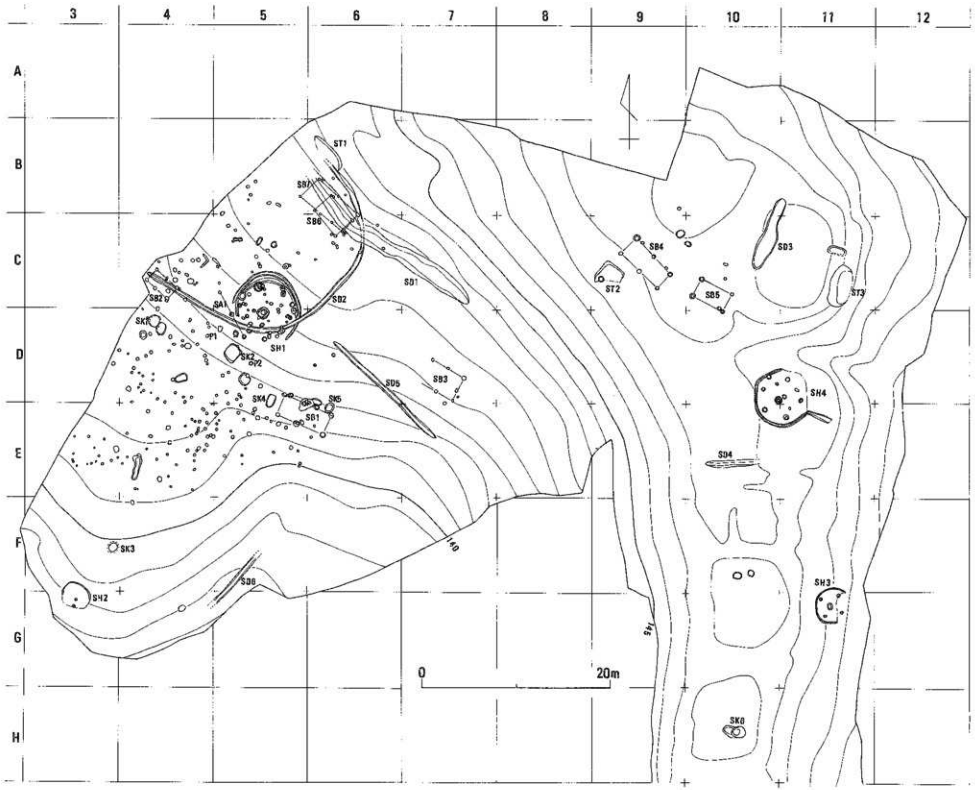
（学生アルバイト他）赤坂健太郎、為貞義弘、仁木良知、藤本　優、片岡大助、田淵芳宣、熊代昌之、細川　浩、八木利恵、春名葉子

なお、発掘調査から報告書作成にいたるまで、文化財センター職員及び下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

綾野早苗、宇垣匡雅、牛嶋　茂、小野雅明、尾上元規、草原孝典、肥塚隆保、小暮律子、近藤義郎、白石　純、高橋進一、立石盛詞、田中清美、椿　真治、上居　徹、平井典子



第4図　有本遺跡周辺地形図及びグリッド配置図(S＝1：2,000)



第5図　有本遺跡A地区遺構全体図（S＝1：400）

Ⅳ　調査の記録

1．有本遺跡

（1）位置と立地

有本遺跡は岡山県津山市下田邑2237番地他に所在する。津山総合流通センター建設予定地の東側、南北にのびるやせ尾根が存在する。この尾根上にある有本古墳群の下層を含む北側の丘陵をA地区（A～H－3～12区）、南側をB地区（N－X－1～11区）と便宜上分けている。A地区は弥生時代の集落遺跡、B地区は弥生時代の墳墓群が中心である。A地区は標高138～148m、B地区は標高143～149mを測り、周辺平野部との比高差はA地区で約23m、B地区で約25mである。調査面積はA地区約4,500㎡、B地区約2,800㎡、両者合わせて約7,300㎡である。

（2）A地区の調査

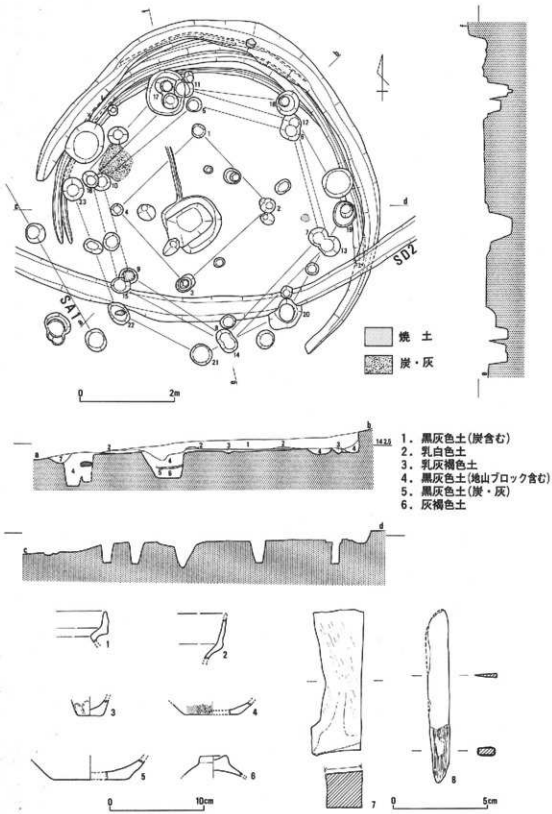
a弥生時代

弥生時代の遺構としては、住居跡4軒、建物跡7軒、貯蔵穴等6基、溝1などがある。その他多数の柱穴があり、今回確認できなかった建物跡などが存在するものと考えられる。

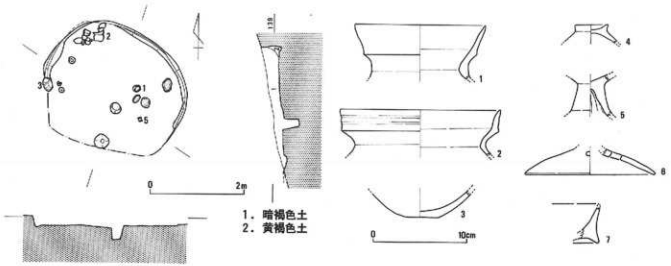
住居跡1（SⅡ1、第6図）

C・D－5区、丘陵の緩斜面に存在する円形の住居跡であるが、上面はかなり削平を受け、さらに斜面麓もすでに床面が流失している。そのため壁溝は全周せず、さらに南側は溝2（SD2）によって切られている。この溝については出土遺物が無いため時期決定はできないが、後世の排水ないしは道と考えられる。また、柵列1（SA1）とも切り合っているが、両者の前後関係は明確でない。本住居は少なくとも4回の建て替えによりその郤度拡張している。各段階の壁溝の残りは良くないが、最初は直径5.2m程で4本柱（柱穴1～4）、1回目の建て替えで直径6.3m程、6本柱（柱穴5～10）、2回目も同じ6本柱（柱穴11～16）で柱1本分外側にして直径6.8m程に拡張している。3回目は直径7m程、7本柱（柱穴17～23）、4回目は直径7.4m、7本柱で最大に拡張しているが、柱穴は3回目のものをそのまま使用し、一部で新しい柱穴に替えているものと推測される。いずれも中央穴を中心に同心円状に拡張しているため、中央穴自体も一部で拡張など改変されているものと考えられ、少なくとも今回検出した中央穴は、最終段階に使用していたものである。この中央穴埋土には灰層が中央付近にレンズ状に見られる。また中央穴の周囲は薄鉢状に盛り上がっている。柱穴には内部から平らな石が出土しているものが2つ（柱穴9・22）あり、柱材埋設時の根石などに使用していた可能性が考えられる。床面には焼土面や炭・灰の散布が散在的に見られる。また、最終段階の壁溝内より鉄製品（8）が1点出土している。この住居の埋土はほぼ1層である。

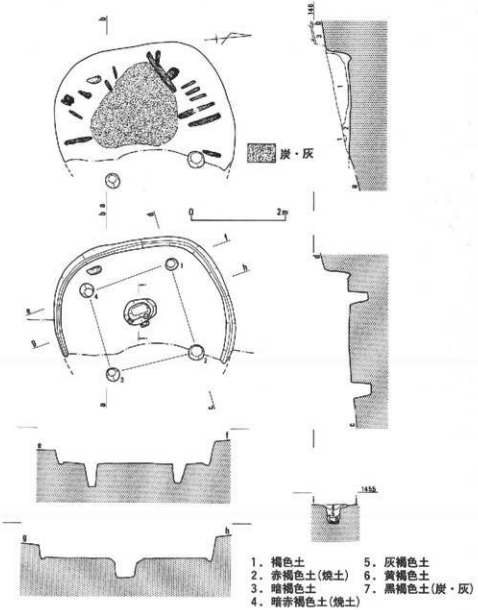
出土遺物はいずれも破片でかろうじて実測できたもののみ図示した。1・2は甕の口縁部の破片であり、3～5は底部で3の外面には指頭圧痕、4の外面にはヘラミガキが見られる。6は蓋である。7は柱穴22から出土した頁石製の砥石で、断面は方形で1面のみに使用痕がある。8は壁溝内より出土した刀子状の鉄製品で、刃部分が一部欠損するが現長9㎝、刃部幅1.1㎝を測り、茎の部分には木質が残存する。この他図示していないが、柱穴6・13・14・23から土器片が、柱穴20からは土器片と炭が出土している。また、中央穴からも土器片が少量出土している。



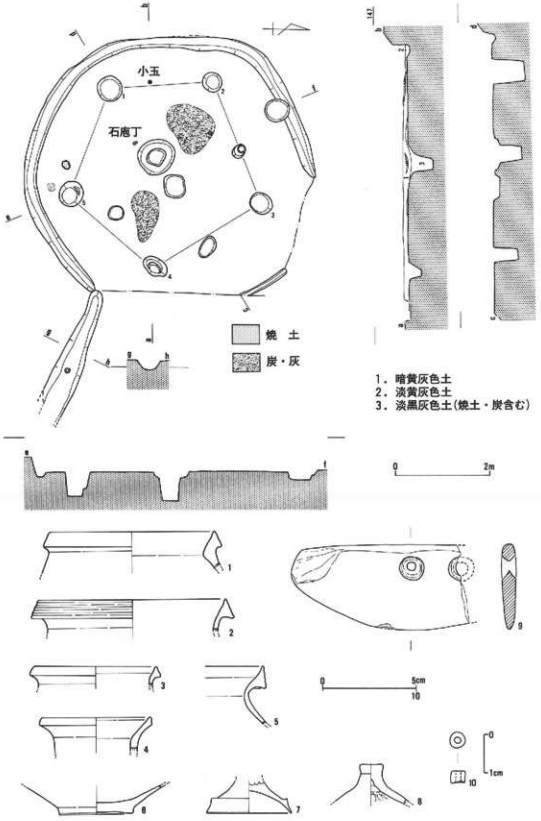
第6図　住居跡1平・断面図(S＝1：80)及び出土遺物(1～6…S＝1：4、7・8…S＝1：2)



第7図　住居跡2平・断面図(S＝1：80)及び出土遺物(S＝1：4)



第8図　住居跡3平・断面図(S＝1：80)



第9図　住居跡4平・断面図(S＝1：80)及び出土遺物(1～8…S＝1：4、9…S＝1：2、10…S＝1：1)

住居跡2（ＳＨ２、第７図）

Ｆ・Ｇ－３区、丘陵の先端部に存在する住居状の遺構であるが、斜面側の床面はすでに流失している。掘り方は直径3.1m程のだ円形であるが内部には明瞭な柱穴が中央付近に１個あるのみである。そのため一般的な住居（複数の柱穴や中央穴をもつ）ではなく、簡易な構造の建物かも知れない。規模がさほど大きくない事から、内部に柱穴をもたない簡単な構造で屋根を構築していたのだろう。壁溝は最大幅20cm程で現状では全周する。埋土はほぼ１層で、内部の床面からは土器片がややまとまって、さらに中央付近東よりに大きめの石が３個出土している。

出土遺物の内１は壷の２は甕の口縁部で、２の外面には２条の凹線がめぐっている。３は底部の破片で、４は蓋の破片、５・６は高杯の脚部で５の内部にはしぼり痕が見られる。７は器台の口縁部と考えられる。

住居跡3（ＳＨ３、第８図）

Ｆ・Ｇ－11区、有本４号墳のある丘陵の東斜面に存在する直径3.7m程の円形住居跡である。斜面側はすでに床面が流失している。主柱は４本で、建て替えはおこなわれていない。壁溝は幅20cm程で、現状ではほぼ壁に沿って全周する。本住居は焼けており、検出時には炭化した柱材が炭や炭化物の上に放射状に出土し、さらにその上を覆うように屋根材の散布が広範囲に観察された。西側の壁よりにはこれら炭化材に混ってやや大きめの石が１個あり、これはかなりの火をうけており、表面は赤色に変色しひび割れていた。中央穴は直径70cm程の楕円形を呈し、２段掘りで深さ40cmである。この埋土は互層になっており最下層付近に炭層がレンズ状に見られる。

出土遺物は埋土から土器片が出土しているが、小片のため図示できない。

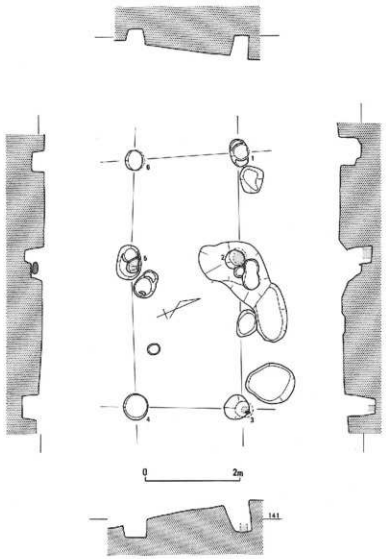
住居跡4（ＳＨ４、第９図）

Ｄ・Ｅ－10・11区、有本２号墳下層の丘陵頂部に存在する。直径6.2m程の円形住居であるが、北側は古墳の周溝掘削により削平を受けている。柱穴は５本で建て替えはおこなっていない。壁溝は幅25cm程ではぼ全周し、さらに東側から外方斜面へと伸びている。この接続部分が暗渠状になっていたかは現状では確認できない。床面の中央穴の周囲にはかなり広範囲に炭や灰の分布が２カ所見られ、この炭の中には土器片が含まれている箇所もある。また、柱穴５の周囲に焼土面が１カ所見られる。中央穴は２段掘である。この住居の埋土は基本的に１層であるが、中央穴の上層には炭層がレンズ状に堆積している。床面から石庖丁１点（９）、埋土からガラス製小玉１点（10）などが出土している。

出土遺物の内１～３・５は甕、４は壷の口縁部で２・５の外面には３～４条程の凹線が巡っている。６は底部でやや上げ底ぎみである。７は台付製品の脚台部分、８は柱穴２から出土した壷で内部には指頭圧痕が見られる。９は緑色片石製の石包丁で片側の円孔部分から半分程が欠損している。10はガラス製の小玉で青色を呈し、長さ３㎜、径3.9㎜、孔径1.8㎜である。また、図示していないが柱穴１・５、中央穴から土器片が出土している。

建物跡1（ＳＢ１、第10図）

Ｄ・Ｅ－５・６区、緩斜面に存在する２×１間の建物である。柱穴はすべて円形であるが、柱穴２と５のみ２～３回の建て替えを行っている。柱穴２と３には柱痕が残存し柱材は直径16～25cm程である。棟方向はＮ－68°－Ｗで、規模は桁行全長5.25m、梁間全長2.3m、床面積は約12㎡である。柱穴２の柱痕の残っていない柱穴から高杯の破片（第25図22）が出土し、柱穴１からも土器片が少量出土している。



第10図　建物跡1平・断面図(S＝1：80)

建物跡2（SB2、第11図）

C－4区、緩斜面に存在する2×1間の建物である。柱穴はすべて円形である。棟方向はN－48°－Wで、規模は桁行全長3m、梁間全長1.5m、床面積は約4.5m²である。出土遺物は皆無である。

建物跡3（SB3、第11図）

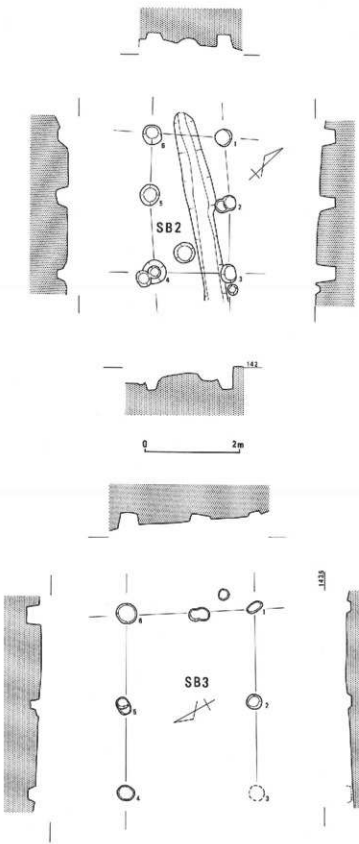
D－7区、緩斜面に存在する。柱穴はすべてそろっていないが2×1間の建物と推測される。柱穴3はすでに流失しているものと考えられる。棟方向はN－61°－Wで規模は桁行現長3.7m、梁間全長2.7mである。柱穴6から土器片が出土しているが小片のため図示できない。

建物跡4（SB4、第12図）

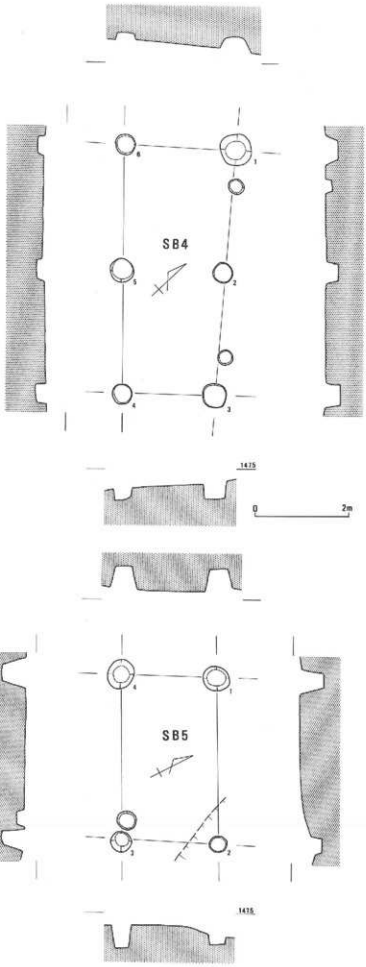
C－9区、丘陵頂部に存在する2×1間の建物である。柱穴はすべて円形で柱穴1のみやや大きめの掘り方である。棟方向はN－47°－Wで、規模は桁行全長5.2m、梁間全長2.3m、床面積は約22m²である。出土遺物は皆無である。

建物跡5（SB5、第12図）

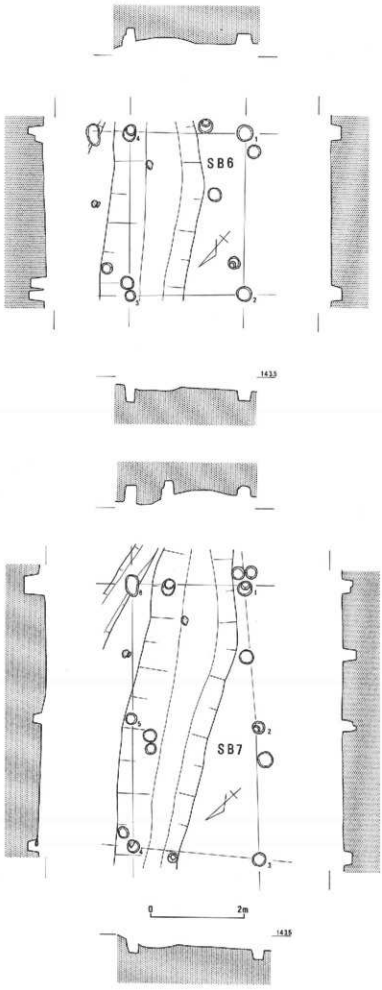
C－10区、丘陵頂部に存在する1×1間の建物である。柱穴はすべて円形である。棟方向はN－63°



第11図　建物跡２・３平・断面図(S＝１：80)

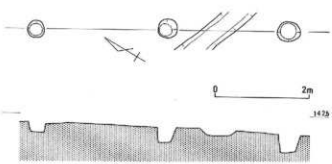


第12図　建物跡４・５平・断面図(S＝１：80)



第13図　建物跡６・７平・断面図(S＝１：80)

－Wで、規模は桁行全長3.5m、梁間全長2.1m、床面積は約7.4㎡である。柱穴3から土器片が出土しているが小片のため図示できない。



第14図　棚列1平・断面図（S＝1：80）

建物跡6（SB6、第13図）

B・C－6区、緩斜面に溝1が埋まった後につくられた1×1間の建物である。柱穴はすべて円形である。棟方向はN－48°－Wで、規模は桁行全長3.5m、梁間全長2.4m、床面積は約8.4㎡である。出土遺物は皆無である。

建物跡7（SB7、第13図）

B・C－6区、緩斜面に溝1が埋まった後につくられた2×1間の建物である。建物6とは重複するが両者の前後関係は明瞭でない。柱穴はすべて円ないしは楕円形である。柱穴1・2は二段掘りの掘り方で、柱穴4には平らな石が内部から出土し、柱堀設時に使用したものと推測される。棟方向はN－48°－Wで、規模は桁行全長5.6m、梁間全長2.4m、床面積は約13.4㎡である。出土遺物は柱穴6から甕の口縁部と底部（第25図12・13・15）の破片が出土している。

棚列1（SA1、第14図）

C・D－5区、住居跡1と重複して存在し等間隔に並ぶ3個の柱穴を検出した。一番北側の柱穴のみやや深さが浅い。柱間は2.65－2.7mで、主軸方向はN－30°－Wである。出土遺物は皆無である。

土壙1（SK1、第15図）

D－4区、住居跡1の西9mに存在する土壙である。掘り方上面は直径1.3m程の円形で袋状に掘りこまれているため床面は直径1.3m、深さは1.35mを測る。埋土は3層で最下層から土器が数個体出土している。

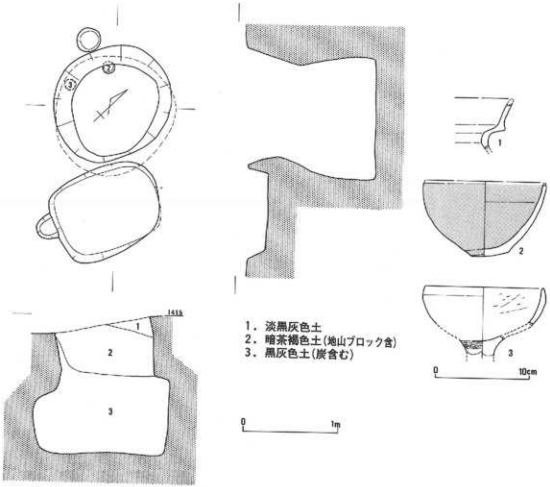
出土遺物の内1は甕の口縁部、2は鉢で口縁端部は欠損しているがほぼ復元できる。口径およそ12.5cm、内外面とも赤色顔料で塗られている。3は高杯で破片から復元している。口径12.4cm、杯部の内面には明瞭でないがヘラケズリらしきケズリを施している。接合部分の外面にはヘラミガキを施している。

土壙2（SK2、第16図）

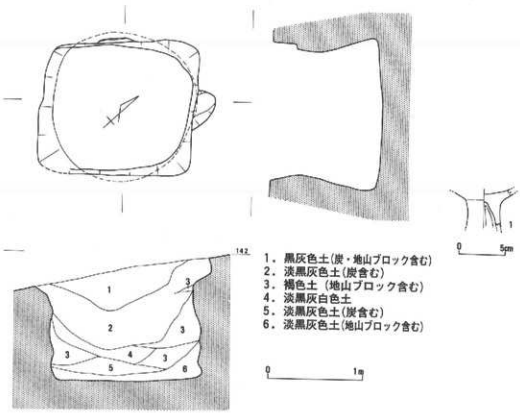
D－5区、住居跡1の南に接して存在する土壙である。現状での掘り方上面は隅丸方形であるが、床面が円形である事から、本来上面の形状は円形で四隅が崩落してしまっている可能性が考えられる。本土壙も袋状に掘りこまれており上面一辺1.4×1.65m、床面直径1.5m、深さ1.1mを測る。埋土の状況から3分の1程度壁の崩落などでやや不規則に埋まった後、残りは自然堆積したものと推測される。埋土から土器片が出土している。図示できたのは1点で1は高杯の脚部である。

土壙3（SK3、第17図）

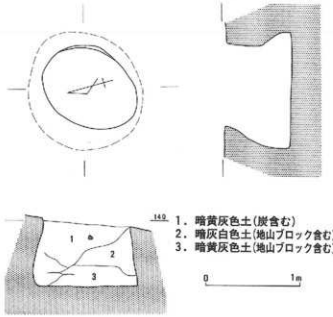
F－3区、住居跡2の北5mに存在する土壙である。掘り方上面は直径0.8×1.05m程のだ円形で内部は袋状に掘りこまれ、床面直径1.25m、深さ0.7mを測る。埋土は3層で内部から土器片や石が出土している。埋土の状況から、南側から徐々に埋まっていった状況が推測される。出土遺物は小片のため図示できない。



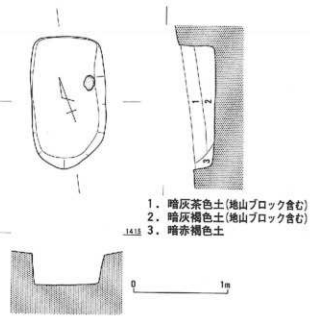
第15図　土壙1平・断面図(S＝1：40)及び出土遺物(S＝1：4)



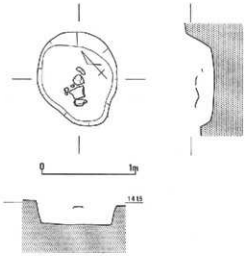
第16図　土壙2平・断面図(S＝1：40)及び出土遺物(S＝1：4)



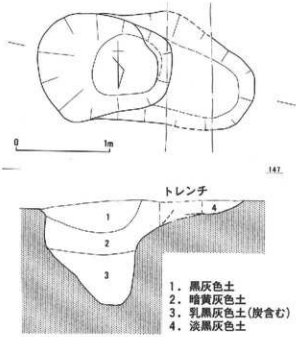
第17図　土壙３平・断面図(S＝１：40)



第18図　土壙４平・断面図(S＝１：40)



第19図　土壙５平・断面図(S＝１：40)



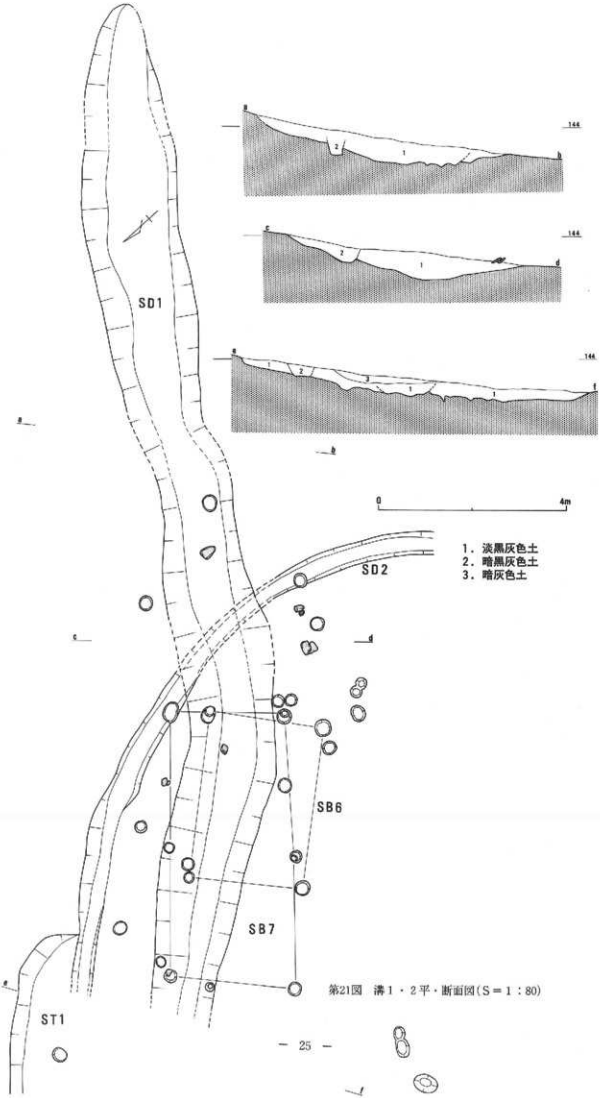
第20図　土壙６平・断面図(S＝１：40)

土壙４（ＳＫ４、第18図）

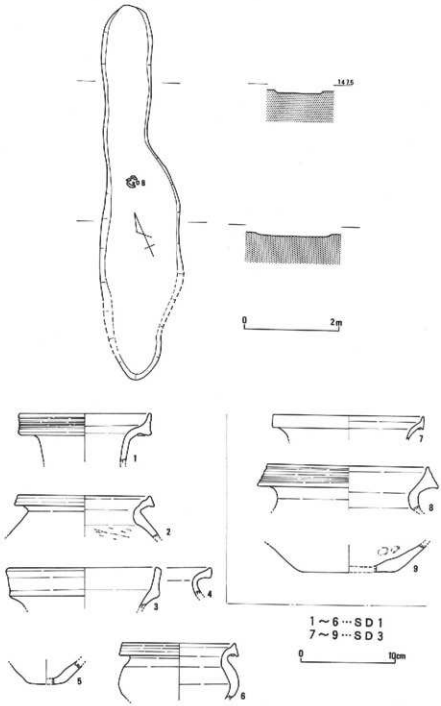
Ｄ－５区、建物跡１の西に接して存在する土壙である。掘り方は長さ1.4m、幅0.8m程の長方形で、深さ0.38mを測る。内部からやや大きめの平らな石（円礫）が１個東側壁よりで出土しているが、これの用途については不明である。埋土は３層で、出土遺物は皆無である。

土壙５（ＳＫ５、第19図）

Ｅ－６区、建物跡１の北に接して存在する土壙である。掘り方は直径１m程のやや不整形な楕円である。埋土はほぼ１層で内部から土器片がまとまって出土している。出土遺物として底部以外はほぼ復元



第21図　溝1・2平・断面図(S＝1：80)



第22図　溝３平・断面図(S＝１：80)及び溝１・３出土遺物(S＝１：４)

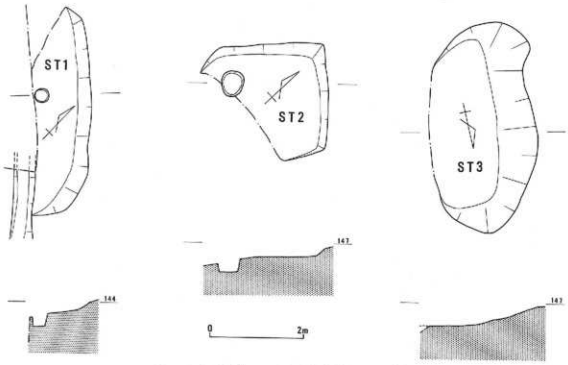
できる甕（第25図１）が出土している。１は口径16cm、現高27.5cm、表面摩滅のため外面の調整は不明だが、内面にはヘラケズリを施している。

土壙６（ＳＫ６、第20図）

Ｈ－10区、有木５号墳の下層に存在する。掘り方は直径1.4×1.15m程の楕円形で、西側には付随するものか不明の浅い土壙と重複している。本土壙の掘りこみは袋状ではなく、床面も平らではない不整形である。深さ最大で1.1m、埋土は３層であるが内部からの出土遺物は皆無である。

溝１（ＳＤ１、第21・22図）

Ｂ・Ｃ－６・７区、緩斜面に等高線に対し平行に存在する溝である。幅1.5～２m、現長20.1mで調



第23図　段状遺構１～３平・断面図(S＝１：80)

査区外に続くものと考えられる。断面は緩やかなU字形を呈する所がほとんどで、埋土は黒灰色１層が基本である。この溝は溝２によって切られ、重複する建物跡６・７は切り合い関係からこの溝が埋まった段階に作られているようである。埋土から土器片が出土している。出土遺物は第22図に図示している。１は壺で口縁の外面に４条の凹線がめぐり、２～４は甕の口縁部で２は凹線が巡る。５は底部、６は小形の甕で口縁の外面に凹線が巡る。

溝３（ＳＤ３、第22図）

Ｂ・Ｃ－10・11区、有本１号墳の下層に存在する。古墳構築時に削平されているものと考えられ、現状で最大幅1.7m、長さ7.9m、深さ0.1mを測る。内部から土器片が出土している。第22図７～９がそれで７は壺の口縁部、８は甕の口縁部でほぼ復元でき、外面には４条の凹線がめぐる。９は底部の破片である。

段状遺構１（ＳＴ１、第23図）

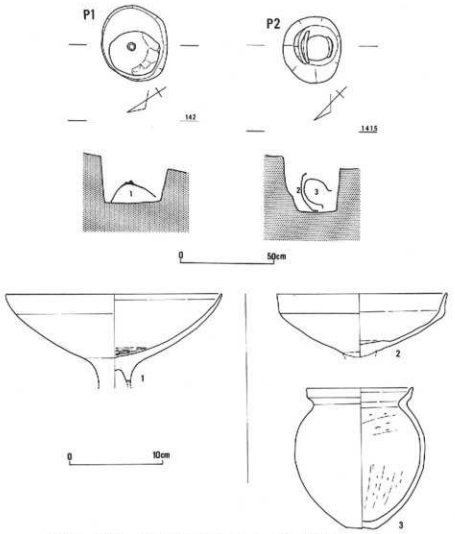
Ｂ－６区、斜面をカットして平坦面をつくり、溝２によって切られている。現状では長さ4.5m、幅1.2mを測る。床面に柱穴が１個存在する。出土遺物は皆無である。

段状遺構２（ＳＴ２、第23図）

Ｃ－９区、斜面をカットして平坦面をつくり、現状では一辺2.5×2.7m程の方形プランと考えられるが斜面側の床面はすでに流失している。現状で深さは19cm程で、床面にやや大きめの柱穴１個が存在する。出土遺物は皆無である。

段状遺構３（ＳＴ３、第23図）

Ｃ－11区、斜面をカットしてやや不整形な平坦面をつくっているが、上部は古墳築造時にかなり削平を受けている。現状で長さ4.4m、幅2.3m、深さ41cmを測る。床面には柱穴は存在しない。出土遺物は皆無である。



第24図　柱穴１・２平・断面図（S＝１：20）及び出土遺物（S＝１：４）

柱穴１（P１、第24図）

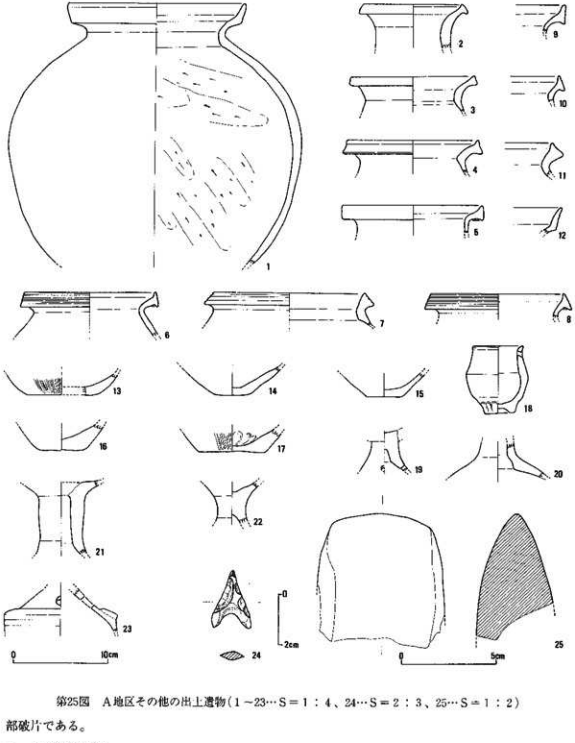
D－４区、住居跡１の南西に位置し、直径35×40cm、深さ60cm程の円形の柱穴で内部には高杯の杯部（１）のみを逆さまにふせた状態で埋めていた。このふせた内部からは何も出土していない。１は口径22.9cm、残高9.5cmを測り、緩やかに内湾した椀の形をした杯部である。表面はかなり摩滅しており杯部内面の底にはヘラミガキがかすかに観察できる。

柱穴２（P２、第24図）

D－５区、住居１の南に位置し、直径60×70cm、深さ60cm程の円形の柱穴で内部には甕（３）をさかさまにして、高杯（２）の杯部で蓋をしているようである。ただ出土状態からは、甕の口縁部を高杯で蓋をしている状況ではなさそうである。２は口径18cm、口縁部がやや垂直に立ち上がる形状の杯部で、表面は摩滅のため調整は不明である。３は口径11.4cm、底径3.4cm、器高14.8cm、表面は摩滅のため外面の調整は不明であるが、内面はヘラケズリを施している。

その他柱穴や遺構に伴わない遺物として第25図に図示している。１は土壙５、12・13・15は建物跡７、18は土壙１と切り合う土壙から出土している。

３～12は甕、２は壺である。13～17は底部で外面ヘラミガキ、内面に指頭圧痕が観察できる。18はミニチユアの土器で口縁部に円孔が一対見られ、底部外面に指頭圧痕が見られる。19～23は高杯の脚部である。24はサヌカイト製の石鏃で有本６号墳の埋葬施設埋土から出土している。25は砂石製の石斧の刃



第25図　A地区その他の出土遺物（1～23…S＝1：4、24…S＝2：3、25…S＝1：2）

部破片である。

b．その他の時代

溝2（SD2、第21図）

B～D－4～6区、後線上を弧を描くように存在しさらに調査区外へと伸びている。溝1、住居跡1を切っている。幅50cm、深さ28cmを測り堆土は1層である。出土遺物は無く時期については不明であるが、この溝の性格としては排水の溝ないしは道であろう。

溝4～6（SD4～6、第5図）

いずれも幅50cm、深さ20cm程の浅い溝である。溝2と5は接合はしない。出土遺物が無いため時期については不明だが溝2と同様な性格のものと考えられる。

（3）B地区の調査（第26図）

B地区はA地区の南につづく丘陵上に存在する弥生時代の墳墓群が中心である。弥生時代としては溝や列石で区画をもつ区画墓が3基（区画墓1～3）確認でき、その周辺に区画をもたない土壙墓（木棺墓など）群や土器棺10基（SJ1～10）があり、それらは分布状況などからA～Iの9群（第27図）に便宜的に分けている。その他は段状遺構2基（ST1・2）とその内部に土器棺1基（SJ11）が検出された。

その他の時代として縄文時代の落とし穴と考えられる土壙1基（SK1）、近世の墳墓16基、溝1条（SD9）である。

a．弥生時代

土壙墓群は確認調査によって初めて確認され、観察用の土層は稜線とそれに直行する斜面部に設定したが、痩せ尾根であるため丘陵の稜線には確認調査時のトレンチが走り思うようには設定はできなかった。土層は部分的ではあるが第28図に示した位置（a～c、d～g）に設定した。そのため区画墓を含む土壙墓群全体を網羅していないが、基本的な構造はこれら土層から把握できた。基本的層序は第29図に示している。それによると基本的には地山を掘り込んで各土壙墓は作られているものの、上部は流失などにより削平されている箇所もかなりあると考えられる。区画墓1では墳頂部にあたる土壙墓53から58や51にかけての範囲の上層に土器片を多量に含む黒灰色土（第29図1）の堆積が最大で18cm程見られる。これは盛土と言うよりは、墓前祭祀的な意味合いが強いものと考えられる。区画墓3には現状ではそのような堆積は見られない。その外側の土壙墓124の埋土の上層（同4）からは特殊器台の破片が数点出土している（第78図、A地点）。ただこれについては上層ではあるため流れ込みの可能性も考えられる。また特殊器台の出土はここと土壙墓135の周辺（B地点）の2カ所だけである。

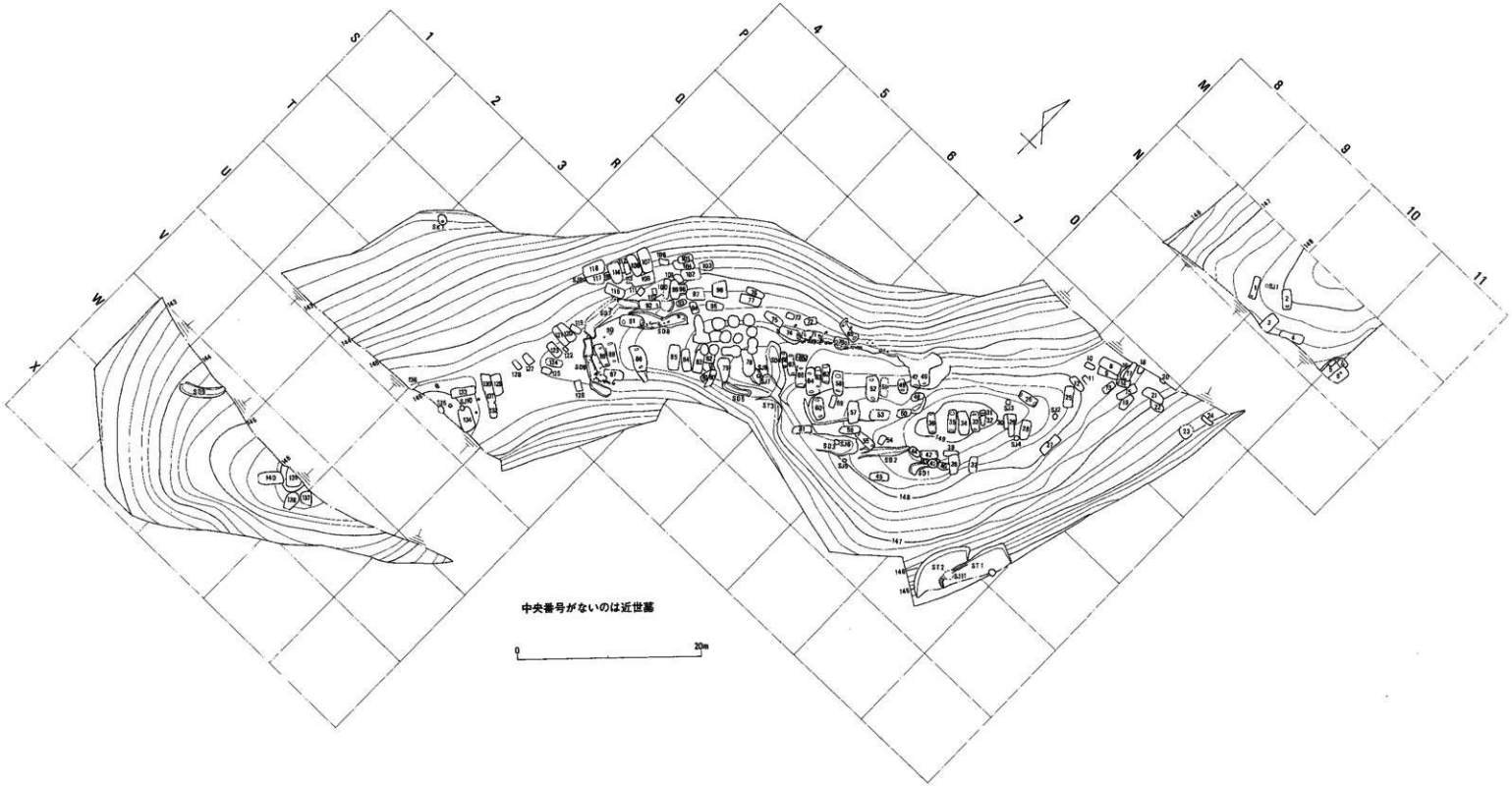
区画墓1（Q～S－6～8区、第30～42図）

北西側は列石、南東側は溝2・3（SD2・3）、南西側は溝4（SD4）、北東側は土壙墓46・47を含む溝状の遺構によって部分的に長方形状に区画されたもので、長辺およそ16m、短辺およそ10mを測る。高さは溝4から1.35m、溝3から0.7m程で、盛土は存在しないが、土壙墓51から53、57周辺には上器片を多数含む包含層（第29図1）が最大で18cm程堆積している。区画内（区画溝内含む）には土壙墓が23基（46～68）存在している。また、列石外の土壙墓69～75については区画墓1に関係するものと考えられるが、区画外であるためここでは別グループ（E群）として取り扱い後述する。

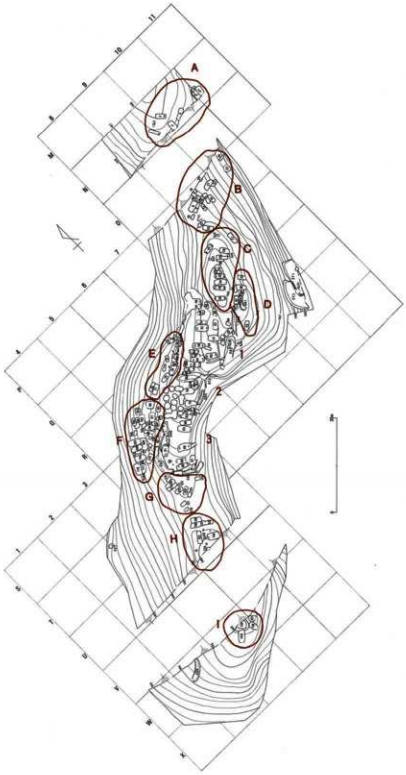
列石（第31図）は西側の長辺のみに存在し、削り出しで区画を行った斜面の稜部分に見られる。転落しているものが多く原位置をとどめているものは少ないが、北側に幅30～40cm程の大きめの石を立てることなく敷き並べ、現状で4個確認でき、これがほぼ当時の様相と考えられる。ただ南側については北側とは異なり小さ目の石を積んでいる状況であり、場所によって石の置き方が若干異なっていたのかもしれない。現状で確認できる列石の長さを測れば約9.5m程である。転落石の状況から、列石風に直線的に並べ、斜面に若干積み上げて区画していたものと考えられる。

南東側の溝2・3は同一主軸ではあるが幅が異なり明瞭には接続しない。そのため前後関係は不明であるが別々に作られたものと考えられる。溝2（第32図）は直線的で長さ5.8m、幅0.9m、深さ0.3mを測り、埋土は1層で土器片が出土している。出土遺物の内1は壺で外面にはヘラミガキ、胴部内面にはヘラケズリを施し、2は壺で口径16cm、胴部外面にはハケ、内面にはヘラケズリを施している。

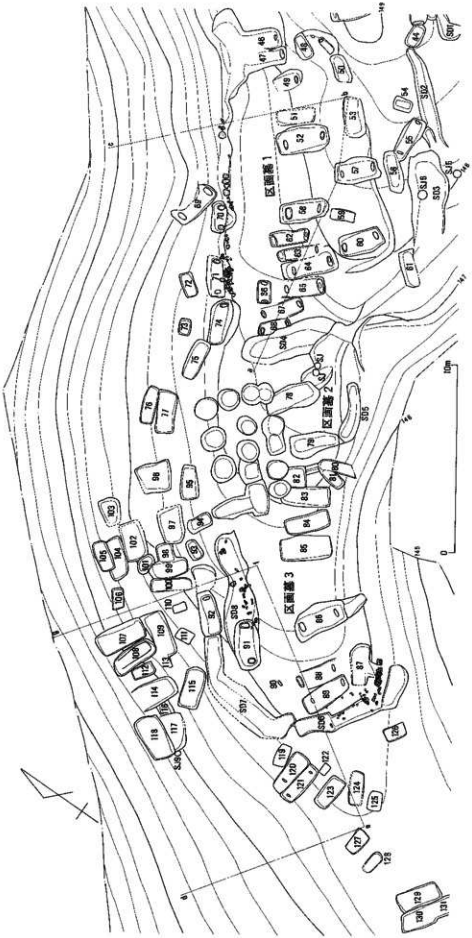
溝3（第32・33図）は長さ5m、最大幅2m、深さ0.6mを測り内部から多数の石と土器片が出土し



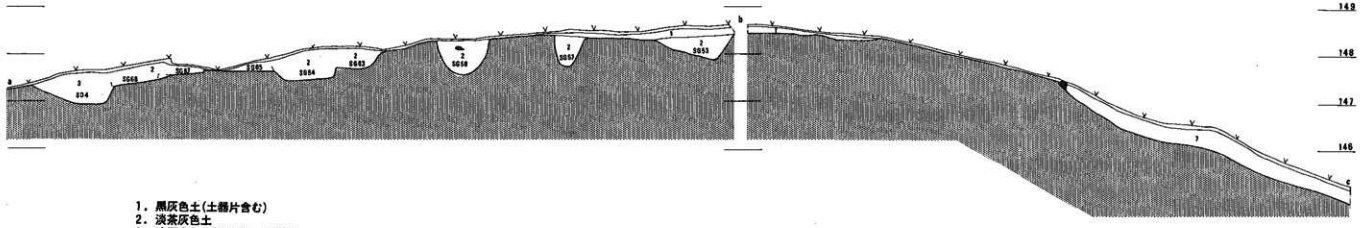
第26図　有本遺跡B地区遺構全体図(S＝1：400)

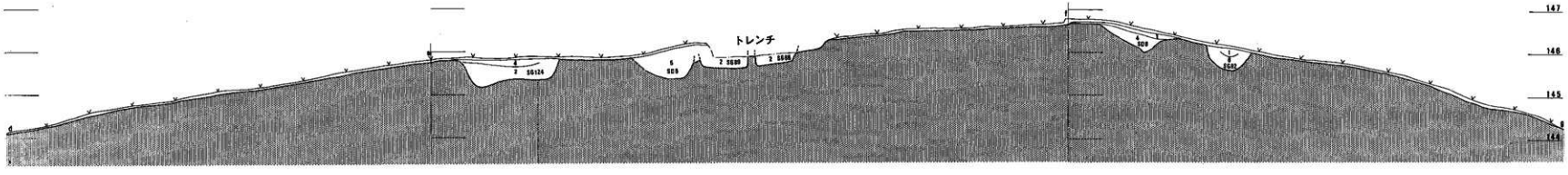


第27図　土壙墓群のグループ分け図(A～I群、S＝1：800)

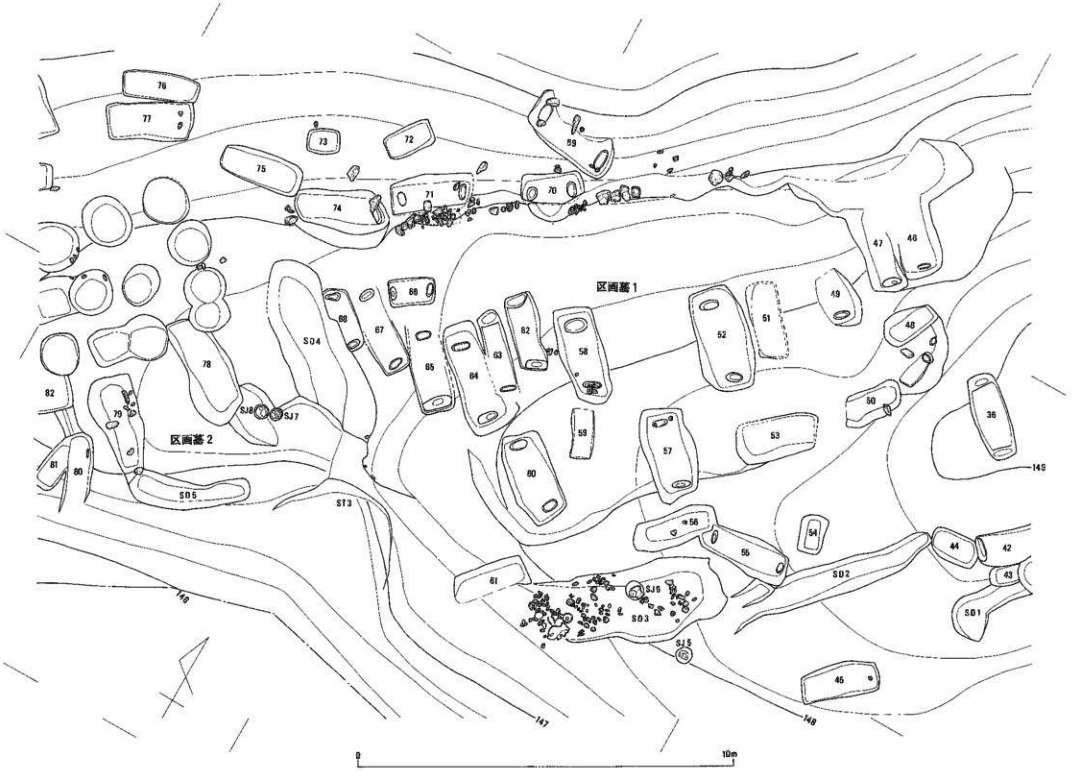


第28図　土層ポイント位置図(S＝1：200)

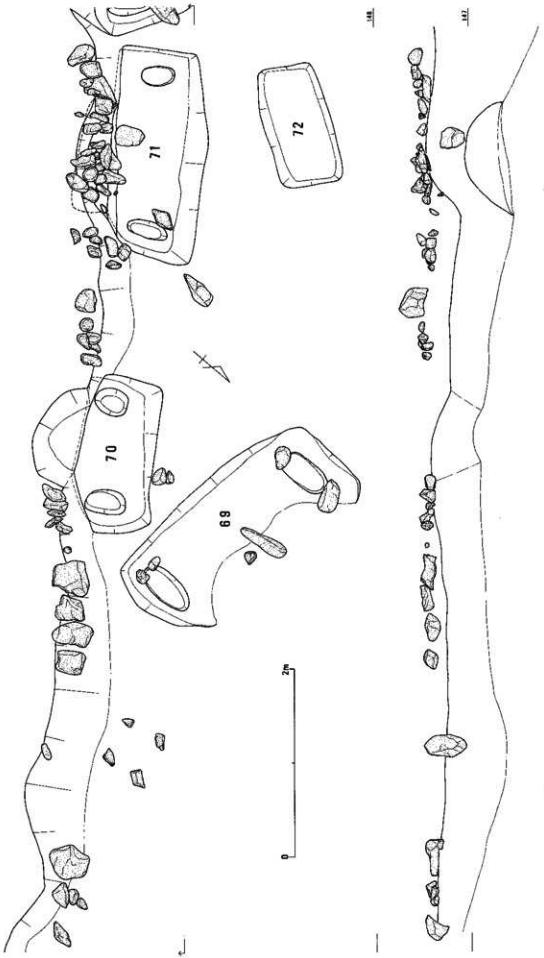




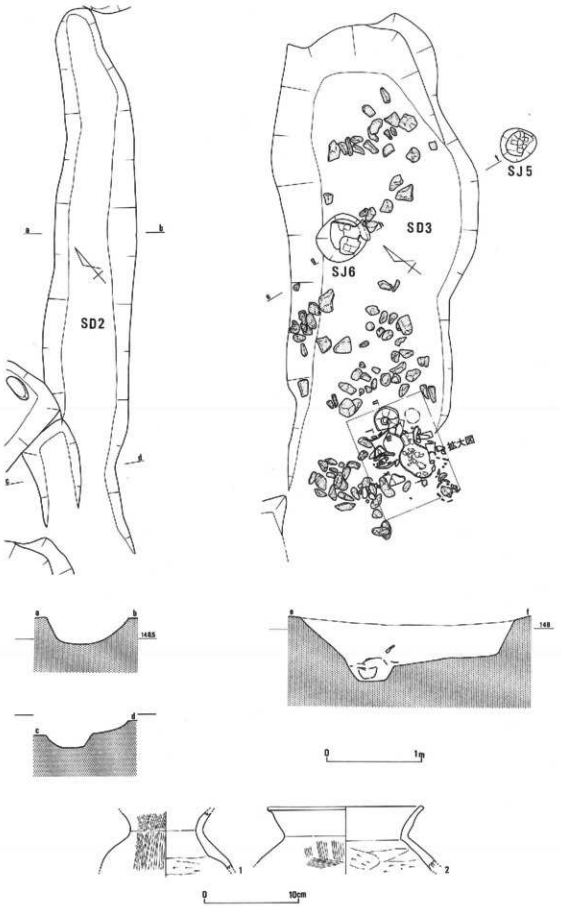
第29図　B地区土層図(S＝1：80)



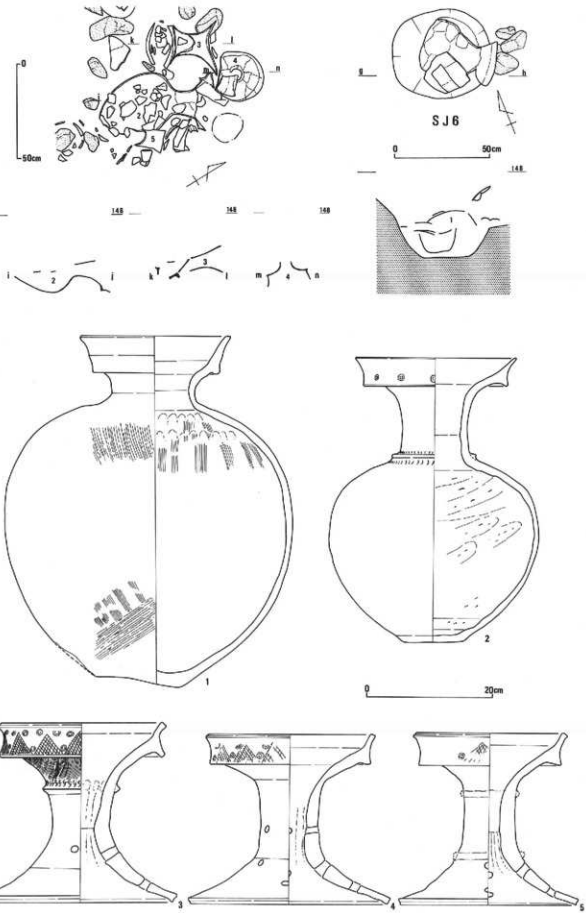
第30図　区画墓1・2平面図(S＝1：100)



第31図　区画墓１列石平・断面図(S＝1：40)



第32図　溝２・３平・断面図（S＝１：40）及び出土遺物（S＝１：４）



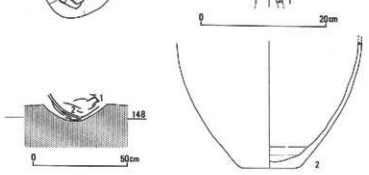
第33図　溝３遺物出土状況、土器棺６平・断面図（S＝１：20）及び出土遺物（S＝１：６）

ている。石は浮いた状態のものが多いが、墳丘内から転落したと言うよりは器台や壷などが一緒に出土している事から、ここで祭祀的なものが行われていたものと推測され、これら石はその際に使用した一連のものと考えられる。土器は器台３個体と壷１個体が倒れた状態で出土している。第33図に出土状況の拡大図があり、それによると壷を置きそれを取り囲むように左右と前に器台を並べている。それが南から北に倒れている状況であり、この事から壷は器台の上に置かれていなかったようである。また、この溝内に土器棺６（ＳＪ６）、外に土器棺５（ＳＪ５）が存在する。溝３の土器は第33図２～５である。２は二重口縁の壷で、口縁の外面には竹管文をやや間隔をあけて施し、頸部と胴部の境には貼り付けの凸帯が巡り、その接合部分には半さい竹管で模様を付けている。胴部の表面は摩滅しており調整は不明で、内面はヘラケズリである。３～５は器台である。３は比較的残りがよく、口径25㎝、底径29㎝、器高28.5㎝、口縁の外面には鋸歯文が巡りその間に竹管文３個１単位で施している。筒部上半にはハケが見られ、凸帯が上部のみに巡り下部には剝がれた痕跡も見られない。この凸帯の接合部分には壷のときと同じ半さい竹管を上側に交互に施している。円孔は２段であるがその配置は不明である。４・５は残りが悪くおそらく口縁部には３のような鋸歯文と竹管文が施されていたものと推測される。５には筒部の上下２段に凸帯を施しているがほとんどがはがれている。４は円孔３段、５は円孔２段である。

土器棺６（ＳＪ６、第33図）

溝３の内部に直径50㎝程の円形土壙があり、底面は溝３の底面をさらに掘り込んでいる。土層関係から溝３との前後関係は明確でないが、溝３の土層に明瞭な掘り方が存在しない事から、溝３が埋まっていく段階に埋設されたものと考えられる。内部には壷が底を下にして置かれていたが、土器による蓋は現状では明瞭でないが、蓋があったとすれば土器以外であったと推測される。また、状況から土器棺ではなく祭祀的なものであった可能性も考えられる。１は壷で口径22㎝、底径13㎝、器高55㎝を測りほぼ完形に復元できる。二重口縁で外面にはハケの後ヘラミガキ、内面上部にはハケを施している。内部からの出土遺物は皆無である。

土器棺５（ＳＪ５、第34図）は溝３の外側にあり、直径35㎝程の円形の掘り方で壷ないしは甕の胴部を高杯の杯部で蓋にしていたようである。1は高杯で脚部は欠損している。杯部の口縁はわずかに屈曲し口径20㎝、表面は摩滅のため調整は不明である。脚部との接合は円盤充填である。２は甕か壷の胴部であるが、口縁部は出土していない。これも表面は摩滅のため調整は不明である。



第34図　土器棺５平・断面図（Ｓ＝１：20）及び出土遺物（Ｓ＝１：６）

南西側の溝４は区画墓２と共有している。最大幅1.8m、長さ5.3m、深さ0.5mを測る。堆土から土器片が出土している。出土遺物の詳細は区画墓２のところで述べる。

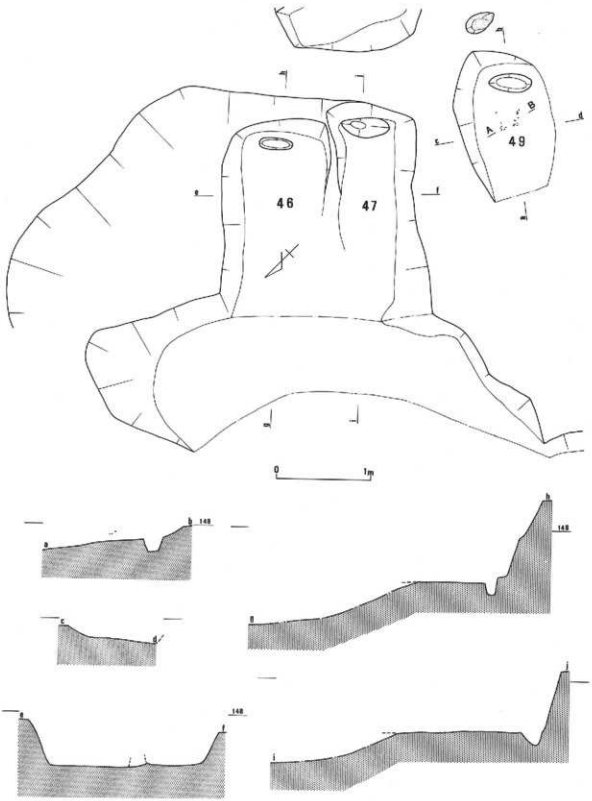
北東側には幅３m、長さ5.5m程の溝状の遺構（第35図）があり、内部には土壙墓２基（46・47）が並列して存在する。小口溝が存在するが片側はすでに流失している。

区画墓１の墳丘内には土壙墓が21基（48～68）あり、墓壙は規模から分類を試みたが明瞭な分類はできない。また、丘陵の尾根線との関係では直交するもの13基（49・51・52・57～60・62～65・67・68）と平行するもの６基（48・50・53・56・61・66）、斜交するもの２基（54・55）があり直交するものが比較的多い。内部構造としては小口溝をもつもの13基（49・52・55・57・58・60・62～68）ともたないもの８基（48・50・51・53・54・56・59・61）がある。この小口溝を有するものから木棺の規模を比較すれば52が両小口間が２mで最大規模である。位置的にはほぼ中央にあり中心的な埋葬施設の可能性が考えられる。これら土壙墓は整然とつくられているが52と58の間などかなりの空白部分が存在する。また、53から60にかけてＬ字状に、48から50のあたりも地山をカットして整形している。この両者は50と53の部分が途切れているため接続しないが、位置的、レベル的には一連のものであった可能性がある。この解釈としては区画墓１の前段階になんらかの整形作業をしたなごりで、その後列石や溝３などで区画墓１を完成させたものと考えられる。枕石を有するものは見られないが、内部から石が出土しているものが５基（50・51・56～58）あり、その中でも50や56は浮いた状況から墓標的なものと考えられる。

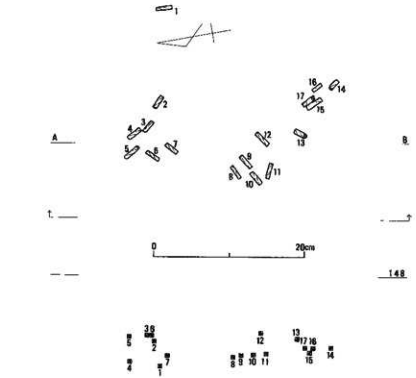
副葬品としては土壙墓49からガラス製の管玉17点がまとまって出土しているだけである。第36図に出土状況があり、ほぼかたまって分布しレベル的にも近似値である事から一連のもので、その位置から首飾りであったと考えられる。17点の内１点（17）は取りあげ時にすでに風化しており、取り上げ後跡形もなく壊れてしまった。そのため図示できたのは16点である。ほとんどが長さ20～22㎜、径６～７㎜、孔径2.1～４㎜でガラスをラセン状に巻き上げて棒状にし、２㎝間隔に切断し、切断面を磨いてつくっている。この事は例えば３と９や５と10では連続模様が観察される事からも伺える。ガラス玉の詳細は一覧表（第２表）を参照されたい。

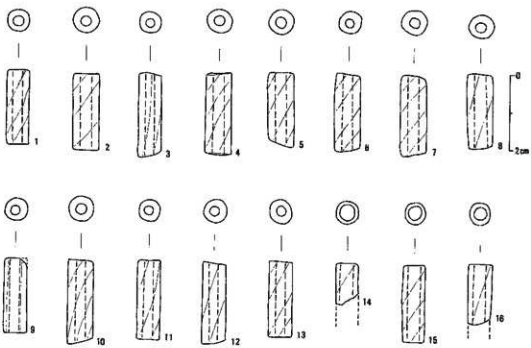
また、区画墓１の出土遺物については第42図に図示している。１～12は土壙墓52から出土している。１、７～12は高杯、３は器台、６は蓋である。13～18は土壙墓53から出土している。13・14は壷で13の口縁部外面下方には刻み目文が、頸部外面にはハケの後６条の凹線が巡っている。15～18は高杯であり、15・17は同一個体の可能性も考えられる。15の外面には上半が横方向のヘラミガキ、下半が縦方向のヘラミガキである。17は外面には縦方向のヘラミガキがあり、円孔は３段に４個が単位である。21は土壙墓57、19・20は土壙墓58から出土している。19は外面に同心円のスタンプ文が見られる。22～27は土壙墓62から出土している。22は高杯の脚部、23～25、27は器台、27には表面にスタンプ文が見られる。28～37は遺構に伴わないが、ほとんどが土層のところで述べた黒灰色土（第29図１）から出土している。31は蓋でそれ以外は高杯ないしは器台である。28は外面には縦方向のヘラミガキがあり、円孔は２段４個が単位である。38には同心円に近いスタンプ文が見られる。

土壙墓の詳細については第３～５表を参照されたい。



第35図　土壙46・47・49半・断面図（S＝1：40）



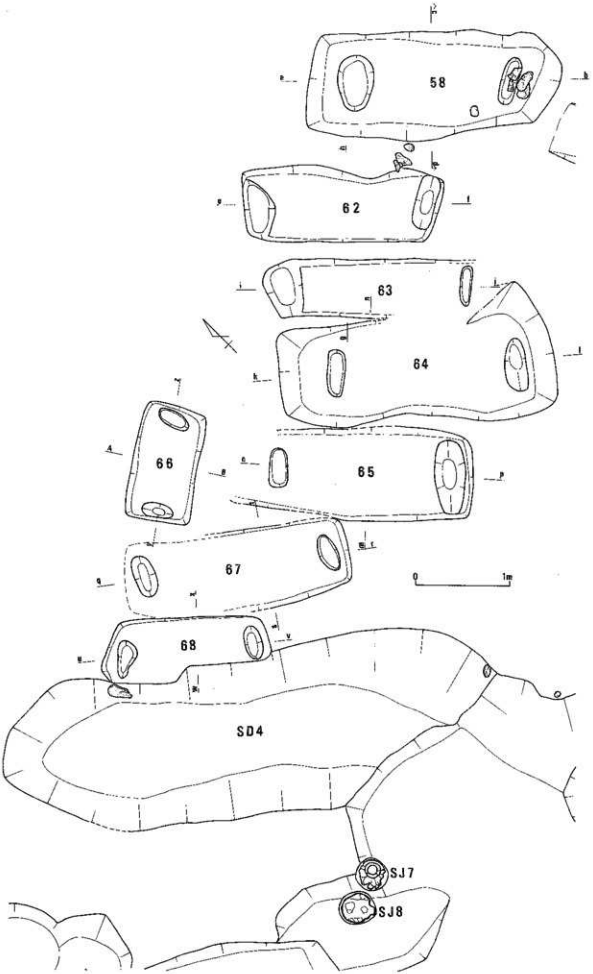


第36図　七輪墓49遺物出土状況(S＝1：5)及び出土遺物(S＝1：1)

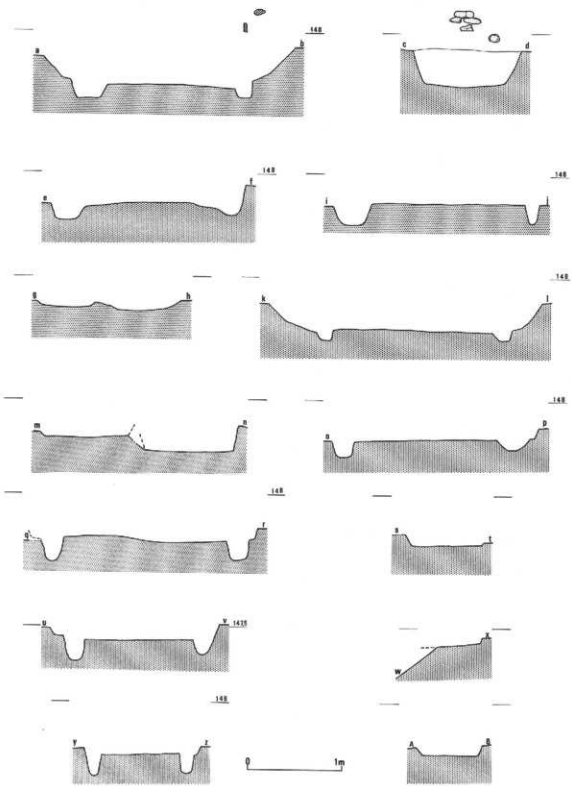
(mm)

	長さ	径	孔径	材質	色調		長さ	径	孔径	材質	色調
1	20	6	2.5	ガラス	青白色	9	20	6	2.8	ガラス	青白色
2	21	7	3	〃	〃	10	22	6.8	2.8	〃	〃
3	22.5	6	2.2	〃	〃	11	21	6	3	〃	〃
4	22	7	2.1	〃	〃	12	22	6.2	2.1	〃	〃
5	20	7	3	〃	〃	13	20	6.1	3	〃	〃
6	21	7	3	〃	〃	14	(11.5)	6	3.8	〃	〃
7	21.8	7	3	〃	〃	15	20.8	6	3	〃	〃
8	20.2	7	4	〃	〃	16	(16)	6.1	3.2	〃	〃

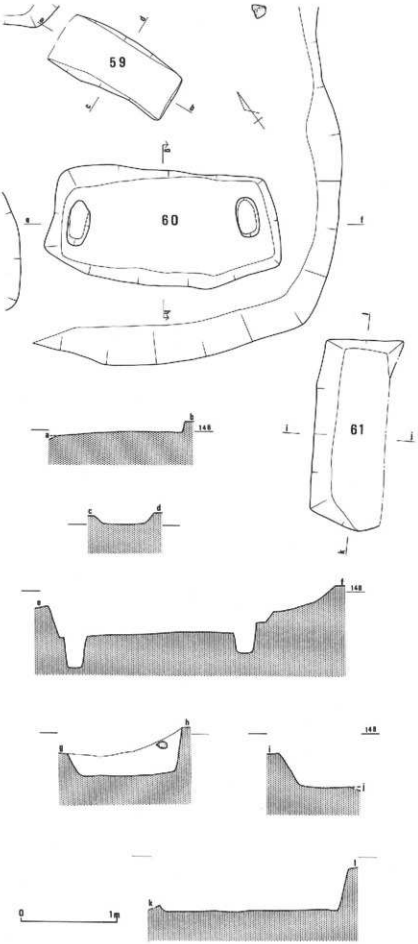
第2表　管玉一覧表



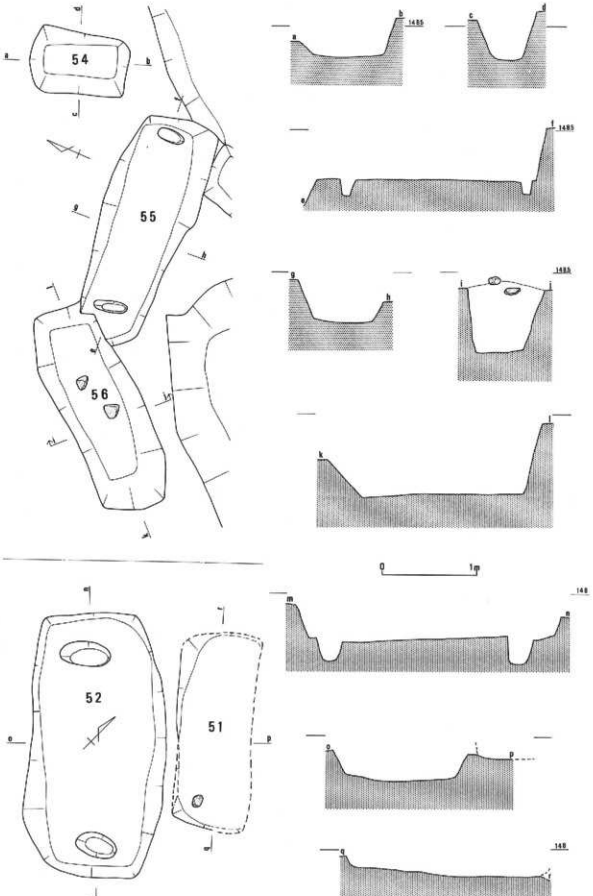
第37図　土壙墓58・62～68平面図(S＝1：40)



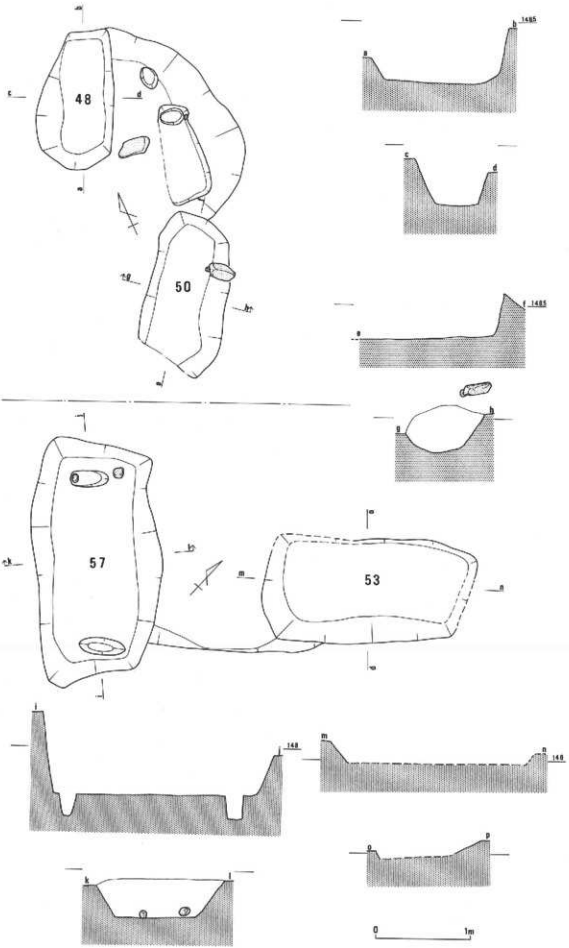
第38図　土壙墓58・62～68断面図（S＝1：40）



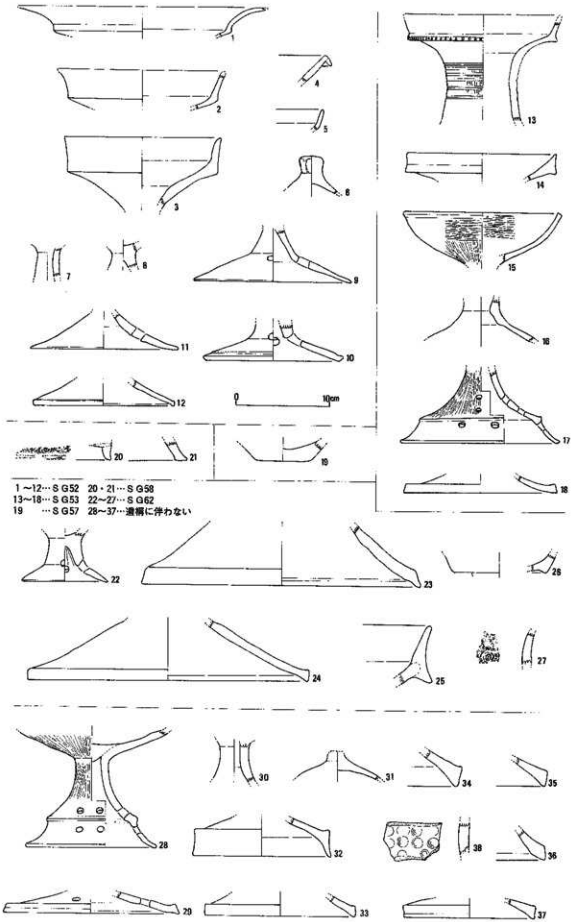
第39図　土壙墓59～61平・断面図(S＝1：40)



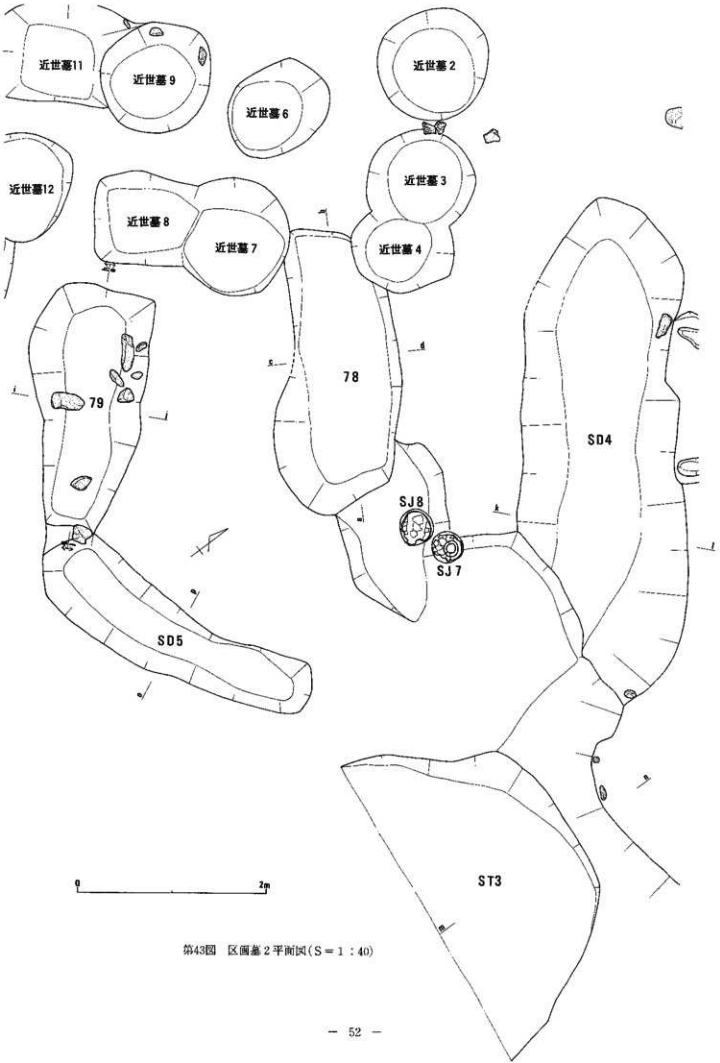
第40図　土壙墓51・52、54～56平・断面図(S＝1：40)



第41図　土壙墓48・50・53・57平・断面図(S＝1：40)



第42図　区画溝1出土遺物(S＝1：4)

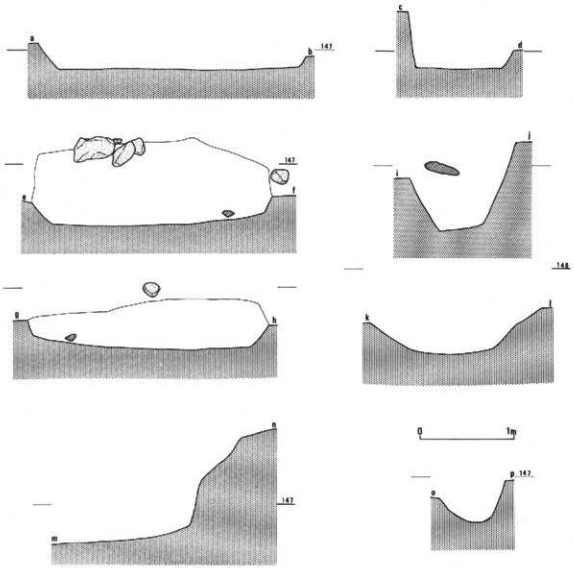


第43図　区画墓２平面図（S＝１：40）

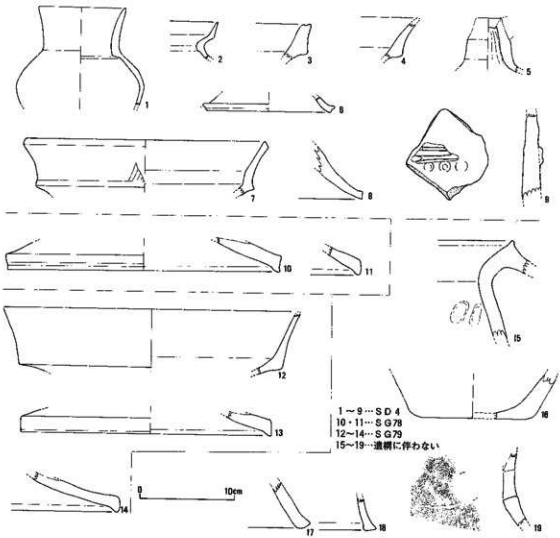
区画墓２（Ｒ～Ｓ－６区、第43～46図）

溝４・５、土壙墓79によって区画され、北西側は近世墓が存在するが、溝など区画を施すものは存在しないが、現状で計測すると一辺５ｍ程の方形の区画墓と考えられる。溝４は最大幅1.8m、深さ0.5mを測り、区画墓１と共有している。埋土はほぼ１層（第29図）である。溝５は溝４とは幅が大きく異なり、幅0.8m、長さ3.1m、深さ0.45mを測りやや湾曲する。土壙墓79は溝５と直交して配され、区画溝としての機能も有しているものと考えられる。墓標的な大きめの石がほぼ中央に存在する。また、床面にもやや大きめの石が１個存在するが枕石ではなさそうである。その他やや浮いた状態で石が数個出土しているが、これについては数からして区画に使用されたものとは考えにくく、もしかすると近世墓が調査前に掘りかえされている事から、これに伴うものの可能性も考えられる。

この区画内の中央に土壙墓１基（78）が存在し、溝４に平行に配され、尾根線に対しては直交している。内部には小口溝や枕石も見られず、墓標的な石も存在しない。副葬品は皆無である。また、東小口の外には浅い幅1.1m程の溝状の遺構が併設しており、この部分には土器棺２基（ＳＪ７・８）が存在する。この溝は非常に浅く性格については不明である。



第44図　区画墓２断面図（Ｓ＝１：40）

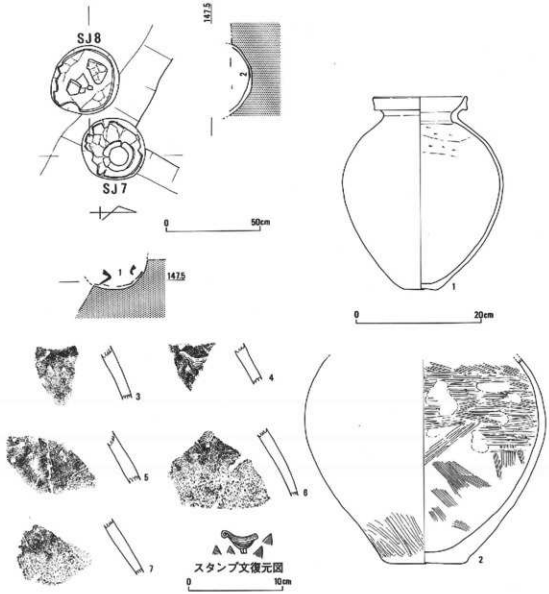


第45図　区画墓2出土遺物(S＝1：4)

区画墓2の出土遺物については第45図に図示している。1～9は溝4からの出土である。この溝は区画墓1と共有しているため、これら土器がどちらに属するかは明瞭でない。1は壺で口径9㎝、2～4は甕などの口縁部でかなりバリエーションにとむ。5・6は高杯の脚部で5の内面にはしぼり痕が見られる。7～9は器台である。7には口縁部の外面に鋸歯文がかすかに見られるが、剝落のため全体の模様構成は不明である。9には貼り付け凸帯の下に連続する同心円のスタンプ文がかすかに見られる。10・11は土壙墓78、12～14は土壙墓79からの出土でいずれも器台の破片である。15～19は遺構に伴わない遺物で、15・16は大形の壺ないしは甕の破片である。17～19は器台の破片で、19には円孔があり、外面にS字状渦巻文のスタンプ文が見られる。この溝内には、土器棺7・8（SJ7・8）が近接して存在する。

土器棺7（SJ7、第46図）は土壙掘り方の南側がかなり削平を受けている。そのため現状では直径30㎝ほどの円形で、内部には甕（同1）がほぼ底を下にして置かれていた。蓋については検出されていないが、削平を受けている事を考えれば、本来は存在していたのかもしれない。この甕の内部からは何も出土していない。

1はほぼ完形に復元できる甕で、口径14.5㎝、底径6㎝、器高30㎝を測る。表面は摩滅のため外面の調整は不明であるが、内面にはヘラケズリを施している。



第46図　土器棺７・８平・断面図（S＝1：20）及び出土遺物（1・2…S＝1：6、3～7…S＝1：4）

土器棺８（ＳＪ８、第46図）も上部はかなり削平を受けている。レベル的には土器棺７よりはやや低い位置にあり、現状では掘り方は直径37cm程の円形である。内部には甕ないしは壺の胴部（同２）がやや斜めに倒れた状態で置かれていた。これについても蓋など上部構造については、削平のため不明である。

２は壺などの胴部で外面の底部付近にヘラミガキが見られ、内面にはハケを施した後に横方向のヘラミガキを丹念に施している。なお、この胴部の肩付近にはスタンプ文が見られる。いずれも接合しないため、どの部分に施されていたかは明瞭でない。３～７がそれで、その復元図を載せている。鳥を表現していると思われる部分と三角の模様から構成されている。鳥の頭は渦巻きで、胴部は６条程の線で尾までを一体で表現している。足も２本表現しており立っている状態であろう。三角の模様は鋸歯文に似ていて鳥の周囲に配されている。これは周囲の草か何かを表現しているものであろうか。

区画墓３（S～T－４～６区、第47～51図）

溝６～８（SD６－８）などによって部分的に区画されている。北東側は近世墓の一群が存在するが、明瞭な区画は存在しない。おそらく北東端は区画墓２の土壙墓79の辺りと考えられる。

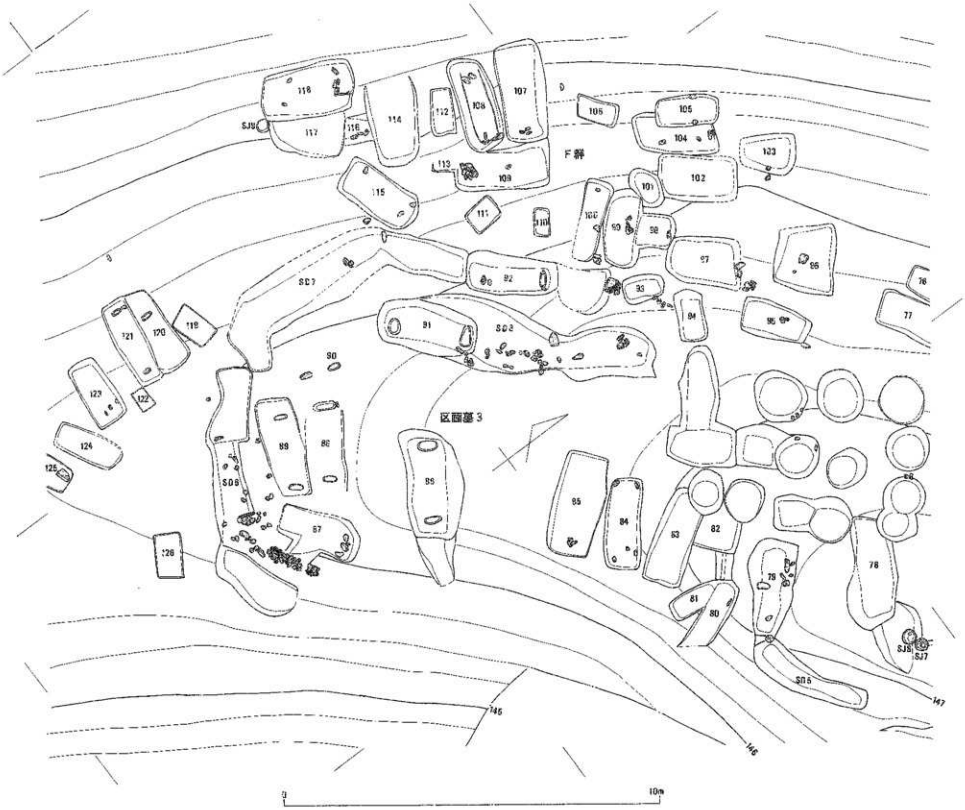
溝６は最大幅１m、深さ0.3mを測り、くの字状に緩やかに曲がり、３つの部分に分かれている。その東端の部分には溝に沿って石が直線的に並べられている。いずれも河原石で、レベル的には上下２段存在していたようにも見え（第48図）斜面に置かれていた可能性も考えられるが、上部がかなり削平を受けているため、現段階ではその構造については明瞭でない。また、西側には石はほとんど無く、その状況からは溝６全面にこのような石が存在していた可能性は少ない。この溝からの出土遺物は皆無である。

溝７は溝６とは部分的に接して存在し、両者でややいびつだがL字状に区画を施している。最大幅1.4m、深さ0.8mを測る。形状はやや弧状を描き内部に石が若干存在するが、その数からして溝６のように並んでいたかどうかは明瞭でない。土壙墓92（第50図）は溝７と接続して区画溝としての機能も有していたものと考えられ、さらに北側にも溝は続いている。この溝からの出土遺物は皆無である。

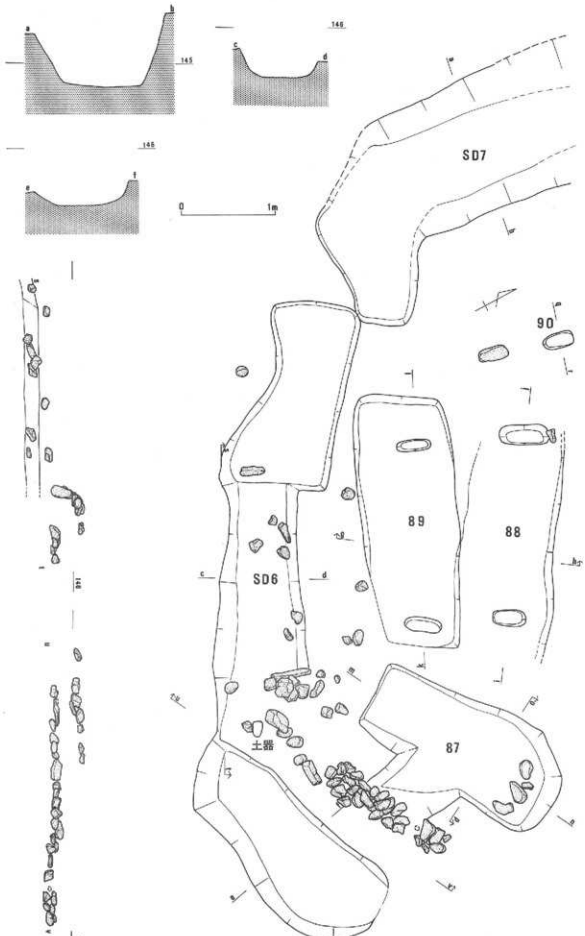
溝８は最大幅1.9m、長さ7.4m、深さ0.7mを測り、溝７の内側に存在するやや直線的な溝である。内部に土壙墓91（第50図）があり、浮いた状態でかなりの石が出土している。これら石は転落したもので本来は墳丘上におかれていた可能性が大きいが、溝６のように並べられていたどうかは明瞭でない。この事から区画墓３の解釈としては溝８による最初の区画が存在し、その後溝６・７による区画によって再度区画（拡張）された場合と、その逆の２通りの考え方があるが、現状では両者の切り合い関係もなく明瞭でない。この溝からの出土遺物は皆無である。

この区画墓３は、溝６と区画墓２の外端で測ると全長およそ13.5mである。

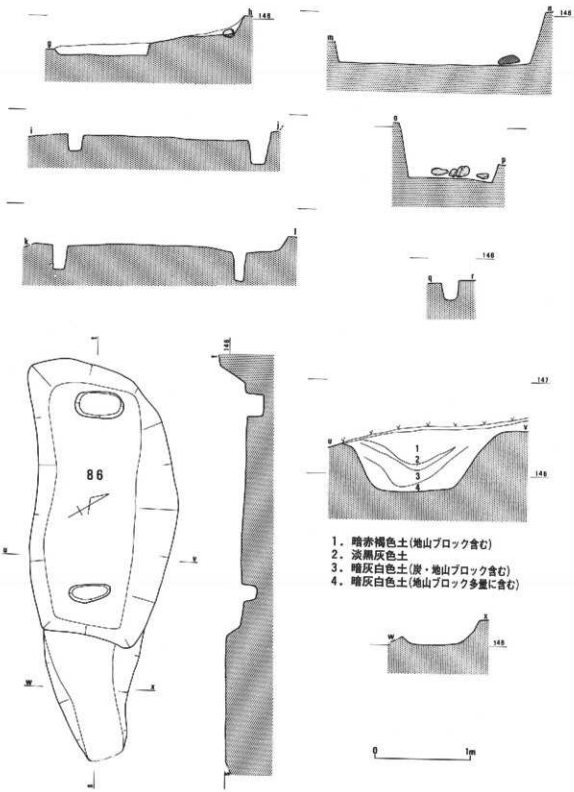
この区画内に土壙墓が13基（80～92）存在し、位置的には南北の２群（80～85、86～92）にグルーピングできる。この両者85と86の間は埋葬施設のない空白部分が存在する。北群（第51図）は尾根線に直交するもの５基（80・82～85）と斜交するもの１基（81）とがあり、いずれも小口溝はない。80・84・85には内部から石が出土し、80は北側壁側に１個やや浮いた状態で出土し墓壙の可能性も考えられる。84はその状況から木棺の側壁材の支えと考えられる石が床面付近の四隅から４個出土している。85は床面の南小口側から３個の石がかたまって出土しているが、その状況から枕石とは考えにくく、その性格については明瞭でない。また、82については83や近世墓と切り合っているため墓壙の形状は明瞭でない。南群（第48～50図）は86が単独で存在し、直交するもの３基（86・88・89）、平行するもの１基（87）あり、87以外はすべて小口溝をもつ。90は片側の小口溝のみで、おそらく溝７の所に片方の小口溝があったものと考えられる。86はその土層状況（第49図）から木棺の痕跡は見られないが、内部が空洞であった状況が伺え、埋土は４層からなる。また、東側には浅い幅１m、長さ1.4m程の溝が付設している。この溝はあまり高低差のないものである事からどのような性格のものかは明瞭でないが、溝８の区画に伴う溝で北群（80～85）を区画していた可能性も考えられる。87には東小口側に石が４個あり、その状況から枕石とも考えられるが、左右のバランスが悪く、枕石とは特定できない。また、南側には右列に向かって幅0.7m程の溝状遺構が付設している。この溝についても性格は明瞭でない。これらいずれの土壙墓も副葬品は皆無である。



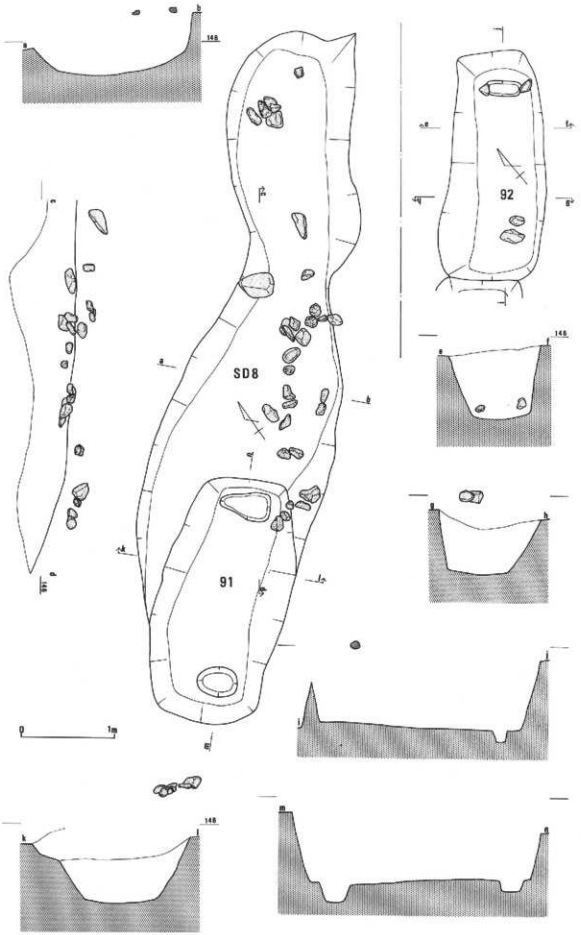
第47図　区画墓3・F群平面図(S＝1：100)



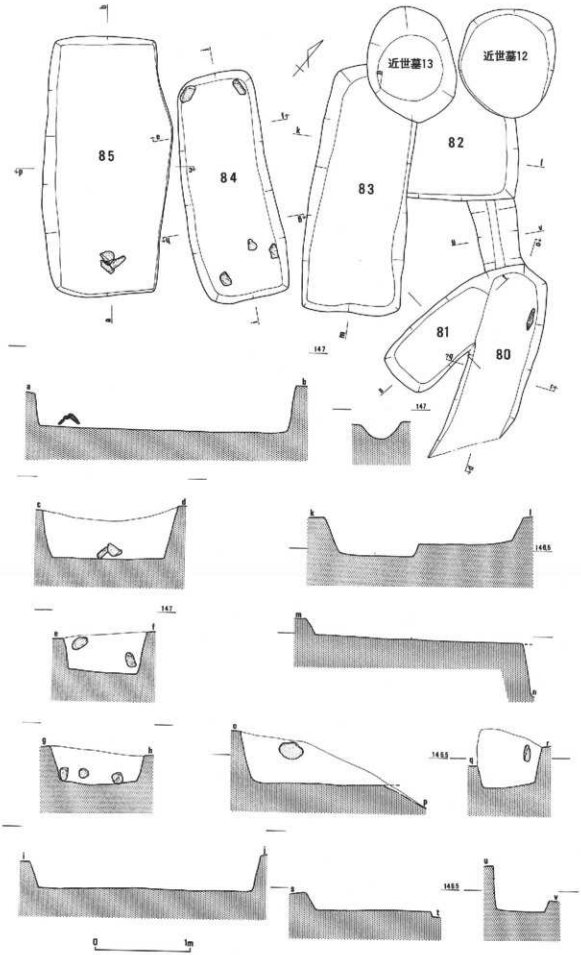
第48図　土壙墓87～89平面図、溝６・７平・断面図（S＝１：40）



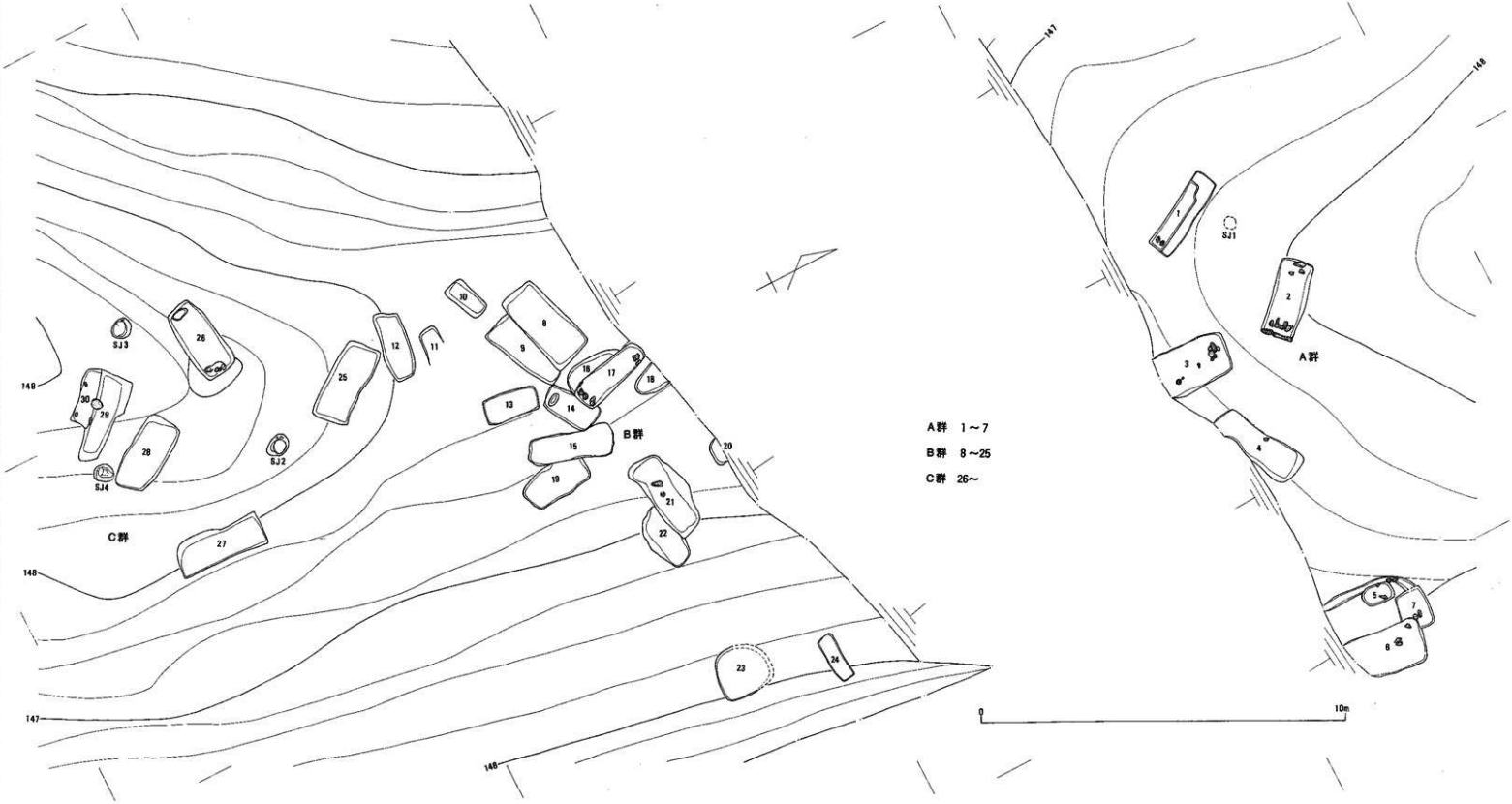
第49図　土壙墓87～89断面図、86平・断面図(S＝1：40)



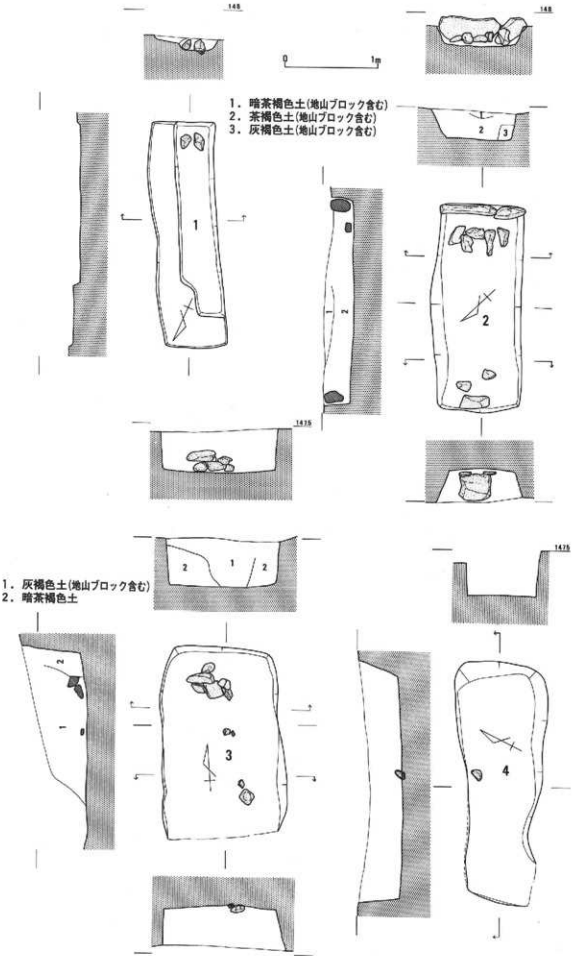
第50図　土壙墓91・92、溝８平・断面図(S＝1：40)



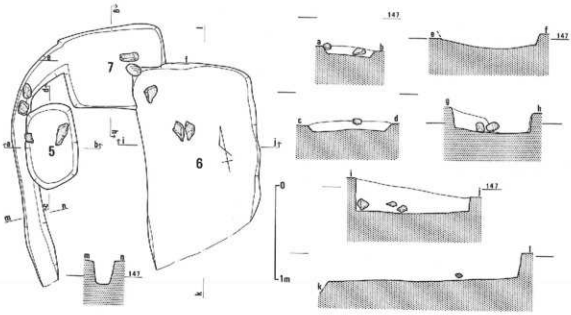
第51図　土壙墓80～85平・断面図(S＝1：40)



第52図　A・B群平面図(S＝1：100)



第53図　土壙墓1～4平・断面図(S＝1：40)

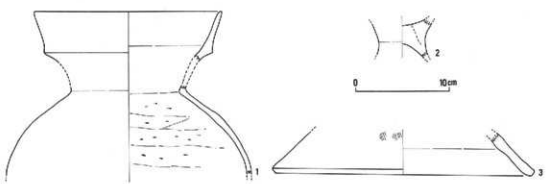


第54図　土壙墓5～7平・断面図(S＝1：40)

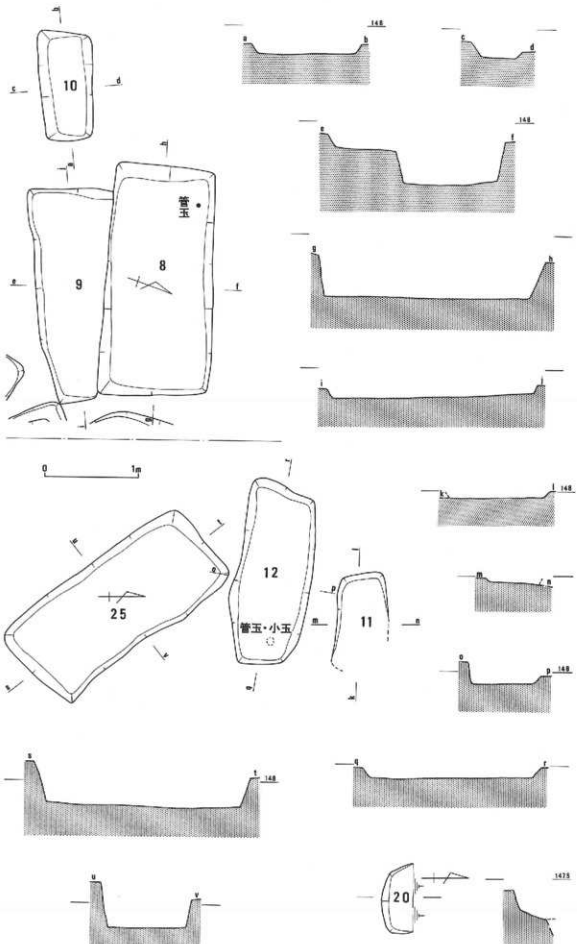
A群（第52～55図）

土壙墓群の最北端に位置し丘陵稜部に道が通っているため全容は不明だが、現状で7基の土壙墓（SG1～7）と土器棺1基（SJ1）があり、位置的にはばらつきがあるが、これらを一つのグループとして取り扱っている。土壙墓は尾根線に平行するもの3基（3・5・6）、直交するもの1基（7）、斜交するもの3基（1・2・4）で、いずれも小口溝は存在しない。1は2段掘りで木棺の部分は長さ2m、幅43cm程である。1・2・6・7には枕石が存在し、ほとんどが2個の石をハの字に置いているが、土壙墓2は3個の石をコの字に置き丁寧な枕石である。その両側と反対の小口側には木棺の側壁材を支える石も存在し、さらに両小口側にも平らな石を立てている。特に枕石のある側は2個の石を小口の掘り方一杯に立てており、このような構造のものは本土壙墓のみである。7には幅20cm、深さ25cmほどの溝が付随しているが、この土壙墓に伴うものかは不明である。土器棺1（SJ1）は流失が激しく痕跡を確認しただけである。そのため掘り方も存在せず、土器片がかたまって出土している。本土壙墓群に伴う出土遺物はほとんど無く図示できるものはない。

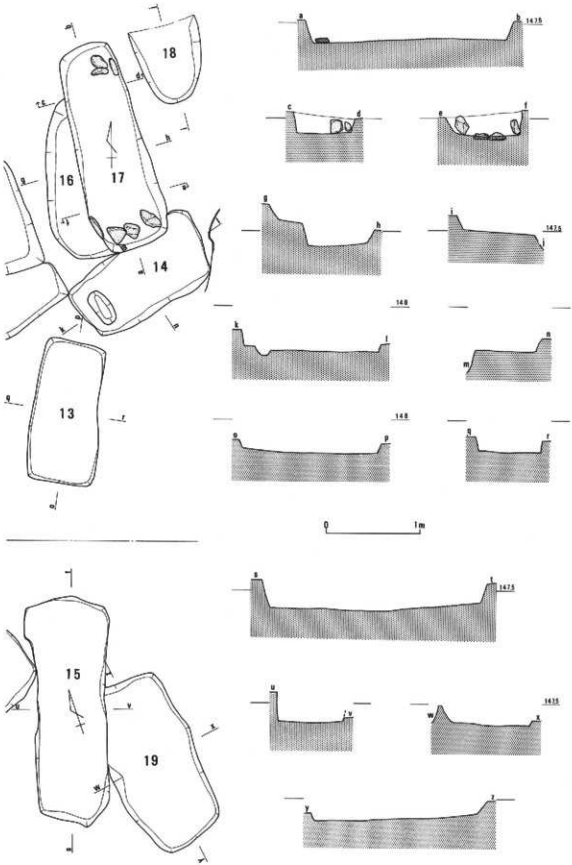
土器棺1は土壙墓1と2の間にあり掘り方は検出時にすでに失われていた。第55図に図示した土器がまとまって出土しているが、原位置を保っているものは無い。そのためこれらがどのように使用されていたかは明瞭でない。1は壷の上半部であるが、口縁部と胴部は接続しない。二重口縁の壷で、口径



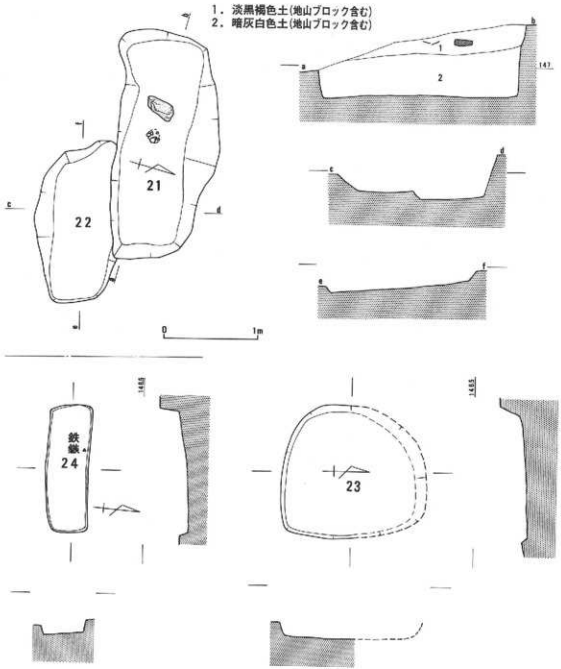
第55図　土器棺1他出土遺物(S＝1：4)



第56図　土壙墓8～12、20・25平・断面図(S＝1：40)



第57図　土壙墓13～19平・断面図(S＝1：40)

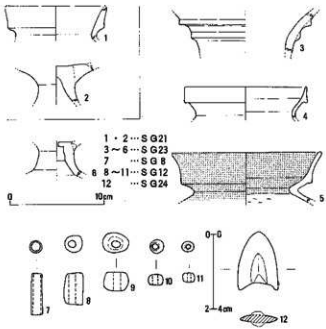


第58図　土壙墓21～24平・断面図(S＝1：40)

19.6cmを測り表面は摩滅しており外面の調整は不明で、内面はヘラケズリを施している。2は高杯の接続部分である。3は器台の破片である。

B群（第52、56～59図）

A群と南側のC群との関係は明瞭でないが、とりあえず土壙墓25と土器棺2の間で便宜的に分けている。土壙墓は18基（SG8～25）あり、23以外はほぼ長方形に近い掘り方である。尾根線に直交するもの5基（11・12・21・22・24）、平行するもの7基（13・15～20）、斜交するもの4基（8～10・14）があり、17は枕石があり、14には片側のみ小口溝が存在する。17は14・16を切っておりA群が枕石が存在するもので構成されているため、本来はA群に属するものの可能性が考えられる。17の枕石の両側には側壁材を支える石があり、反対の小口側にも石が3個出土している。21は墓標と考えられる大きめの石



第59図　B群出土遺物（1～6…S＝1：4、7～11…S＝1：1、12…S＝1：2）

がほぼ中央に1個浮いた状態で存在し、その周辺から土器片も出土している（第58図）。土層は2層で木棺の痕跡は見られないが、床面が平らに作られている事から、内部に木棺が置かれていた可能性が大きい。また、23は直径1.4m程の円形に近い不整形である。

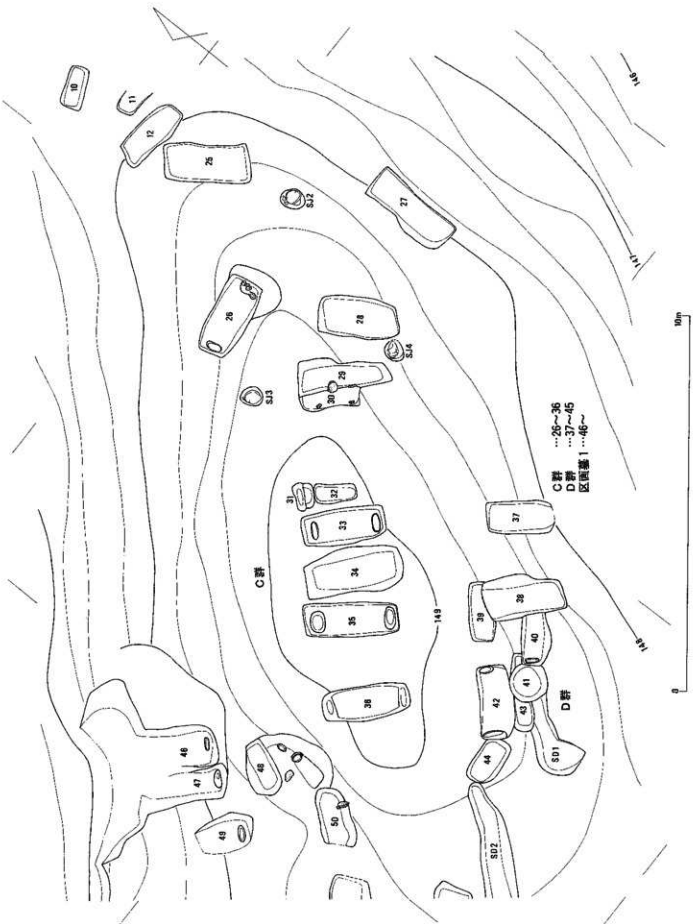
副葬品としては8から碧玉製管玉1点、12からガラス製管玉1点、ガラス製小玉3点、24から鉄鏃1点が出土している。特に12からはまとまって一箇所から出土しており一連のものであった可能性が考えられる。24の鉄鏃については偶然側にあるため矢に接続したままの状態で副葬されていた可能性が考えられる。

出土遺物は第59図に図示している。1・2は土壙墓21、3～6は土壙墓23、7は土壙墓8、8～11は土壙墓12、12は土壙墓24からの出土である。1は甕の口縁部、2は高杯の接続部分、3は壺の口縁部で貼り付けの凸帯が2条巡っている。4・5は甕の口縁部で、5は口径15.5cm、内外面とも赤色顔料を塗布している。内面にはヘラケズリを施している。7は碧玉製の管玉で長さ11mm、径3mm、孔径2mm、8はガラス製の管玉で長さ8mm、径5mm、孔径1.8mm、水色で、9～11はガラス製の小玉で青色である。12は無茎凹基式の鉄鏃で長さ3.2cm、欠との接続部分が両方とも錆びにより膨れている。

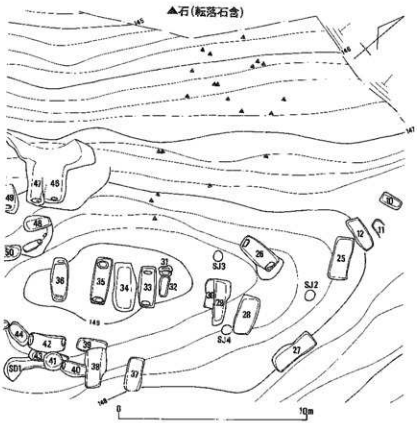
C群（第60～65図）

区画墓1の北側に接し丘陵の最高所である。最高所の標高は149mを測るが、かなり上部は流失しているものと考えられる。そのためか北西側の斜面に転落した石がかなり見つかっている（第61図▲）。この事から区画墓1同様列石が本来は存在していた可能性も考えられる。さらに南東側は溝1（SD1）が存在する。この溝1は土壙墓40とは一連のものであるように見えるが、それより東側には溝らしきものは見られない。ただこの溝1と土壙墓群32～36との主軸が直交関係にある事から、反対側の列石がすでに流失していると考えれば、C群は本来はこの溝1や西側の列石によって区画されていた可能性が大きい。ここでは区画の可能性も考えられるが現状から、この溝1と周辺の土壙墓については別のグループD群として取り扱っている。

C群には土壙墓19基（26～36）と土器棺3基（SJ2～4）存在する。土壙墓は尾根線に直交するも



第60図　C群平面図(S＝1：40)



第61図　C群北側石出土状況(S＝1：200)

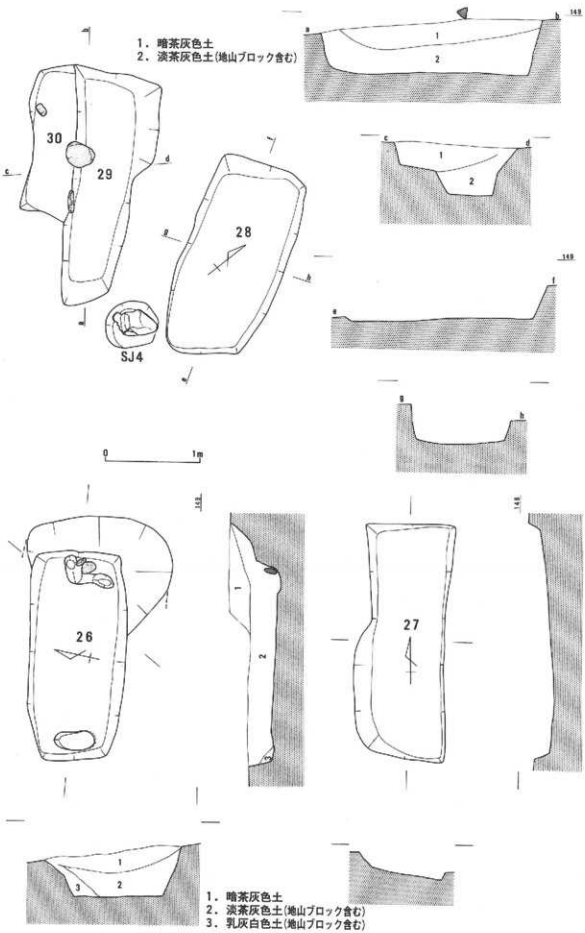
の8基（28～30・32～36）、斜交するもの2基（26・27）、でほとんどが直交するものである。小口溝をもつもの4基（26・33・35・36）ある。26や29の土層関係（第62図）からも木棺の痕跡は見られないが、小口溝が見られない30には側壁材を支えたと考えられる石の出土したものがあり、内部には木棺が置かれていたものと考えられる。29・30には墓標と考えられる大きめの石が中央付近から浮いた状態で存在する。31は小口溝らしきものが1基あるのみで土壙墓ではない可能性も考えられるが反対の小口はすでに流失している可能性も考えられる。小口溝をもつ33と35に挟まれた34には小口溝は存在しないが、この3棺は並列関係にある。

土壙墓からの副葬品は皆無であるが、周辺から出土した土器を第65図に図示している。3・4がそれでともに遺構に伴わず、3は甕、4は高杯の口縁部と考えられる小片である。

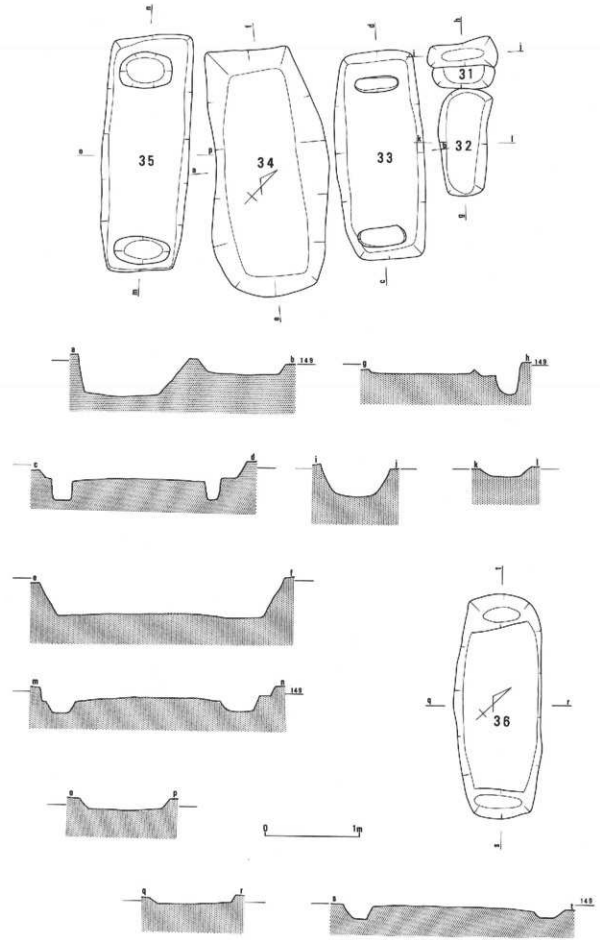
土器棺は3基（SJ2～4）存在し、土壙墓26～30の周辺に三角形に配されている。

土器棺2（SJ2、第64図上）は上部はかなり削平されているが、長径70cm、短径50cm程の楕円形の掘り方で内部に壷が底部を下にして置かれていた。ただ、口縁部と胴部が接続しないため、口縁部を打ち欠いて蓋として使用していた可能性が考えられる。この口縁部は胴部の裏側に落ちた状態で出土した。内部からの出土遺物は皆無である。1は口縁部で口径17.5cm、外面には凹線が3条程巡り、頸部にも同様な凹線が3条程巡っている。2は胴部で底径12.5cm、外面にはタテハケの後ヘラミガキを丹念に施している。内面は上部にナデ痕が観察できるのみである。

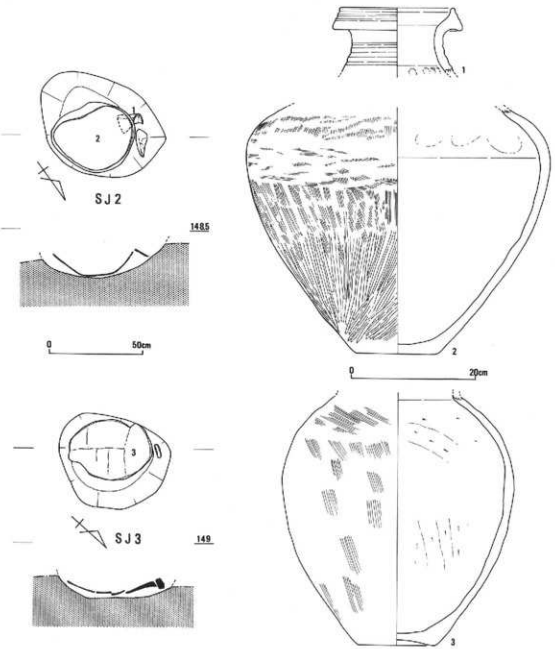
土器棺3（SJ3、第64図下）も上部は削平され全容は明確でないが、現状の掘り方は長径60cm、短径48cmの楕円形で内部には甕の胴部が横にして置かれていた。内部からの出土遺物は皆無である。3は胴部の破片で外面にはハケがわずかに観察でき、内面はヘラケズリを施している。



第62図　土壙墓26～30平・断面図(S＝1：40)

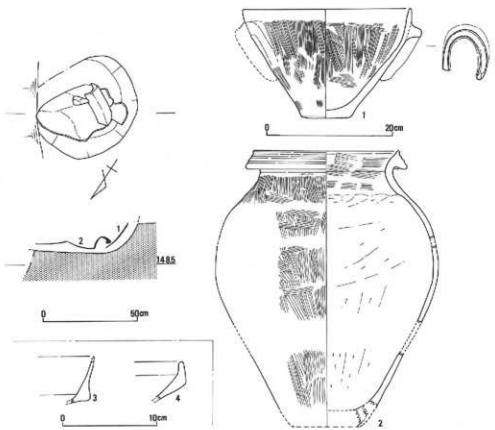


第63図　土壙墓31～36平・断面図(S＝1：40)



第64図　土器棺２・３平・断面図（S＝１：20）及び出土遺物（S＝１：６）

土器棺４（ＳＪ４、第65図）もかなり削平を受け現状では直径55cm程の円形の掘り方に復元でき、内部には甕を横にして置き、鉢で蓋をしていたようである。内部からの出土遺物は皆無である。１は蓋に使用されていた鉢でほぼ完形に復元できた。外面には「∩」の形をした把手が一対ついているが、片方は剝がれていて破片も存在しない。そのため当初から存在していなかった可能性も考えられる。口径26.5cm、底径7.5cm、器高17cmを測り、外面には緻密なタテハケ、内面にも同様なハケを施している。把手粘土をＵ字形に曲げて貼りつけ、断面は台形に近い形状である。２は甕であるが小片となっており、全容は明確でないが、これら破片から復元して図示している。口径22.5cmを測り、口縁の外面には浅い凹線が３条めぐり胴部外面にはタテハケとその上から部分的にヨコハケが見られる。口縁部内面にはヨコハケが見られ、胴部内面はヘラケズリを施している。



第65図　土器棺4平・断面図(S＝1：20)、出土遺物(1・2…S＝1：6)及びC群出土遺物(3・4…S＝1：4)

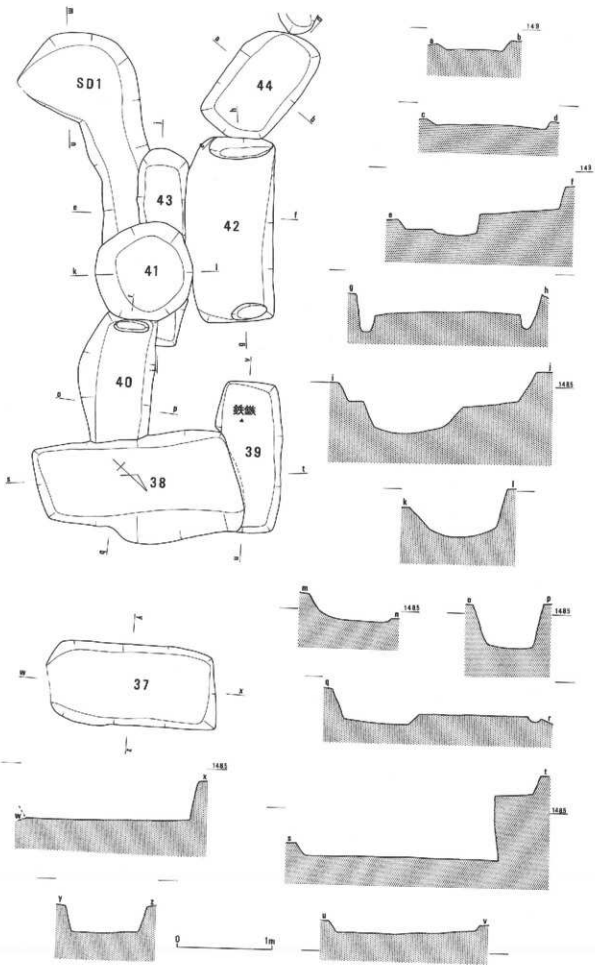
D群（第66～68図）

区画墓1の東に位置し、溝1の周辺に集中する一群である。溝1はL字形をした溝で最大幅70cm、現長2.1m、深さ25cmを測り、埋土はほぼ1層で黒灰色土である。内部から土器片が出土している。この溝1は現状では北東側には続かないが、尾根線に対して平行しており、その位置から本来はC群を区画していたものかもしれない。

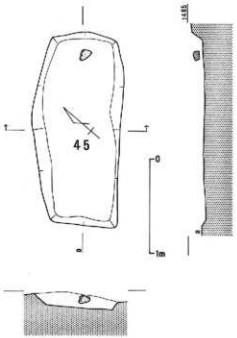
土壙墓群は45のみやや離れて存在し、44は溝2と接続する。土壙墓は9基（37～45）からなり、41のみ円形の掘り方である。この41は溝1、40・42・43を切っている。出土遺物はないがその形状から近世墓の可能性もある。41以外の土壙墓は尾根稜線に直交するもの2基（37・38）、平行するもの5基（39・40・42・43・45）、斜交するもの1基（44）である。小口溝をもつものは40と42の2基であるが、40の片側は38によって切られているため存在しない。45は内部から石が1個出土しているが、枕石とも特定できず、その性格については明瞭でない。

副葬品としては39から鉄鏃1（第68図10）点が出土している。

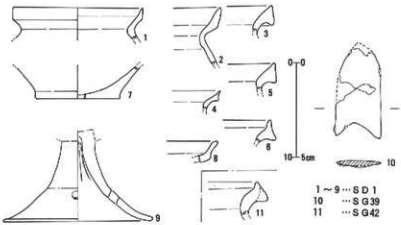
出土遺物は第68図に図示している。1～9は溝1からの出土で、1～6は甕の口縁部で外面に凹線が巡るものとそうでないものが存在し、3や6のように口縁下端を下につまむものもある。7は甕か甕の底部である。9は高杯の脚部で内面にはしぼり痕が見られ、破片のため円孔の配置は明確でない。10は土壙墓39から出土した鉄鏃である。一部欠損し破片から復元し図示している。現長4.5cm、幅2.4cm程の無茎凹基式である。11は土壙墓42から出土した甕の口縁部である。



第66図　土壙墓37～44、溝1平・断面図(S＝1：40)



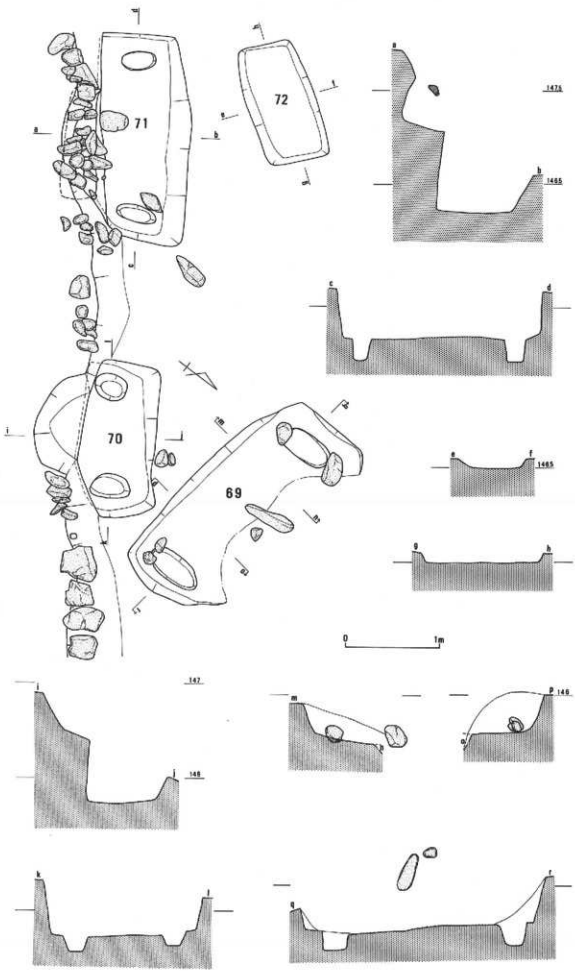
第67図　土壙墓45平・断面図（S＝1：40）



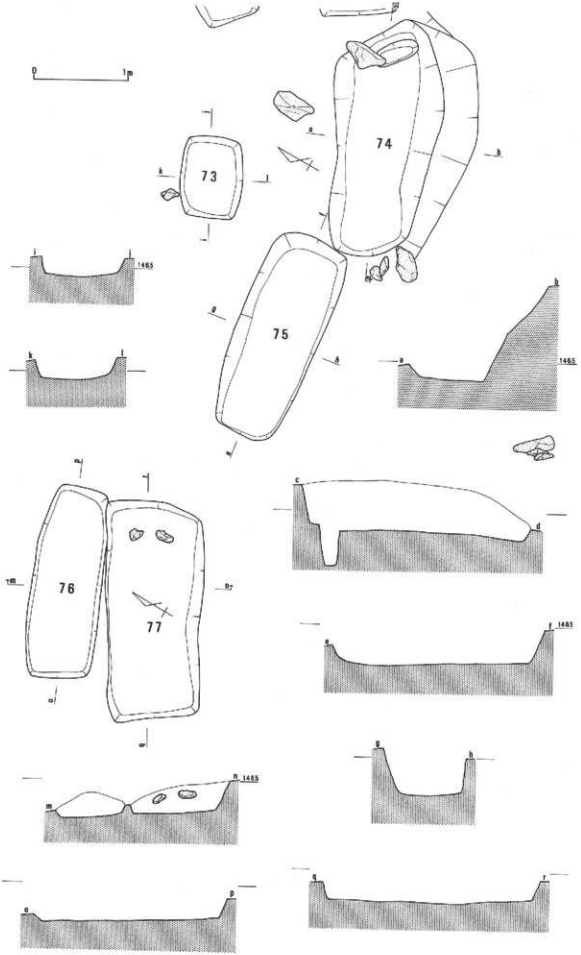
第68図　D群出土遺物（1～9、11…S＝1：4、10…S＝1：2）

E群（第69～71図）

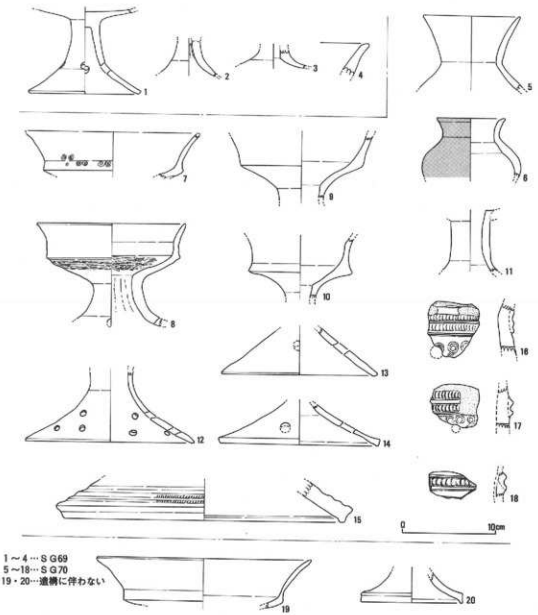
区画墓1の北西側の一群で土壙墓9基（69～77）からなる。土壙墓70・71・74は区画墓1の列石の墳端に平行に配置されている。そのため区画墓1に関連するものと考えられる。土壙墓は尾根稜線に平行するもの7基（70－74・76・77）、斜交するもの2基（69・75）あり、小口溝をもつもの4基（69－71・74）に分類できる。71の南側と区画墓1の列石下部の関係は、第69図のａ－ｂの断面図のように区画墓側の上部にえぐれが存在する。このえぐれは幅1.2m、奥行き45cmの半円形で、このえぐれ部分の上に列石がある。そのため両者の前後関係は列石の方が浮いた状態となっているため、後から置かれているようである。ただこのえぐれと71との関係については明瞭でないが、供献（副葬）品などを置く棚のようなものであった可能性が考えられる。この内部からはなにも見つかっていない。同様なものと考えられるのが70にも付随する半円形状のものが存在する。これの断面図ｉ－ｊではえぐれ部分は存在せず、現状では階段のようになっている。すでに上部は崩壊しているのかもしれない。69は北側側壁はすでに



第69図　土壙墓69～72平・断面図(S＝1：40)



第70図　土壙墓73～77平・断面図(S＝1：40)



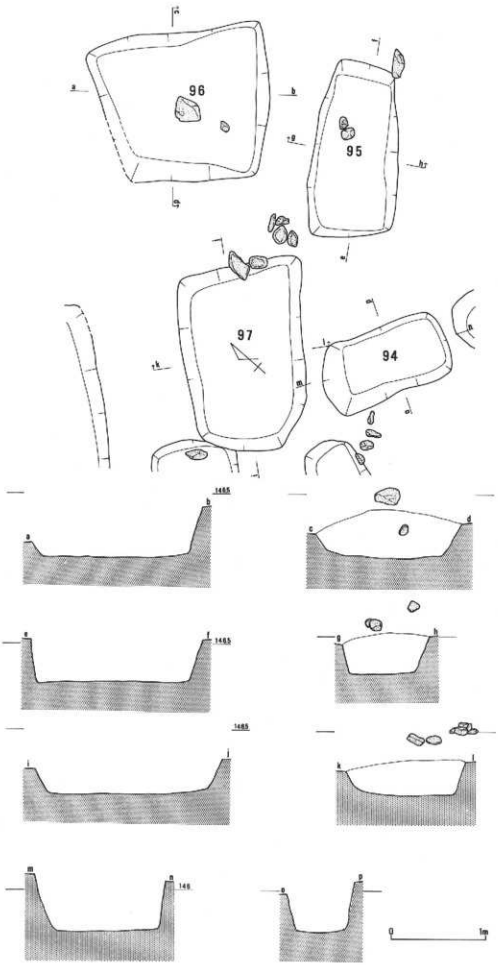
第71図　E群出土遺物（S＝1：4）

流失しているが、墓標らしき石1個と側壁材の支え石が西小口側で存在する。74には片側にしか小口溝が存在しない。77には枕石らしき石が2個存在するがやや浮いた状態であり、その性格については明瞭でない。いずれの土壙墓からも副葬品は出土していない。

出土土器は第71図に図示している。1～4は土壙墓69、5～18は土壙墓70からの出土で、19・20は遺構に伴わない土器である。1～3は高杯で1には円孔が4カ所あり、5・6は壷で6の外面には赤色顔料が塗られている。7～14は高杯か器台で、7の外面にはS字状渦巻き文が見られる。8の杯部の内外面には細かなヘラミガキを施し、脚部には円孔片が存在する。12は円孔が3個単位で4カ所見られ、13・14にも円孔片が存在するがその配置は明瞭でない。15～18は器台で16～18には貼り付けの凸帯があり、くぼみの部分に連続した爪形文を施し、16・17には凸帯のない部分に同心円ないしはS字状渦巻き文のスタンプ文が見られ、円形の透かしの痕跡もある。19・20は高杯である。

F群（第72～77図）

区画墓3の北西側に土壙墓26基（93～118）、土器棺1基（SJ9）がまとまって存在する。土壙墓

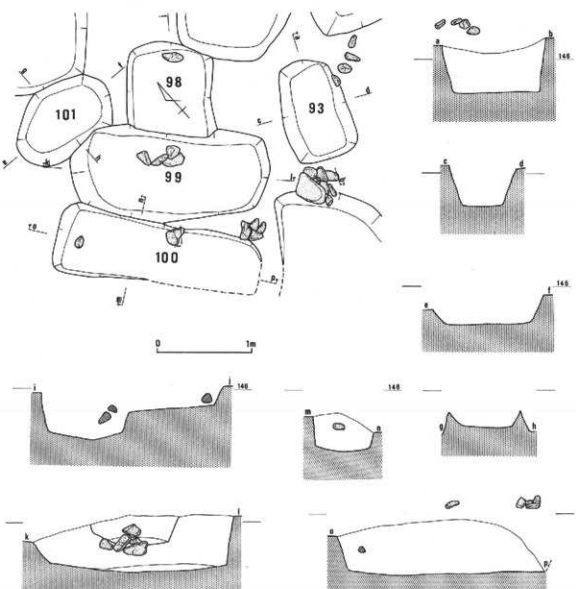


第72図　土壙墓94～97平・断面図(S＝1：40)

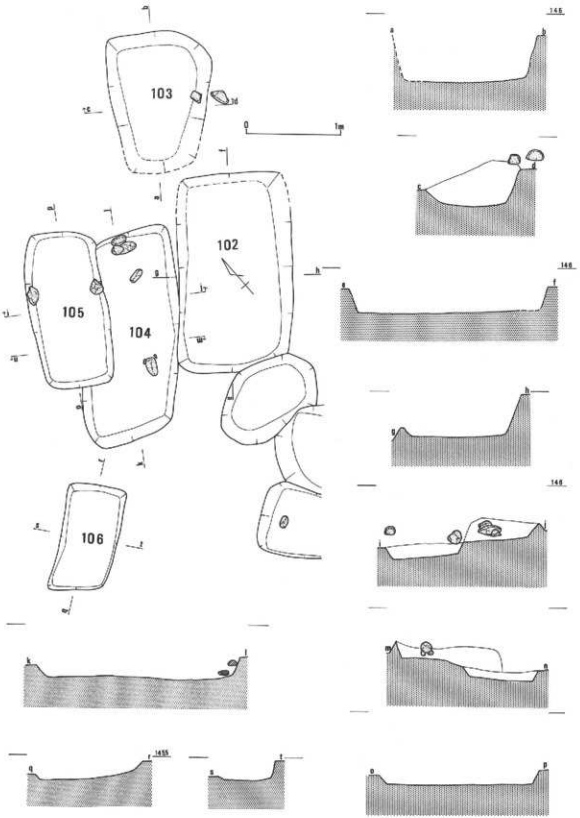
は全長が1m前後の小形のものが6基（93・101・106・110・111・112）程存在する。尾根線に平行するもの12基(95・97・98・102～106・109・116～118)、直交するもの10基(94・96・99・100・107・108・110・112～114)、斜交するもの4基（93・101・111・115）に分類できる。直交するものと平行するものははぼ同数である。また、96は正方形に近い掘り方でやや他とは異なっている。墓標石らしき石のあるもの3基（95・96・100）、側壁材の支え石のあるもの3基（105・115・118）、108のように掘り方が2段掘りであり、枕石のような石が小口側にあるもの、枕石とは考えにくいが小口側から石がまとまって出土したもの2基（107・109）がある。109の小口側の石のかたまりについてはいずれも床面近くにあり、その多さから枕石とも考えられず、その性格については明瞭でない。

副葬品としては113から碧玉製の管玉が1点出土した。この113は墓壙の西側にトレンチが通っているため、掘り方の全容が明瞭でない。管玉の出土位置については不明だが単品で出土している。

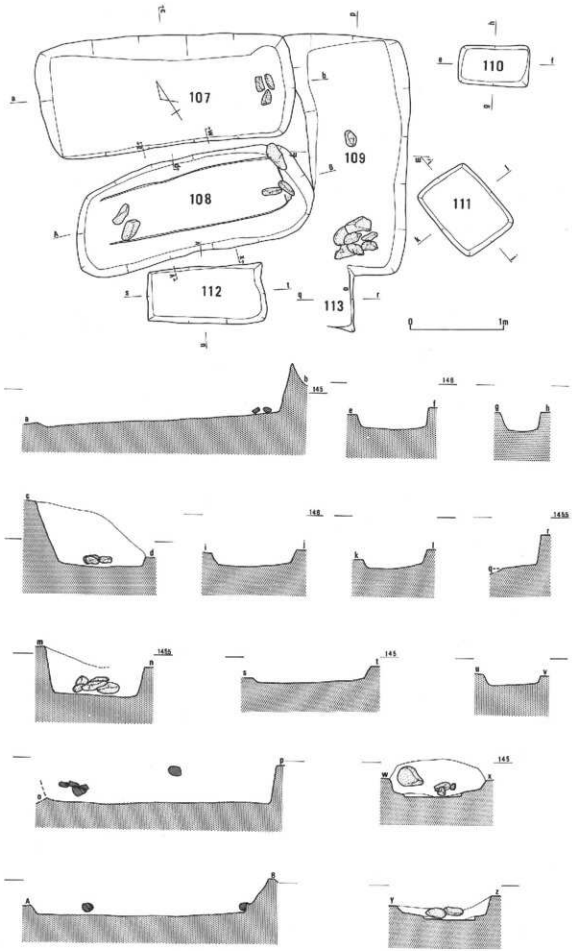
出土遺物は第77図に図示している。1は土壙墓96、2は土壙墓113から出土している。1は高杯の脚部、2は碧玉製の管玉で長さ1㎝、径4㎜、孔径1㎜を測る。



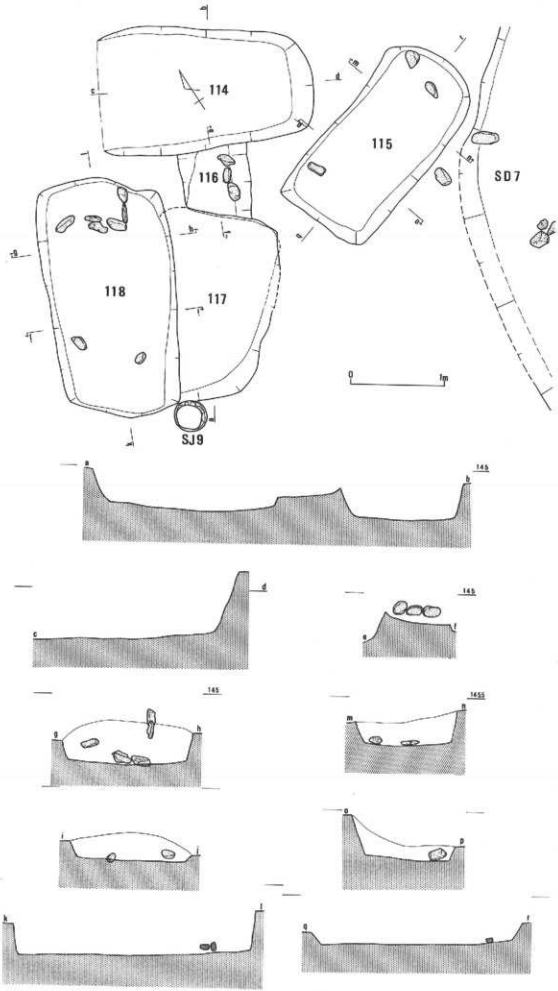
第73図　土壙墓93、98～101平・断面図（S＝1：40）



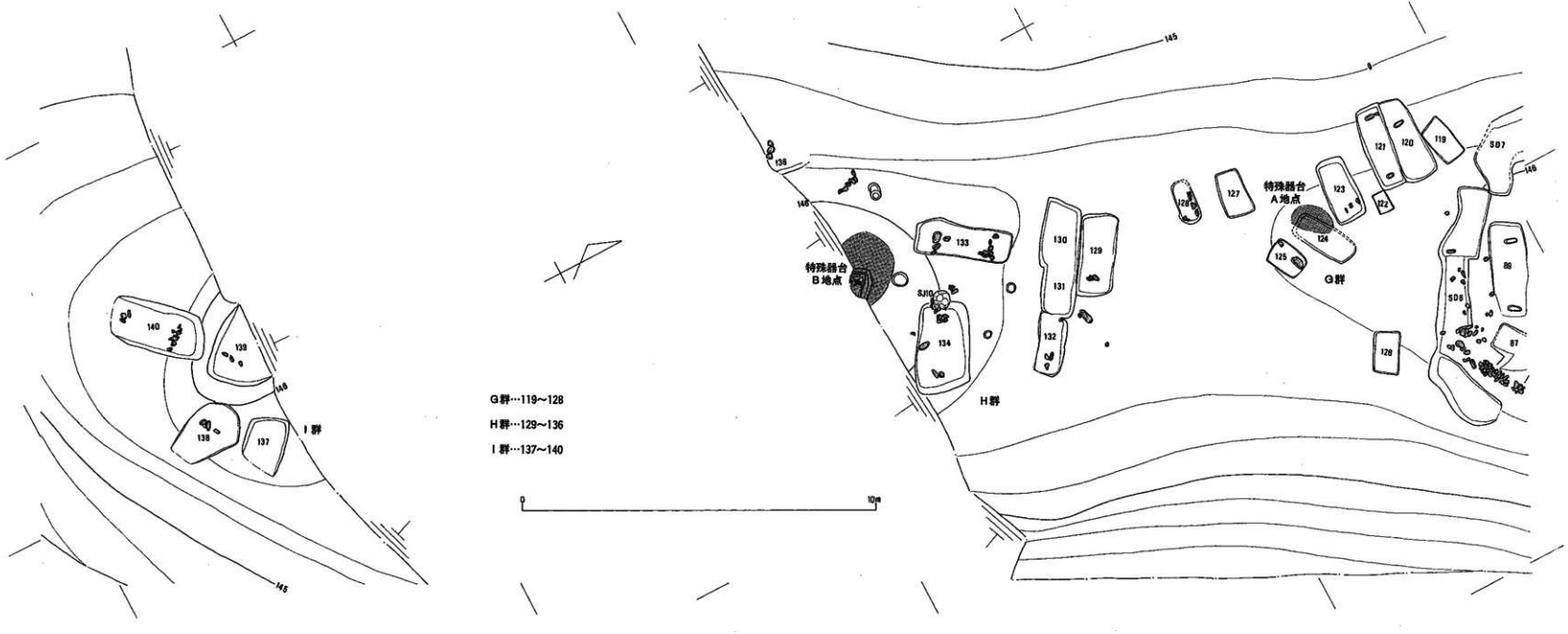
第74図　土壙墓102～106平・断面図(S＝1：40)



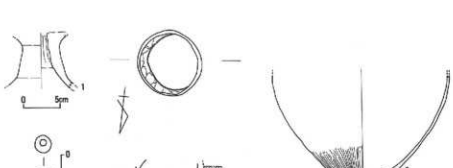
第75図　土壙墓107～113平・断面図(S＝1：40)



第76図　土壙墓114～118平・断面図(S＝1：40)



第78図　G～I群平面図(S＝1：100)



第77図　土器棺9平・断面図(S＝1：20)、出土遺物(3…S＝1：6)及びP群出土遺物(1…S＝1：4、2…S＝1：1)

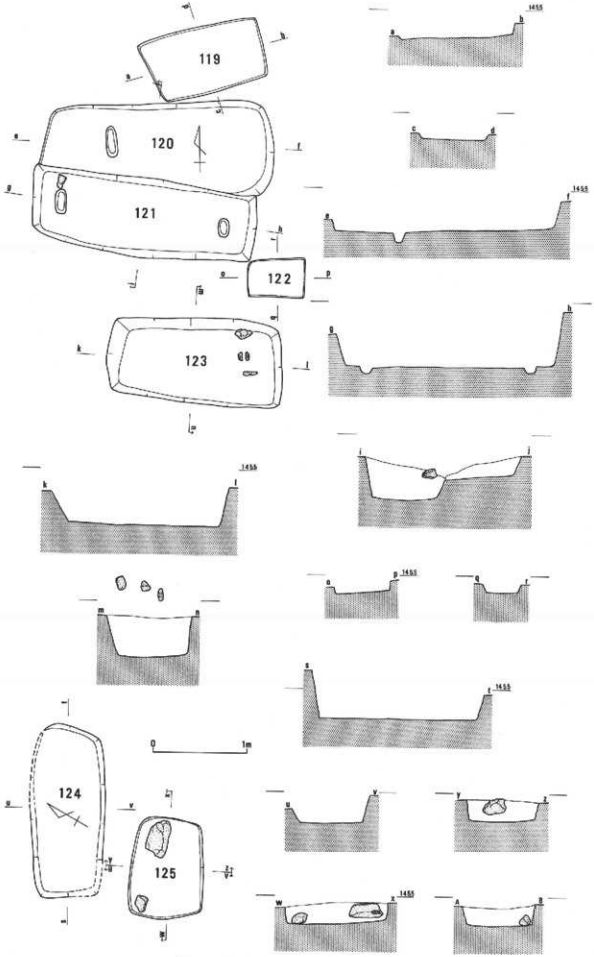
土器棺9（ＳＪ9、第77図）は土壙墓117の南に接して存在し、上部は削平を受け現状で直径34cm程の円形土壙に甕の底を下にして埋めている。3は非常に薄い土器で細片のため接合できず、これら破片からの復元で図示している。表面も摩滅しており外面にはヘラミガキがかすかに底部付近で観察できる程度で、内面の調整は明瞭でない。

G群（第78～80図）

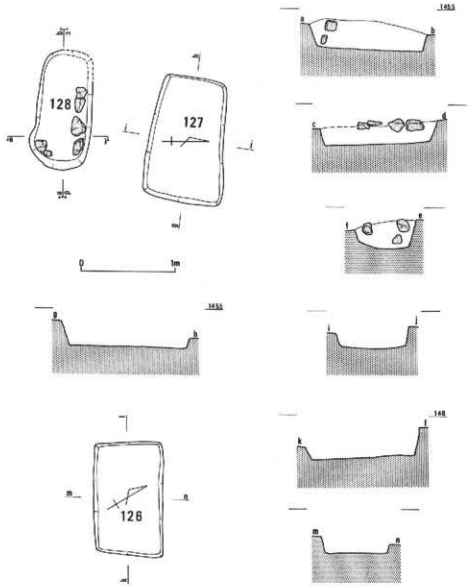
区画墓3の南側に存在する土壙墓10基(119～128)である。土壙墓は尾根線に直交するもの6基(120・121・123・126～128)、斜交するもの4基（119・122・124・125）に分類でき、平行するものは存在しない。121には小口溝が存在し、120には片方だけに小口溝があるがその小口溝もやや中央によっている。122は長さ60cm程の最も小形な土壙墓である。123、125、128には側壁材の支え石などの石があり、123については東側小口にしかない。125は東側にはやや大きめの石があり側壁材の支えにしては大きすぎる。床面近くにあるが墓標石かもしれない。128は北側壁にそって4個の石を直線的に並べ、南側については小さ目の石である。124の埋土上層（第29図4）から特殊器台の破片が数点出土している。出土した地点は第78図のA地点としている箇所である。第83図の1～3に図示している。これ以外にも破片は多数あるが小片のため図示できるものはない。1は口縁部の破片でやや内傾し、外面は板状工具によるハケ状の平行沈線が巡り、内面には接合痕が観察できる。2は受け部の破片であるが、口縁部が剝がれており、この剝がれた部分にも赤色の顔料が塗布されている。この事から赤色顔料を塗布した後に口縁部を接合している。3は外面に鋸歯文が見られる破片であるがどの場所かは定かでない。その他土壙墓に伴う出土遺物は存在しない。

H群（第81～84図）

GとI群の中央部分、丘陵の頂部の最高所には道路が通り破壊されているため両者の関係は明瞭でないが、この道の両側で便宜的に分けている。土壙墓8基（129～136）と土器棺1基（ＳＪ10）からなる。130～132は一直線に並んでおり丘陵切断の溝の役割を担っていた可能性が大きく、道の通っている部分を区画していた可能性も考えられる。132には枕石らしき石2個と墓標らしき石1個が存在する。枕石はハの字に石を置き、墓標らしき石は現状ではやや倒れているが、立てられていた状態で出土している。129は東小口側に3個の石が床面からやや浮いて存在する。この石についてはその配置から枕石ではない可能性が大きい。133は両小口側に石がかたまって出土し、比較的多くの石を使用している。北小口側は枕石と考えられる石と側壁材の支え石があり、前者はほぼ床面近くに、後者は浮いた状態で出土し



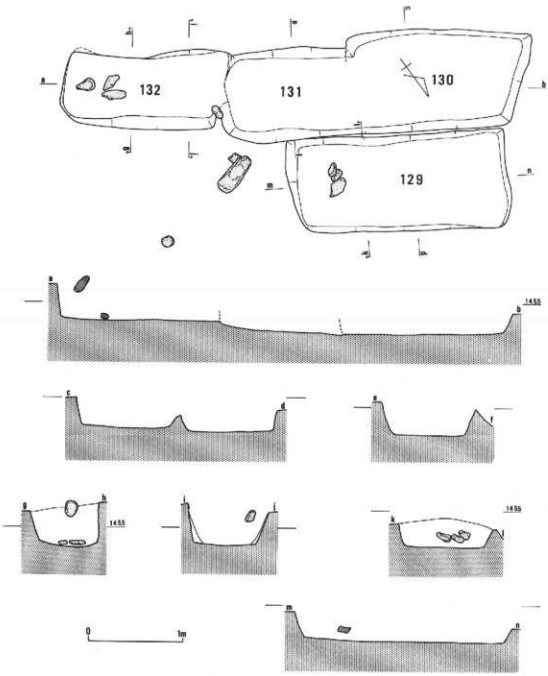
第79図　土壙墓119～125平・断面図(S＝1：40)



第80図　土壙墓126～128平・断面図（S＝1：40）

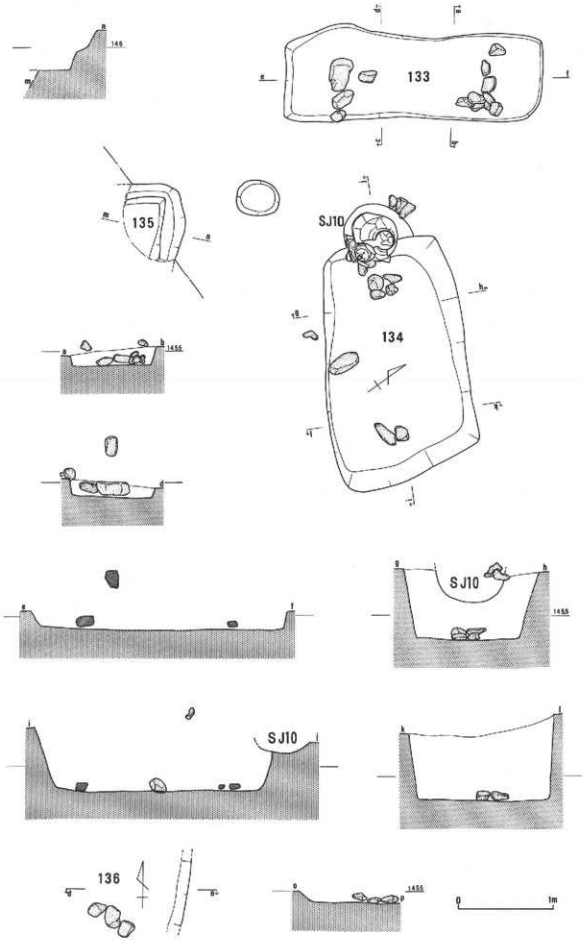
ている。南小口については床面に大きめの石が2個やや東側にずれて存在し、その配置から枕石とは特定できない。また、その東側の石は側壁材の支え、中央にある石は浮いており墓標石と考えられる。134は長さの割に幅の広い掘り方で、西小口側には土器棺10が切り合っている。土器棺の方が後から作られているようである。墓標石が浮いた状態で中央の南寄りに出土し、枕石らしきものが両小口に存在する。東小口の石は床面に2個の石をハの字に配し、西小口は4個の石を四角く配置している。その内前者は石の頭のレベルがそろっている。135の上層とその周辺、道の切通部分から特殊器台の破片が出土している（第78図B地点）。この135については墓壙のコーナー部分のみであるが掘り方は2段掘りの形状である。136については墓壙の痕跡と石を3個検出しただけである。この石の性格については不明である。

出土した特殊器台の内図示したのは第83図の4～22である。これら以外にも破片は多数存在するが小片のため図示できるものはない。4は口縁部の破片でやや内傾し、端部の形態は1と良く似ているものの器壁の厚さが1よりは薄い。外面には板状工具によるハケ状の平行沈線が巡る。5・6は受け部の破

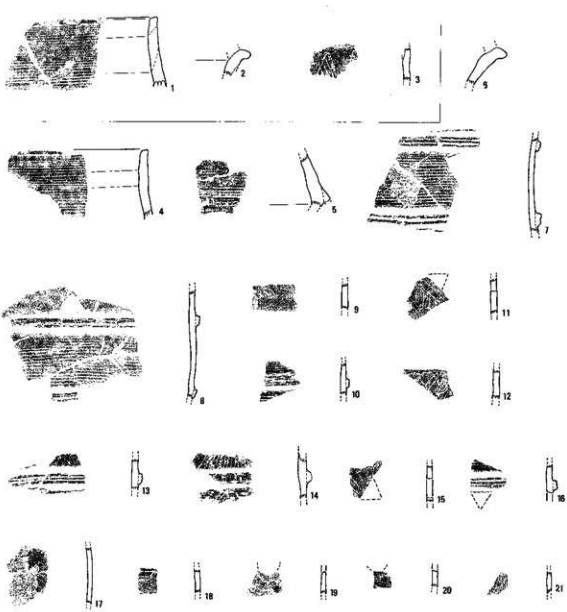


第81図　土壙墓129～132平・断面図(S＝1：40)

片で6は口縁部が剥がれてしまっている。この接合面にも赤色顔料が塗られている。7は文様のない間帯の部分で、間帯の幅は6.5　で外面には板状の平行沈線が巡っている。8～21は文様が部分的に観察できる破片であるが、部分的すぎて文様の復元はできていない。また、8や11・15・16には三角形の透があり、19・20から円形ないしは巴形の透がある事が伺える。これらから文様構成をある程度考えれば、S字状の連続文が9～11から観察でき、このS字状の文様は9から6条の平行沈線で描かれている。さらにその隙間には複合鋸歯文が描かれている事がわかる。これ以外の文様としては14が8などの鋸歯文と比べるとやや大きめの鋸歯文であろう。17はかなり剥落しているが2本の縦方向の平行沈線に区画された中に綾杉文らしき斜行線が観察できる。凸帯は7・13・16のように断面がMの形に近いものが多い。



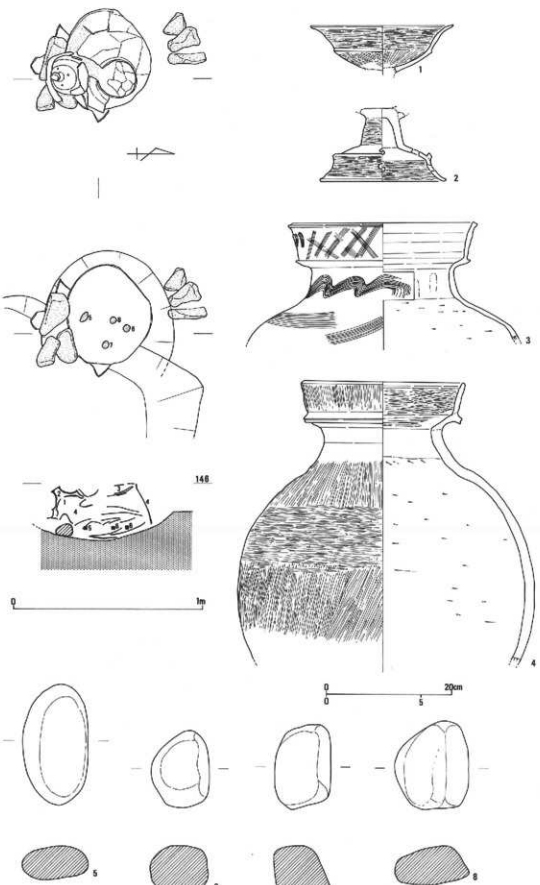
第82図　土壙墓133～136平・断面図(S＝1：40)



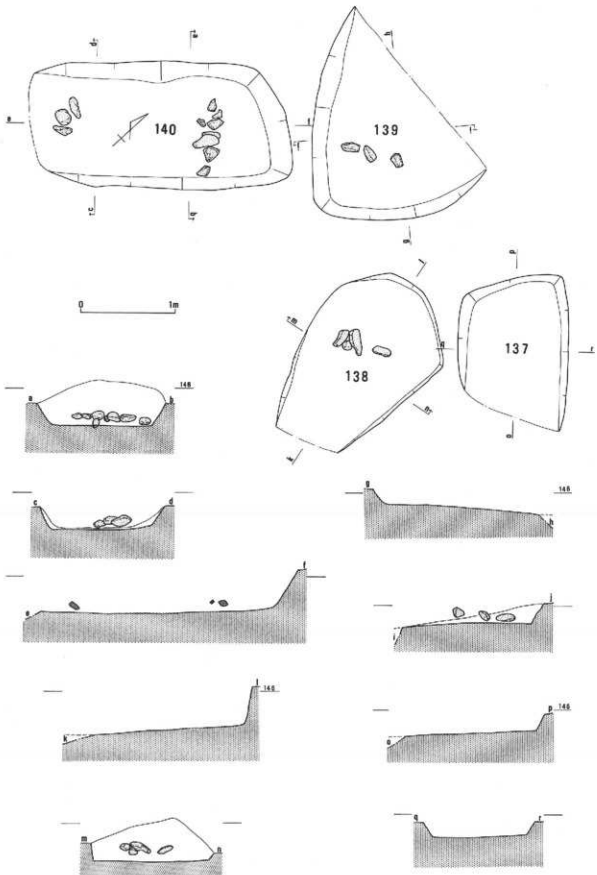
第83図　特殊器台(S＝1：4)

9の内面に横方向のヘラケズリが見られる。22は脚部でおよそ半分程残存し、径を復元できる。底径41cmを測り、屈曲部にはやや突出した細みの凸帯が巡る。表面は摩滅のため調整は明瞭でないが内面は横方向のヘラケズリを施しているものと推測される。

土器棺10（第84図）は直径65　程の円形の土壙に壺の胴部の破片を敷き、その上に壺（3）の上半部を壺（4）の内側に入れて口縁部を上にして立てて、その口縁部を高杯の杯部（1）でまず蓋をし、その上に別個体の脚部（2）で二重に蓋をしていた。この2重の蓋の高杯、3・4の壺を取り除いて内部の底部分の精査をした結果、長さ4.2～6.4cm程の円い石が4個（5～8）出土している（第84図左下）。出土状況から埋設時に内部に入れられていたもので、後からの流入とは考えられない。これ以外に出土



第84図　上器棺10平・断面図(S＝1：20)及び出土遺物(1～4…S＝1：6、5～8…S＝1：2)



第85図　土壙墓137～140平・断面図(S＝1：40)

遺物は皆無である。ただこの石の性格については不明である。

出土した土器の内1は高杯の杯部で口径22.4cm、現高7cm、口縁は屈曲して緩やかに外反し内外面とも丁寧なヘラミガキを施している。2は1とは別個体の高杯の脚部で底径19.4cm、現高11.5cm、複合の継部である。円孔は2段で4個ずつあいている。外面と内面の一部には横方向のヘラミガキを施している。3は器壁が薄めの二重口縁の壺で、口径28.2cmを測り、口縁部から胴部の一部のみハケ状工具で文様を施している。口縁部には斜格子文や曲線文、頸部には波状文が一部分のみ描かれ、胴部には直線文が全周する。胴部内面の調整はヘラケズリである。4は壺で口径24.7cm、現高44cm、二重口縁で肩曲部はタガのように突出しており、口縁の外面には縦方向のヘラミガキ、内面には横方向のヘラミガキを施している。胴部の外面には縦方向のヘラミガキを施した後に横方向のヘラミガキを部分的に施している。胴部の内面はヘラケズリである。3に比べ厚めの土器である。内部から出土した石（5～8）は、6が花崗岩である以外は岩石名は不明だが、いずれも表面が磨かれている。5は約60g、6は46g、7は65g、8は67gである。

I群（第85図）

H群の南側、道によって丘陵の最高所は削られているため、現状では土壙墓4基（137～140）からなる。土壙墓の南側には溝など区画を施したものは存在しないが、各土壙墓の斜面側がすでに流失している現状から、そのような区画が本来は存在していた可能性は考えられる。そのため前述したように本来はH群を含め区画を施していた区画墓の可能性が考えられ、その場合本土壙墓群では最大規模の区画墓であった可能性が考えられる。ちなみに西斜面にある溝9は本土壙墓群とは関係ない後世のものである。土壙墓は137以外には石が使用されている。138は北小口側やや中央寄りに石が4個かたまっている。これについてもやや浮いた状態のため枕石とは特定できない。139は南小口側に3個の石があり、その配置から枕石とも考えられるが特定できない。140には両小口側にかたまって存在する。北小口側の石の上面レベルがほぼ同一である事から、枕石や側壁の支え石の他に木棺を置く際の根石の可能性も考えられる。南小口側にも3個の石がほぼ床面に同一レベルで存在する。これについてもその性格については北側同様である。本土壙墓に伴う出土遺物は皆無である。

その他どの遺構に伴うか明瞭でない土器を第86図に図示している。1は小形の甕、2・3は底部で2の外面にはヘラミガキ、内面には指頭圧痕が見られる。4・5は高杯で4の杯部外面には横方向のヘラミガキが見られる。5の接合部分の外面には指頭圧痕が明瞭に見られる。6は器台の脚部、7は埴輪のように断面が台形のタガが巡る破片である。外面にはハケなどは見られない。

第86図　遺構に伴わない出土遺物（S＝1：4）

番号	墓壙上縁 長さ	墓壙上縁 幅	墓壙上縁 深さ	墓壙底 長さ	墓壙底 幅	小口溝	小口間距離 小口幅	枕石	尾根線との関係	副葬品	備考
1	240	65	18	200	33	×		○	斜交		A群
2	222	97	36	193	75	×		○	斜交		〃、内部に石有り
3	(204	126	69)	(198	122)	×		?	平行		〃、内部に石有り
4	256	80	48	238	73	×		×	斜交		〃、土器片出土、内部に石有り
5	90	55	11	78	45	×		×	平行		〃、内部に石有り
6	(220	122	33)	(200	120)	×		○	平行		〃、内部に石有り
7	110	87	28	100	81	×		○	直交		〃
8	242	115	47	219	100	×		×	斜交	管玉1	B群、赤色顔料
9	235	(80)	14	217	(66)	×		×	斜交		〃
10	116	49	12	104	38	×		×	斜交		〃
11	(105)	54	7	(98)	50	×		×	直交		〃
12	194	80	10	178	66	×		×	直交	管玉1、小玉3	〃
13	150	73	14	146	68	×		×	平行		〃
14	155	75	23	147	63	片側	38	×	斜交		〃
15	240	91	31	225	68	×		×	平行		〃、炭片出土
16	(172	40	21)	(150	30)	×		×	平行		〃
17	223	74	20	210	62	×		○	平行		〃、内部に石有り
18	(85	67	23)	(80	51)	×		?	平行		〃
19	185	96	20	173	80	×		×	平行		〃
20	(35	72	33)	(26	70)	×		?	平行		〃、土器片出土
21	240	109	79	216	66	×		×	直交		〃、土器片出土、内部に石有り
22	171	85	26	165	65	×		×	直交		〃、土器片出土
23	154	142	27	(138)	132	×		×	不明		〃、円形、土器片出土
24	135	46	32	133	42	×		×	直交	鉄鎌1	〃
25	228	97	45	207	84	×		×	斜交		〃
26	260	104	50	205	86	○	175 44-60	×	斜交		C群、土器片出土、内部に石有り
27	250	93	30	244	72	×		×	斜交		〃
28	211	110	40	190	96	×		×	直交		〃
29	251	69	49	213	50	×		×	直交		〃、内部に石有り
30	154	58	32	150	45	×		×	直交		〃、内部に石有り
31	(48)	75	16	(45)	44	片側	75	×	直交		〃
32	115	53	11	108	35	×		×	直交		〃
33	224	96	14	204	75	○	165 49-50	×	直交		〃
34	264	120	43	220	82	×		×	直交		〃
35	250	95	18	244	80	○	194 57-60	×	直交		〃
36	237	91	8	211	78	○	200 40-50	×	直交		〃
37	(182)	87	43	175	70	×		×	直交		D群、土器片出土
38	210	113	69	202	70	×		×	直交		〃
39	161	72	22	150	54	×		×	平行	鉄鎌1	〃
40	(136	80	48)	(130	50)	片側	37	×	平行		〃
41	108	105	53	80	75	×		×	不明		〃、円形
42	198	(92)	25	183	85	○	172 40-64	×	平行		〃、土器片出土
43	211	47	38	185	40	×		×	平行		〃
44	132	77	7	114	56	×		×	斜交		〃
45	205	94	16	188	71	×		×	平行		〃、土器・炭片出土、石有り
46	(110)	115	46	(95)	90	片側	36	×	直交		区画墓1
47	(170)	84	65	(155)	55	片側	50	×	直交		〃
48	149	78	60	123	44	×		×	平行		〃
49	(155	100	20)	(140	83)	片側	44	×	直交	管玉17	〃

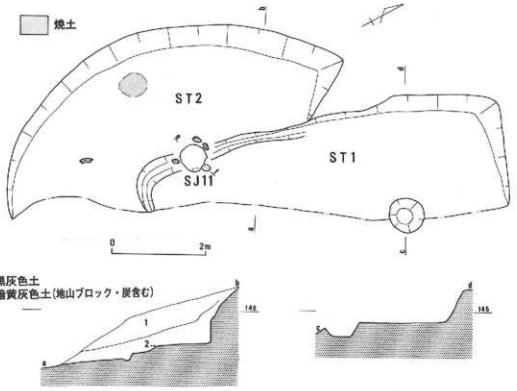
第3表　土壙墓一覧表（1）

番号	墓壙上縁 長さ	墓壙上縁 幅	墓壙上縁 深さ	墓壙底 長さ	墓壙底 幅	小口溝	小口調節層 小口幅	枕石	屈葬姿との関係	副葬品	備考
50	(156	83	45)	140	49	×		×	平行		区画墓1
51	(205	75	22)	(202	65)	×		×	直交		〃 、内部に石有り
52	280	143	41	264	120	○	200 44·54	×	直交		〃 、上器片出土
53	215	110	24	186	76	×		×	平行		〃 、土器片出土
54	105	64	48	78	33	×		×	斜交		〃
55	250	90	56	236	63	○	190 30·36	×	斜交		〃
56	230	84	75	170	52	×		×	平行		〃 、赤色顔料、内部に石有り
57	245	136	89	213	90	○	180 40·50	×	直交		〃 、内部に石有り
58	269	115	37	227	89	○	170 52·60	×	直交		〃 、上器片出土、内部に石有り
59	(136	60	14)	(134	50)	×		×	直交		〃
60	240	123	52	219	101	○	180 44·50	×	直交		〃 、内部に石有り
61	200	75	46	190	56	×		×	平行		〃 、上器片出土
62	208	83	22	197	70	○	180 53·57	×	直交		〃 、土器片出土
63	(230	64	7)	(220	53)	○	196 42·44	×	直交		〃 、土器片出土
64	294	110	34	250	94	○	190 30·57	×	直交		〃
65	(260	100	15)	(245	86)	○	180 40·79	×	直交		〃 、土器片出土
66	124	70	8	116	59	○	100 34·35	×	平行		〃
67	(240	87	17)	(236	77)	○	200 40·45	×	直交		〃
68	(175	70	18)	(169	65)	○	137 36·40	×	直交		〃
69	265	(106)	57	246	(67)	○	195 51·59	×	斜交		E群、土器片出土、内部に石有り
70	165	80	60	153	72	○	108 35·42	×	平行		〃 、土器片出土
71	(223)	93	49	205	79	○	165 37·43	×	平行		〃 、内部に石有り
72	130	71	11	120	54	×		×	平行		〃
73	87	68	21	75	55	×		×	平行		〃
74	240	104	41	226	70	片側	51	×	平行		〃 、内部に石有り
75	222	90	38	205	70	×		×	斜交		〃
76	205	74	28	192	64	×		×	平行		〃
77	232	103	27	218	88	×		?	平行		〃 、内部に石有り
78	284	122	59	258	90	×		×	直交		区画墓2、土器片出土
79	259	110	91	226	47	×		×	直交		〃 、土器片出土、内部に石有り
80	(200	69	56)	(191	56)	×		×	直交		区画墓3
81	140	60	49	120	50	×		×	斜交		〃
82	(105	110)	26	(80	100)	×		×	直交		〃
83	(267)	104	41	250	83	×		×	直交		〃
84	244	96	39	231	77	×		×	直交		〃 、内部に石有り
85	278	134	50	265	119	×		?	直交		〃 、内部に石有り
86	284	155	30	252	90	○	200 43·53	×	直交		〃
87	223	100	59	202	89	×		?	平行		〃 、内部に石有り
88	(230	100)	24	(220	92)	○	195 35·51	×	直交		〃 、内部に石有り
89	(263)	106	12	(256)	98	○	193 36·39	×	直交		〃
90						片側	32	−			〃 、小口溝のみ
91	266	135	74	237	79	○	190 43·53	×	平行		〃 、炭片出土、内部に石有り
92	245	102	79	215	62	片側	40	×	平行		〃 、内部に石有り
93	112	70	59	92	42	×		×	斜交		F群、土器片出土
94	141	72	61	107	57	×		×	直交		〃
95	190	90	45	164	71	×		×	平行		〃 、内部に石有り
96	179	156	72	150	123	×		×	直交		〃 、土器片出土、内部に石有り
97	(187)	130	36	170	103	×		×	平行		〃
98	(104	90	27)	(90	78)	×		×	平行		〃 、内部に石有り

第4表　土壙墓一覧表（2）

番号	掘込上線 長さ	幅	深さ	墓壙底 長さ	幅	小口溝	小口間距離 小口幅	枕石	尾根線との関係	副葬品	備考
99	213	92	52	185	78	×		×	直交		F群、内部に石有り
100	220	64	42	205	55	×		×	直交		〃、内部に石有り
101	118	75	32	90	52	×		×	斜交		〃
102	(182	123	26)	(174	100)	×		×	平行		〃
103	(120	107	45)	(103	80)	×		×	平行		〃、土器片出土
104	220	100	23	200	83	×		×	平行		〃、内部に石有り
105	167	84	15	154	70	×		×	平行		〃、内部に石有り
106	113	62	20	103	52	×		×	平行		〃
107	273	117	71	248	85	×		?	直交		〃、内部に石有り
108	255	100	40	230	90	×		?	直交		〃、内部に石有り
109	257	108	49	241	87	×		?	平行		〃、内部に石有り
110	75	43	16	68	35	×		×	直交		〃
111	90	68	19	78	60	×		×	斜交		〃
112	120	60	17	110	51	×		×	直交		〃
113	(30)	67	36	(25)	65	×		×	直交	管玉1	〃
114	(240)	135	73	(210)	114	×		×	直交		〃
115	221	107	24	202	92	×		×	斜交		〃、内部に石有り
116	(73	75	28)	73	53	×		×	平行		〃、内部に石有り
117	200	(100)	33	183	(93)	×		×	平行		〃
118	255	133	42	245	121	×		?	平行		〃、内部に石有り
119	122	72	19	119	67	×		×	斜交		G群
120	245	(82)	37	233	(75)	片側	32	×	直交		〃
121	240	86	60	222	70	○	175 20-27	×	直交		〃、内部に石有り
122	61	41	15	59	36	×		×	斜交		〃
123	185	90	40	170	73	×		×	直交		〃、内部に石有り
124	183	80	28	170	65	×		×	斜交		〃
125	110	75	22	107	70	×		×	斜交		〃、内部に石有り
126	120	74	36	113	67	×		×	直交		〃
127	133	79	26	125	71	×		×	直交		〃
128	126	59	30	114	49	×		×	直交		〃、内部に石有り
129	234	102	35	219	88	×		?	直交		H群、土器片出土、内部に石有り
130	(195	108	28)	(175	93)	×		×	直交		〃、土器片出土
131	(145	98	36)	(140	75)	×		×	直交		〃
132	167	80	47	167	63	×		?	直交		〃、土器片出土、内部に石有り
133	274	86	29	263	80	×		?	平行		〃、土器片出土、内部に石有り
134	252	147	72	215	129	×		?	直交		〃、土器片出土、内部に石有り
135	(80	67	43)	(50	40)	×		?	不明		〃、骨珠器台片出土
136	(70	100	10)	(70	90)	×		?	不明		〃、内部に石有り
137	(165	118	18)	(140	99)	×		×	斜交		I群、土器片出土
138	(211	135	21)	(168	130)	×		×	斜交		〃、内部に石有り
139	(220	187	16	(152	170)	×		?	直交		〃、内部に石有り
140	(273	135	48)	(247	100)	×		?	平行		〃、内部に石有り

第5表　土壙墓一覧表



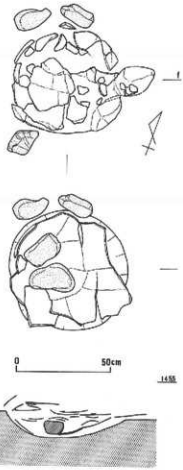
第87図　段状遺構１・２平・断面図(S＝1：80)

段状遺構１（ＳＴ１、第87・89図）

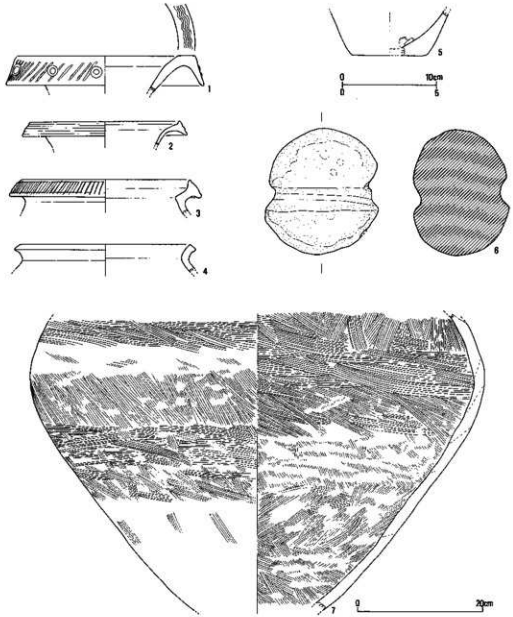
Ｒ・Ｓ－９区、段状遺構２（ＳＴ２）によって切られ形状は長さ7.8m、深さ0.7m程の長方形で平坦面を形成している。斜面傾の床面はすでに流失している部分が多い。壁面に沿って南側のみ幅40cm、深さ20cm程の溝が巡っている。床面北よりに柱穴らしきものが１個存在するが、深さがさほどなく明確な柱穴とは特定できない。

段状遺構２（ＳＴ２、第87・89図）

Ｒ・Ｓ－９区、丘陵の斜面をカットし平坦面をつくっている。段状遺構１を切っており、形状は半円形に近く、長さ7.8m、深さ1.5m程である。床面の壁には溝は巡らず、中央の壁よりに焼土面がやや浮いた状態で１カ所検出された。埋土は２層で上層から土器棺11（ＳＪ11）が出土している。埋土から土器片などが出土し第89図に図示している。１は器台、２は壷で１の口縁は水平方向に外方に開いた後大きく垂れ下がり、外面には斜方向の連続刻目文を施しその上から円形浮文で加飾し、水平部分には５条の波状文を施している。３・４は甕である。３の口縁外面には上下にそれぞれ凹線を巡らせその間に斜方向の連続刻目文を施している。５は底部で６は安山石製の石錘である。くぼみは



第88図　土器棺11平・断面図(S＝1：20)



第89図　段状遺構１・２、土器棺11出土遺物（１～５…Ｓ＝１：４、６…Ｓ＝１：２、７…Ｓ＝１：６）

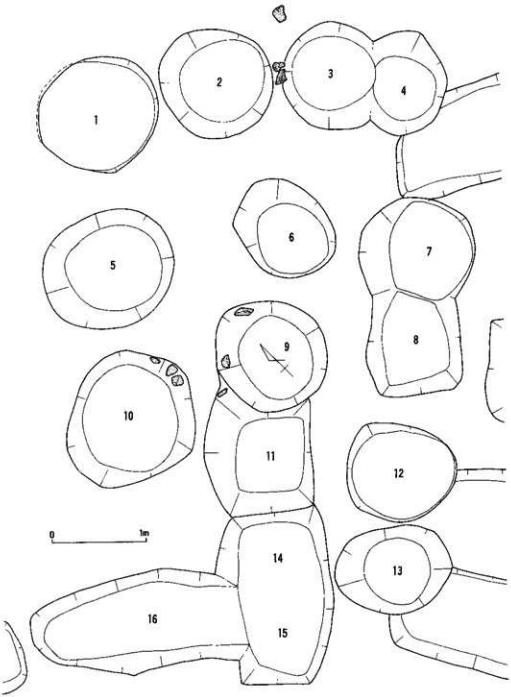
ラセン状になっている。

土器棺11（ＳＪ11、第88・89図）

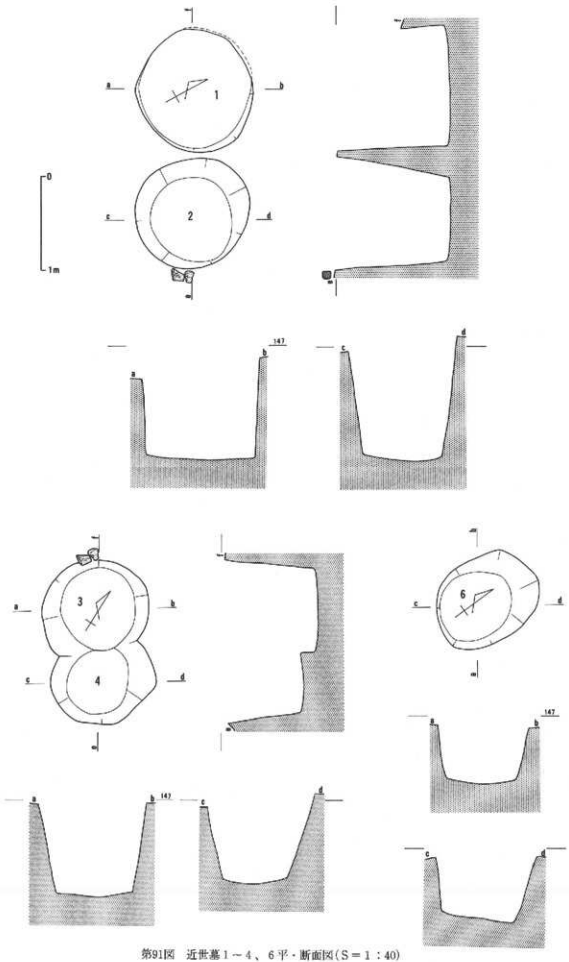
段状遺構２の床面より浮いた状態で出土し、直径65cm程の円形土壙にかなり大きめの壷ないしは甕の口縁部と底部を破砕し、胴部のみを底面に敷き、その上に長さ19cmと24cm程の河原石２個を置き、さらに別の破片で覆っているようである。さらに周辺にも石が３個見られ墓標的なものの可能性が考えられる。ただ内部の石の性格についてはハの字に配されているため枕石の可能性も考えられるが、土器棺であるためその可能性は薄いと考えられ、その性格については明瞭でない。埋土状況から段状遺構２の廃絶後やや埋没した段階に築かれ、段状遺構と同時に埋まったものと推測される。第89図７が出土した土器で、口縁部と底部は破片がなく胴部のみである。現高47cmを測りかなり大きめの上器で器壁は最大で1.7cmもある。外面は緻密なタテハケの上から部分的にヨコハケを施し、内面は同様なハケでほぼ全面に施している。

b．近世（第90～95図）

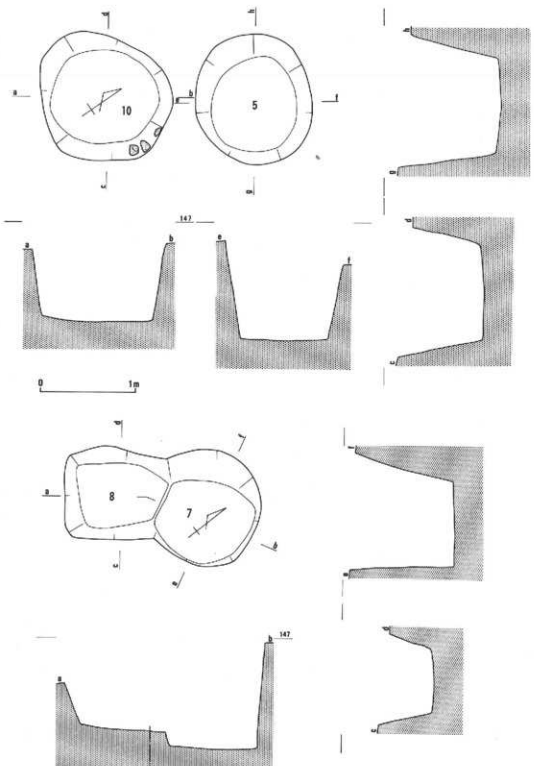
近世の棺桶を16基（近世墓１～16）検出した。弥生時代の区画墓２の西側空白地帯（R・S－5・6区）に墓地の地目があり、墓石などは開発の前に取り除かれていた。そのためここに近世の墓地が存在する事が事前にわかっており、墓石などを取り除く際の石材がかなり散在し、掘り返した所が窪地となっていた。この部分には偶然にも弥生時代の土壙墓はほとんど存在しない。墓域は長辺７m、短辺4.5m程の長方形で平らに整地されており、その中に整然と作られている。円形の掘り方が11基、方形の掘り方が２基、長方形の掘り方が２基である。切り合い関係があるのは３と４、７と８、９と11、14・15と16であるが、明瞭な前後関係がわかるものはない。この事からおそらく墓標など上部構造が当時は存在



第90図　近世墓平面図（S＝1：40）



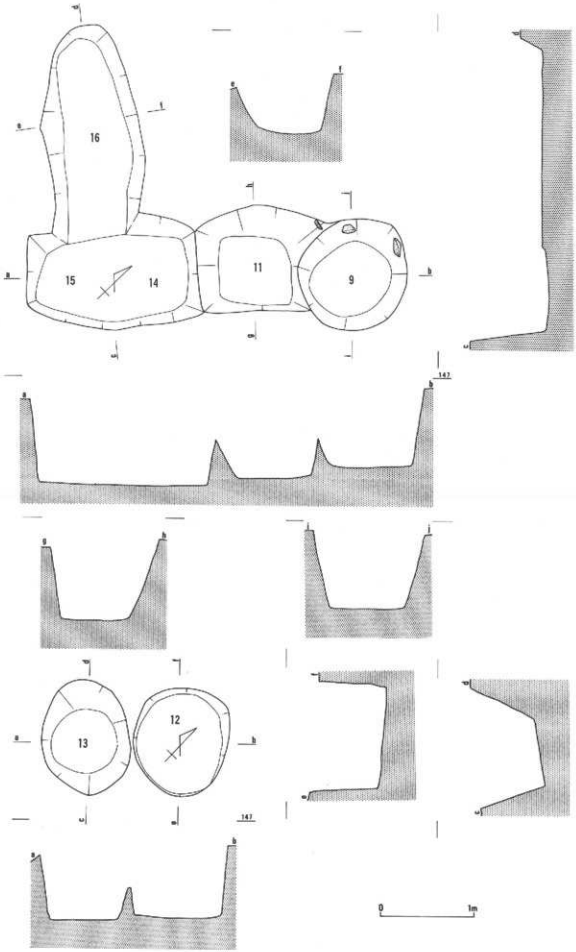
第91図　近世墓1～4、6平・断面図(S＝1：40)



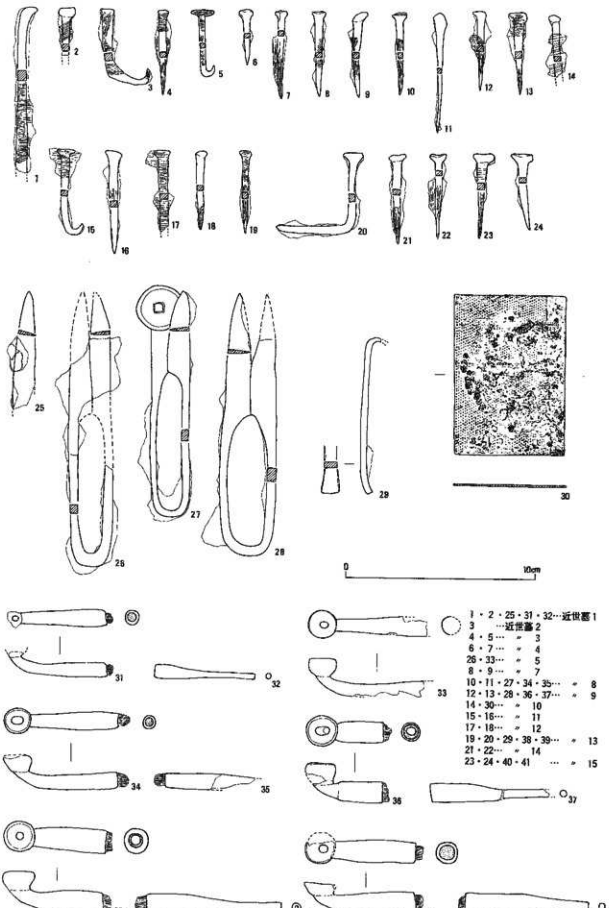
第92図　近世墓5・7・8・10平・断面図(S＝1：40)

し、他の墓を壊す事なくつくられているものと推測される。

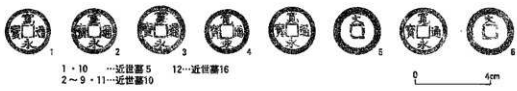
まず特徴としては掘り方が円形と方形の2種類あり、その事から棺痕跡はほとんど存在しないが、棺桶が円い形のものと四角い形のものであった事がわかる。また、その中で14・15は一つの掘り方の中に二つの棺桶を入れている。この両者の前後関係は明瞭でないが、ほぼ同時に埋葬されているものと推測



第93図　近世墓９・11～16平・断面図（S＝１：40）



第94図　近世墓出土遺物(1)(S＝1：2)



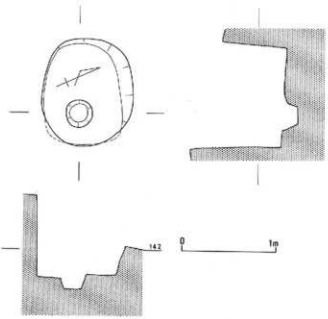
第95図　近世墓出土遺物(2)(S＝1：2)

	形状	現状（m）			副葬品など				寛永通宝					渡来銭	備考
		縦	横	深さ	釘	煙管	鋏	他	古	文	新	鉄	不明		
1	円形	1.27		1.1	3	1	1		1		3		2		炭片
2	円形	1.22		1.33	1						1		5		木片
3	円形	1.13		1.0	7+						1		6		
4	円形	1.1		0.96	2							1	3		
5	円形	1.24		1.06		1	1		1		4		5	1	「天聖元寶」
6	楕円形	1.13	0.9	0.81											
7	円形	1.22		1.05	50+	1									
8	長方形	1.1+	0.98	0.6	67+	1	1		1		2		2		炭片
9	円形	1.18		0.81	16↑	1	1+				3	4	2		
10	円形	1.42		0.84	1			鐘	9	4	4		2	2	「永樂通寶」,「大聖元寶」
11	方形	1.1+	1.13	0.77	110+						2	4			
12	円形	1.17		0.69	19+								5		炭片
13	楕円形	1.25	0.92	1.11	25−	1		毛抜				4	2		
14	長方形	1.18	1.2	0.9	14−						2	6↑	4		
15					64+	1	1				5	3	4		炭片、木片
16	長方形	2.23	1.02	0.6					1		4		2	1	木片、「宋通元寶」

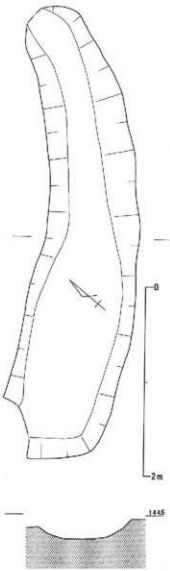
第6表　近世墓一覧表(古…古寛永通寶、文…文銭、新…新寛永通寶、鉄…鉄銭を表す)

される。16に関しては棺痕跡は無く前者の様に二つ堆葬されていたかどうかは明瞭でない。

次に副葬品など出土遺物では釘が大量に出土したものが多い。特に7・8・11・15からは50本以上の釘が出土し、その中でも11からは110本以上の出土である。これら釘の出土位置は底周辺よりはやや浮いた上半分に集中している。また、これら釘の実測図からも木質が付着したもの、先端部分が折れ曲がったものなどが多数存在する事から、棺桶の綴合などに使用されたものと推測されるが、これだけ大量の釘をどのように使用していたかは明瞭でない。また逆に、5・6・16からは釘は1本も出土していない。副葬品では、6以外からは銭貨、煙管、鋏などが出土している。銭貨は「寛永通寶」がほとんどだが中には「永樂通寶」(第95図9)や「大聖元寶」(10・11)、「宋通元寶」(12)がある。この「寛永通寶」も字の形などで時期がある程度分かっている。ちなみに寛永通寶は3期に分けられ1期は古寛永（1～3）と呼ばれは1636～1659年に鋳銭されたもの、2期は新寛永と呼ばれその中でも背面に「文」字があるもの（5～8）で1668～1683年に鋳銭されたもの、3期は新寛永（4）と呼ばれ1697～1747年、1767～1781年に鋳銭されたものである。また、鉄銭は字の判読ができるものが少ないが、おそらく「寛永通寶」であろう。また、渡来銭の内「宋通元寶」の初鋳は960年、「大聖元寶」の初鋳は1023年、「永樂通寶」の初鋳は1408年である。煙管（31～41）は7つの棺桶から出土しそのなかでも38・39は銀メッキされていて立派なものである。鋏（25～28）は5つの棺桶から出土し錆びのため破片となっているものも多い。大きさには多少のばらつきがある。その他、近世墓10から青銅製の鏡（30）、近世墓13からは毛抜（29）が出土している。鏡面の裏側は、中央付近に2つの突起があり、布の痕跡が見られる。その他棺桶の材や炭片の出土したものもある。近世墓の詳細は一覧表（第6表）を参照されたい。



第96図　土壙1平・断面図(S＝1：40)



第97図　溝9平・断面図(S＝1：40)

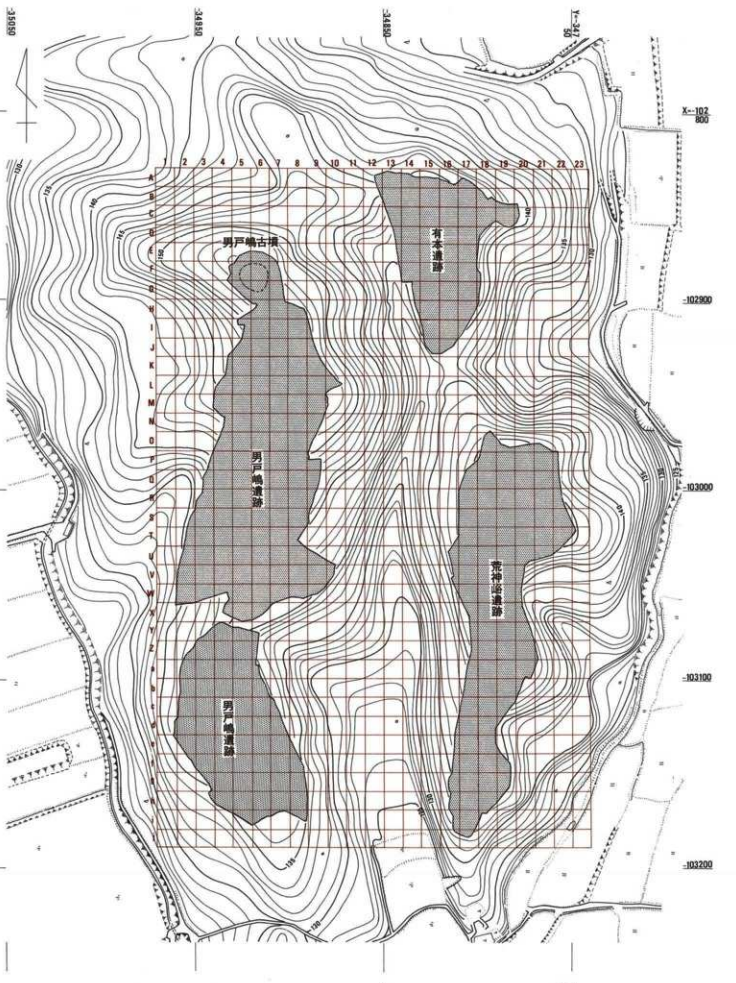
○．その他の時代

土壙1（SK1、第96図）

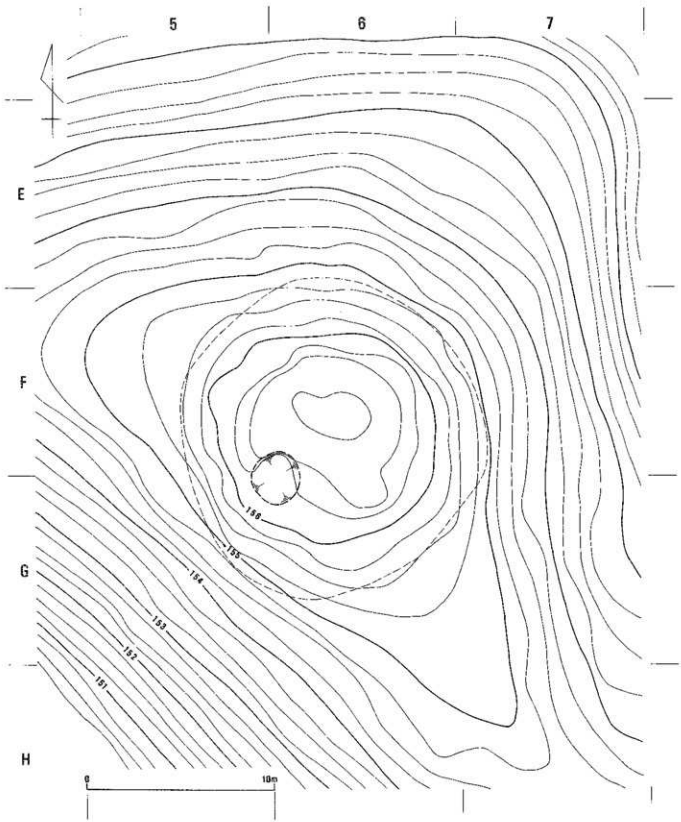
T－2・3区、丘陵の斜面にあり、直径1.1×1m程のだ円形の掘り方で、ほぼ垂直に掘り込まれ深さ1mを測る。底面の中央やや東よりに直径30cm、深さ18cm程の円形の穴が1個存在する。土層もほぼ1層で観察したがこの穴に何かをさしていた痕跡は見られなかった。土壙の形状及びその位置から獣道につくられた狩猟用の落とし穴と考えられる。出土遺物は皆無であるが、時期的には縄文時代と推測される。

溝9（SD9、第97図）

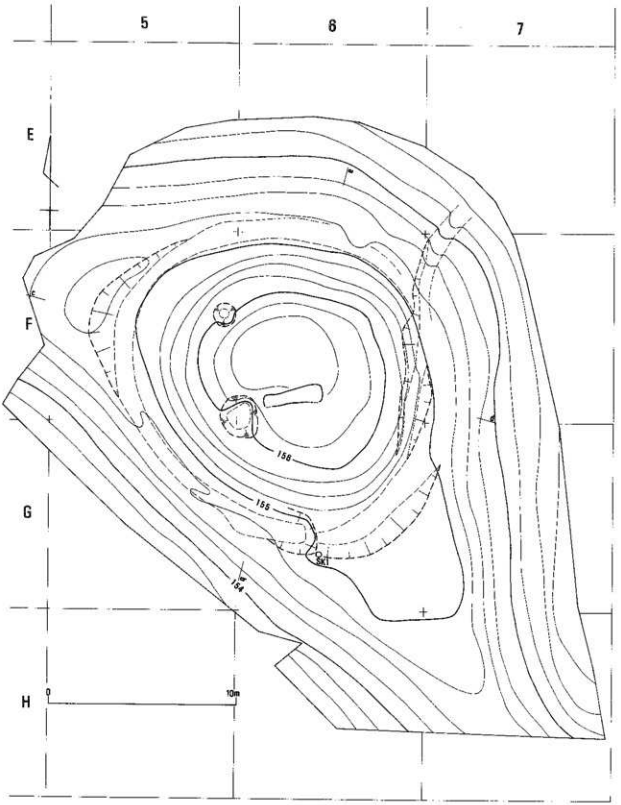
W－9区、緩斜面に存在する長さ4.8m、最大幅1.15m、深さ18cm程の弧状を呈する溝状の遺構である。埋土は1層（黒灰色土）で出土遺物も無いため時期決定は明瞭でないが、埋土も弥生時代のものとは異なるため、弥生時代の墳墓群とは直接関係なく、時代的には新しいものと考えられる。



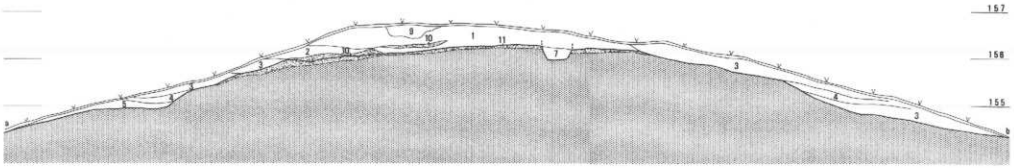
第98図　男戸嶋古墳他周辺地形図及びグリッド配置図(S＝1：2,000)



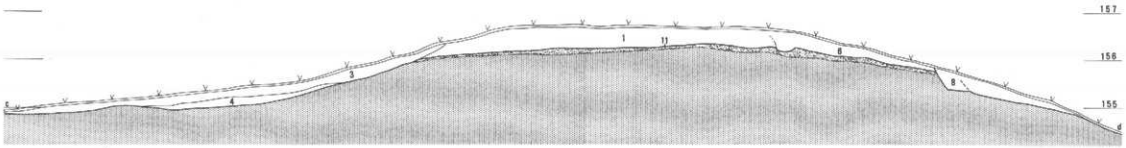
第99図　男ノ崎古墳調査前墳丘測量図(S＝1：200)



第100図　男戸崎古墳墳丘測量図(S＝1：200)



1．暗灰褐色土(地山ブロック含む)
2．暗灰白色土
3．暗茶灰色土
4．黒灰色土
5．赤褐色土(地山ブロック含む)
6．暗黄褐色土
7．暗黄灰色土
8．淡黒灰色土
9．暗灰色土(かく乱土)
10．黒灰色土(旧表土)
11．黒灰色土(旧表土ブロック)



第101図　男戸嶋古墳土層図(S＝1：80)

2．男戸嶋古墳

（1）位置と立地（第98図）

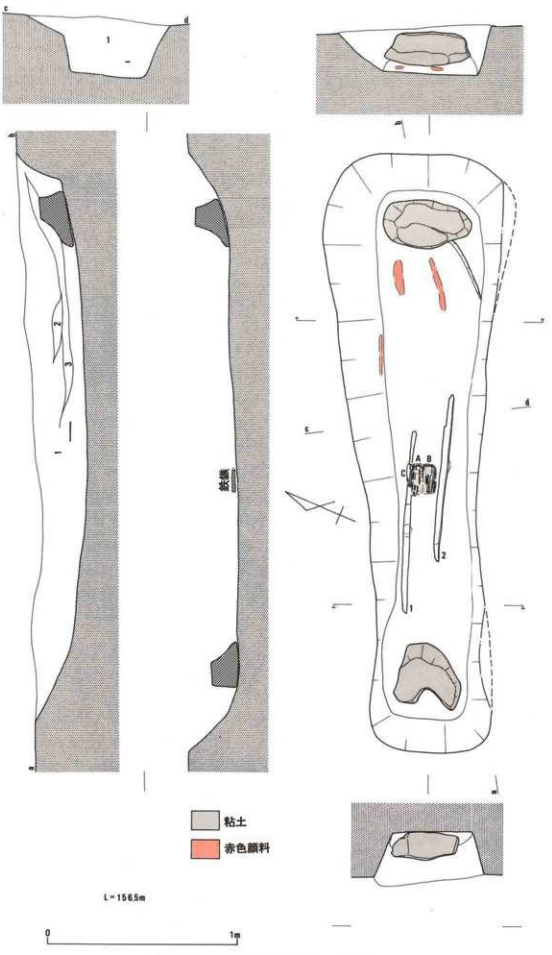
男戸嶋古墳は、岡山県津山市戸島638番地に所在する。流通センター建設予定地の東側南半分に南北に連なる2つの丘陵があり、それぞれに弥生時代などの集落が存在する（第98図）。その西側の丘陵を男戸嶋遺跡と称し、その北端最高所に本古墳は位置している。本古墳は周知の遺跡ではなく、造成計画確定後の分布調査で新たに確認したものである。本墳からの見晴らしは良く、北側は有本古墳群や田邑丸山古墳群などの丘陵を望み、南側は逆に展望が開け院庄の平野部をかなたに見下ろす事ができる。本墳の位置する標高は155～156.5mを測り、周辺平野部との比高差は32m程である。また、調査面積は650㎡である。

（2）墳形と規模（第99～100図）

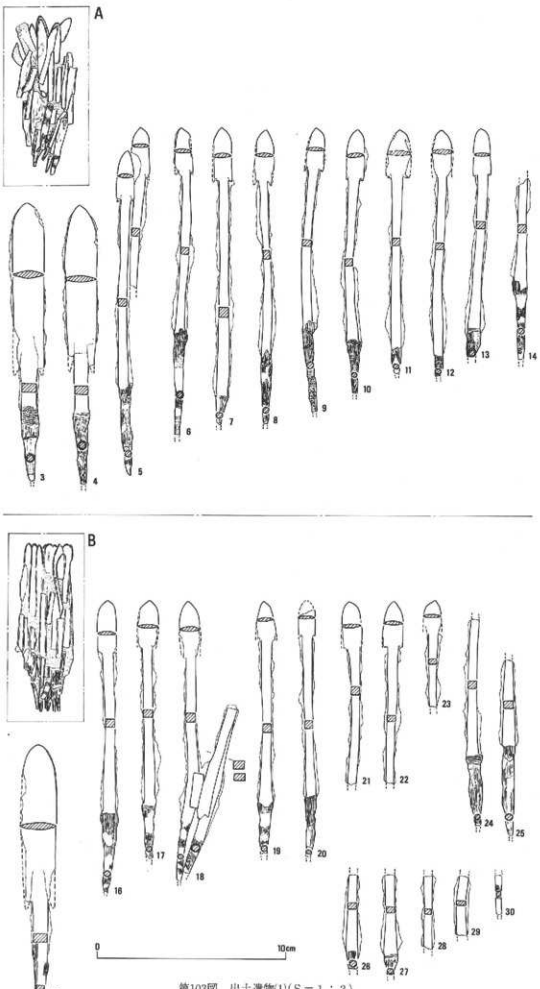
樹木伐採後に調査前の墳丘測量調査を実施した（第99図）。その結果この段階では直径16m、高さ1.5m程の円墳と考えられた。墳丘中央には攪乱穴は存在しないが、中央やや南東よりに直径2.5m程のかなり大きな攪乱穴が存在する。これは恐らく松などの根を掘り出した跡と考えられる。これら以外には目立った攪乱穴は存在しない。調査は東西南北に土層観察用のあぜを残し、表土のあらかたを重機で除去した後、人力で墳丘の検出をおこなった。その結果、北西側と南東側には丘陵切断のための周溝状の掘り込みが存在し、その他の部分は地形的な制約のため明瞭な周溝は存在せず、地山整形による平坦面を確認した。南側の周溝は西側で一段さらに掘り込んでコーナーをコの字に整形している。また、墳丘の東墳端に沿って幅1.5m程の山道が通りそれによって若干墳丘が削られている。表土を除去し周溝を掘り上げ再度墳丘測量を行ったのが第100図である。これによると、本墳は直径南北15m、東西15.5m、高さは西側で1.5m程の円墳で、周溝は北西側で幅2m、南東側で幅2m程を測り、この周溝外端で墳丘を測ると長径20m、短径16m程の楕円形となる。墳丘は周溝などで地山を円形に整形しその上に盛土（第101図）をおこなって構築している。旧表土の上に盛土をおこない、基本的には1層であるが、北側では五層により比較的丁寧に作られ、部分的に旧表土のブロックが混じっている箇所もある。この事は北側の部分の盛土の流失を防いだものと考えられる。墳丘内のほぼ中央に埋葬施設を1基検出し、この盛土を掘りこんで作られているものと考えられる。

（3）埋葬施設（第102図）

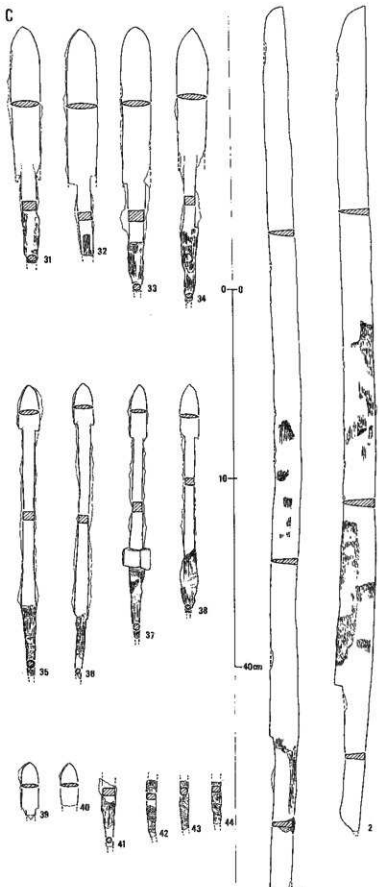
埋葬施設は墳丘のほぼ中央に1基検出した。盛土を掘りこんで造られているため、盛土をある程度掘り下げた段階で、墓壙の輪郭を検出した。墓壙掘り方は、長さ3.15m、東小口幅0.9m、西小口幅0.6m、深さ0.3mの隅丸長方形を呈し、東小口側の方が幅が広い。床面はほぼ平らで両小口側には粘土の塊が置かれている。東小口は長さ47cm、幅25cm、高さ15cm程の楕円形で、断面は台形を呈する。特に木棺側は緩やかにカーブしている。西小口はVの字の形を呈し、南北長35cm、東西長25cm、高さ15cmを測り、断面は台形である。同様に木棺側は緩やかにカーブしている。この粘土の両内側表面が緩やかにカーブしており、床面が平らである事から、木棺の形態をある程度推測する事ができる。底が平である事から割り竹形ではなさそうであるが、両小口側が垂直に立つのではなく、やや緩やかに傾斜をもち、横から見れば船の形に近い形態と推測されるが、土層観察からも木棺の痕跡は確認できていない。木棺の推定主軸はおよそN－67°－Eで、内法全長2.15mを測る。東小口の南側には小さな段がありこれが木棺に



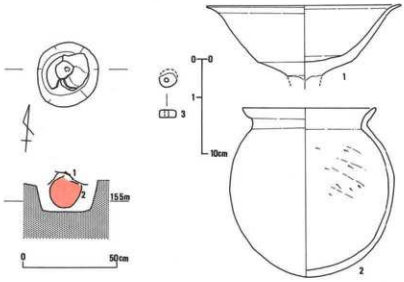
第102図　埋葬施設平・断面図(S＝1：20)



第103図　出土遺物(1)(S＝1：2)



第104図　出土遺物(2)(1・2…S＝1：4、31～44…S＝1：2)



第105図　土壙１平・断面図（S＝１：20）及び出土遺物（１・２…S＝１：４、３…S＝１：１）

伴うものかは不明であるが、伴うものとすれば木棺の形態をある程度推測することも可能である。またこの小口の内側で赤色顔料の散布が２カ所、やや離れて北壁側に１カ所観察できる。この顔料の内前者は分析の結果水銀が微量検出されており、朱が用いられているものの、鉄分も少量検出されている。そのため比較として床面の土と小口の粘土も分析したが、鉄分は赤色顔料と比べると低い数値であった。ただこの鉄分も数値的には低くベンガラかどうかは不明である（註１）。この事から可能性として埋葬施設の場所によって赤色顔料が使い分けされていた事が考えられる。副葬品としては、中央付近に切っ先を西に向けて刀２振りを段違いにやや間隔をあけて置き、この刀の間に鉄鏃を束ねて切っ先を東に向けて置かれていた。ほぼ二束ありＡ・Ｂ群、束でないものをＣ群と呼称している。

その他、南側周溝の西側が１段掘り込まれコの字形に整形され底面がやや平らにつくられており、この部分から滑石製の小玉が１点出土している。そのためこの部分に埋葬施設が存在していた可能性も考えられるが、現状ではその痕跡は確認できていない。

（４）副葬品（第103～105図）

副葬品は中央付近の刀２振りと束となった鉄鏃が複数出土している。鉄鏃は靭か何かにいれて副葬していたかどうかは明瞭でないが、切っ先が揃っており塊まりとなって出土している点から、おそらく靭に入れていたものと推測される。この鉄鏃は大きく２束（Ａ・Ｂ群）あり、その北側にも塊となっていないばらの一群（Ｃ群）がある。Ａ群の取り上げ後の略図が第103図の上にある。これによると若干ばらついてはいるが切っ先はすべて同一方向を向いていた事が伺える。Ａ群は有茎平根式（柳葉式）の鉄鏃２本、長頸式（柳葉式）11本である。Ｂ群の略図（同下）は切っ先がそろっている状況がＡ群よりは明瞭である。有茎平根式（柳葉式）鉄鏃１本、長頸式（柳葉式）鉄鏃は破片が多く、茎の数から少なくとも10本以上である。Ｃ群は有茎平根式（柳葉式）が４本、長頸式（柳葉式）は７本以上である。このＣ群には若干Ａ群の破片が含まれている可能性がある。

刀の１は全長94㎝、刃部長7.7㎝、最大幅2.7㎝、刃部外面には木質が一部で確認でき、茎にも木質が観察でき、この部分は木質の上に糸のようなもので巻いている状況が背の部分で観察できる。２は茎部分が一部欠損するが全長87.4㎝、刃部長7.2㎝、最大幅3.5㎝、刃部外面には木質がかなり広範囲に観察

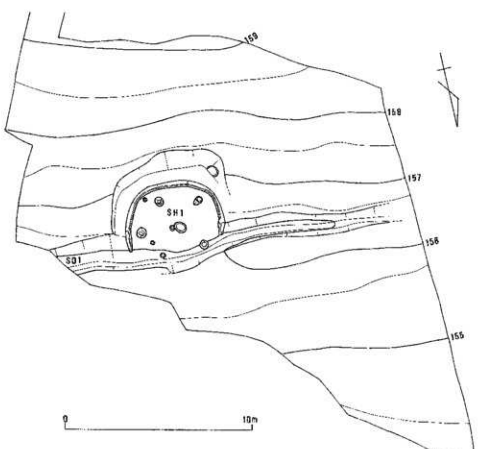
できるが、坐部分には現状では見られない。

以上東小口側の方が幅が広く、刀の切っ先が西を向いている事から東側が頭位と推測される。

また、南側の周溝外縁部に土師器の甕の埋納遺構が存在する（ＳＫ１、第105図）。直径34cm程の円形土壙に土師器の甕をいれ、高杯の杯部を逆にし蓋にしていた。甕の内部には赤色顔料がほぼ満配に入っており、重さは約1.8Kg（砂を含む）、この赤色顔料の分析は甕の底部と口縁部付近の２カ所で行い、いずれも水銀は検出されず鉄分のみで、なおかつベンガラであった（註１）。１の高杯は杯部のみで口縁部は屈曲して緩やかに外反し、口径20.6cm、現高８cmを測り、外・内面とも斜落のため調整は不明である。２の甕は口径14cm、器高17.8cm、ほぼ球形の胴部で丸底、外面は剥落のため調整は不明、内面はヘラケズリを施している。

その他、この上壙西側の１段掘り込んでいる周溝内から滑石製の小玉（第105図３）が１点出土している。小玉は一部破損しており、径5mm程の円形で中央に径１mm程の穴があいている。

(註１)赤色顔料の分析は岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏にお願いし、すでに結果は報告されている。
白石純「有本古墳群・男戸崎古墳出土の赤色顔料について」『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集 津山市教育委員会 1997



第106図　上遠戸崎遺跡遺構全体図(S＝１：200)

3．上遠戸鳴遺跡

（1）位置と立地（第2図）

上遠戸鳴遺跡は岡山県津山市下田邑2352番地に所在する。津山総合流通センター建設予定地は中央を南北に通る谷によって東西2つの丘陵に大きく分けられる。この谷のつきあたりの丘陵北斜面に本遺跡は立地する。周辺には鏡野町が調査した葡萄田頃遺跡が対峙して存在するぐらいで、単独で立地している感がある。本遺跡は標高155～159mに位置し谷部との比高差はおよそ31m程である。

（2）調査の記録

本遺跡も周知の遺跡ではなく、確認調査によって発見された。確認調査は丘陵の全面におこなったが遺構として確認したのは弥生時代の住居跡1軒と溝状遺構1基であり、この部分のみの発掘調査を実施した。調査面積は約400m²である。

a．弥生時代

住居跡1（SH1、第107図）

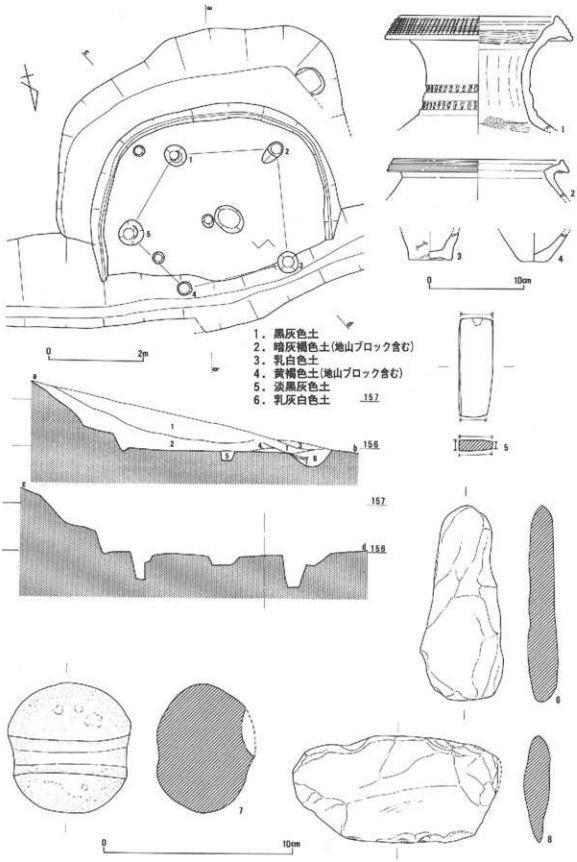
北側に面した斜面を2段に掘り込んだ、一辺6.2m程の隅丸方形に近い住居跡であるが、斜面側は溝1によって切られているため明瞭でない。山側には最大幅1.6m程のテラスが巡り、床面壁にそって溝が巡っている。壁溝は幅36cm程で1条であるため建て替えは行なわれていない。柱穴は5本（柱穴1～5）でどがやや楕円形以外はいずれも円形の掘り方である。中央穴は長径65cmほどの楕円形で深さは24cmとさほど深くはない。

埋土は2層が基本で内部から土器片と石器が出土している。出土遺物の内1は壺で胴部についても破片はあるが接合しないため図示はできない。口径16.5cm、口縁は外方にややつままれこの外面には凹線が5条巡り、その上から斜方向の連続刻目文を施している。頸部には2段に指による楕円形の列点文が巡っている。内面には口縁部と胴部間で横方向のハケが観察できる。2は甕の口縁部でくの字に屈曲し外面に3条の凹線が巡っている。3・4は底部で3はやや上げ底で外面にハケが見られる。5は頁石製の砥石で、長さ5.2cm、幅3.7cm、6面すべてに使用痕がある。6は緑色片製の石斧の未製品と考えられ長さ10.3cm、7は花崗石製の石錘で長さ6.8cm、8は緑色片石製の打製の石包丁で長さ10.8cm程である。

b．その他の時代

溝1（SD1、第106図）

住居跡1の北側標高156m辺りの等高線に平行に存在する、幅2m、深さ50cm程の溝状の遺構である。現状で長さ18m程検出したが、さらに調査区外に伸びているものと考えられる。埋土は1層で砂質土でありこれは弥生時代の住居跡のものとは異なっている。出土遺物がないため時期は明瞭でないが、住居跡1を切っている事から弥生時代以降の溝と考えられる。



第107図　住居跡１平・断面図(S＝１：80)及び出土遺物(１～４…S＝１：４、５～８…S＝１：２)